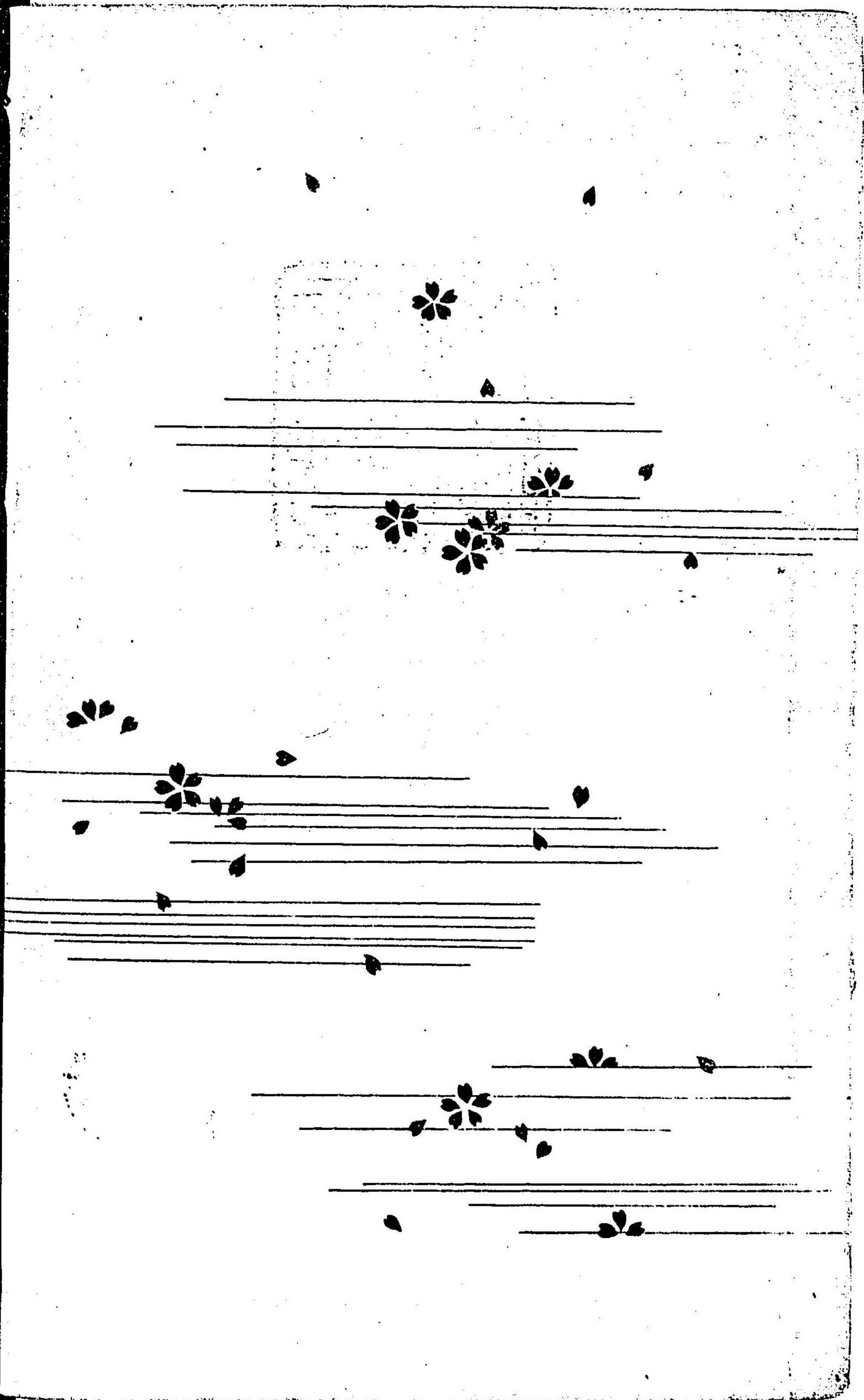


大坂城誌

中

187

74



大坂城誌 華一名浪誌 第五卷

大坂城建築彙考第三

築造下

徳川氏ノ修築

首記 石垣ノ修築及ヒ殿館矢倉等ノ營建ノ概要

此修築ニ在リテモ亦織田氏豊臣氏課役城普請ノ例ノ如ク諸大名ヲシテ掘ヲ掘リ土居石垣ヲ築造スル工役ヲ分擔セシメ徳川氏自身殿館矢倉多門ヲ初メ切リ建物ノ造營工事ヲ執行セリ今左ニ石垣ノ修築ト殿館矢倉多門等ノ營建トヲ區分シテ叙述スヘシ

石垣ノ修築

首記 石垣修築ノ概要

大坂城誌第五卷 大坂城建築彙考 徳川氏石垣修築



元和六年正月十八日徳川二代將軍秀忠伊勢越中以西ナル三十餘國ノ大名ニ課シテ此城修築ノ工役ヲ起シ寛永元年正月五日同五年二月二日ノ兩度ヲ以テ三代將軍家光紹テ殘工ヲ起セリ凡ソ此修築ハ前後十年ノ久シキニ互リ寛永六年ニ至リテ止メリ

此時堀石垣升形等ノ繩張ヲ改メタリ繩張并ニ普請總指圖役ハ藤堂和泉守高虎ト云フ

大坂城御再造覺書

和泉守儀堀石壁虎口等繩張相改一統に普請之差圖可仕之旨蒙上意度々彼地へ罷越家中之者共も年々番代りに相勤申候則普請之儀は相勤候家々に記録仕候

金城聞見録

落城の後所々繩張を改め西國の鎮護と云々しむ

因ニ記ス藤堂高虎ハ能ク徳川氏ノ舉行スル城普請其他土木工事ニ與レリ乃々高虎ハ慶長九年ニハ伏見城ノ水之手繩手ヲ修築シ慶長十一年江戸ノ城普請ノ時ハ家康ノ繩張ノ議ニ參與シ慶長十五年丹波龜山ノ城普請ノ時ハ自己ノ私財ヲ以テ龜山城ノ天主矢倉ヲ營建シ元和二年ニハ日光山ノ東

照宮々地ノ繩張ヲ爲シ元和五年二條ノ城普請ノ時ハ秀忠ノ繩張ノ議ニ參畫シ寛永三年江戸上野ノ東照宮々地ノ繩張ヲ成セシ類是レナリ

茲ニ右工役ヲ區分シテ綜叙スルコト左ノ如シ

元和六年北ノ外曲輪三之丸及ヒ二之丸西北東ノ三面ニ著手シ元和八年本丸ノ天主ニ著手セリ是レテ最初ノ工役トス

寛永元年本丸及ヒ山里丸ニ著手セリ是レテ第二回ノ工役トス此時ノ普請奉行ハ戸田采女正氏鐵加々爪民部少輔忠澄日下部大隅守宗好ナリ

台徳院殿御實記寛永元年甲子本丸山里丸修築の條

石垣修築奉行戸田采女正氏鐵加々爪民部少輔忠澄日下部大隅守宗好

寛永五年二之丸南面ニ著手シ且元和六年ヲ以テ修築セル所ノ大手并ニ玉造口ノ升形及ヒ橋臺土橋トモ稱スヲ築直ホシ寛永六年玉造口内ノ定番屋敷東手ヲ築直ホセリ是レテ最後ノ工役トス此時ノ普請奉行ハ戸田采女正氏鐵加々爪民部少輔忠澄堀式部少輔直之ナリ

同記寛永五年戊辰二之丸南ノ曲輪修築ノ條

石垣修築奉行戸田采女正氏鐵加々爪民部少輔忠澄堀式部少輔直之

大坂城誌第五卷 大坂城建築叢考 徳川氏 石垣修築

漕運ニ利便ナル位置ニ在ルヲ以テ能ク巨大ノ石材ヲ輸入シ得ル道アルニ因ルナリ

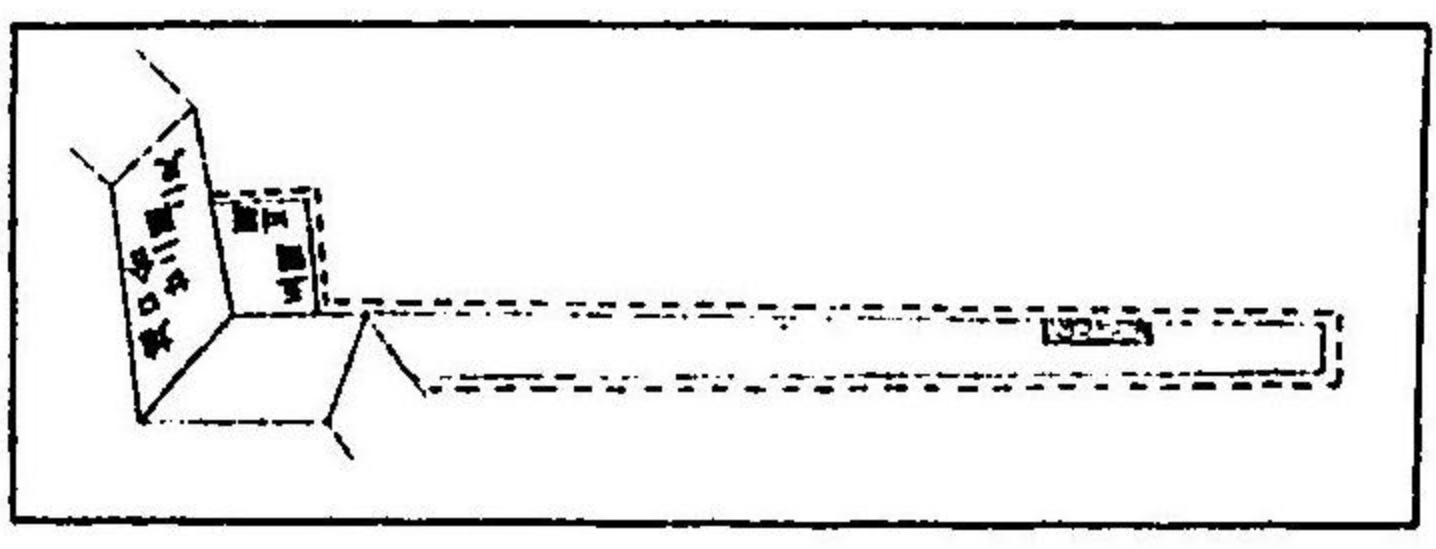
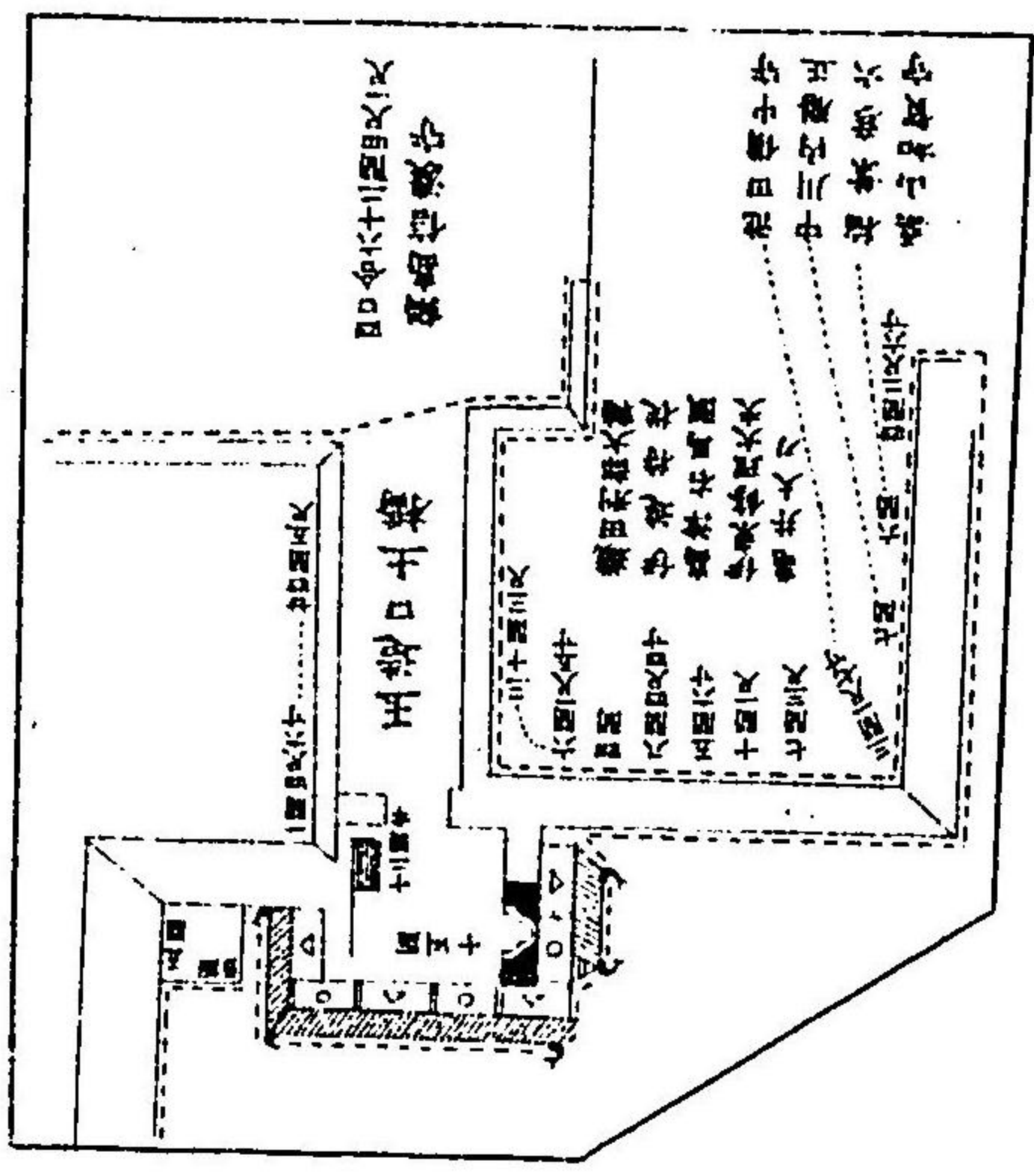
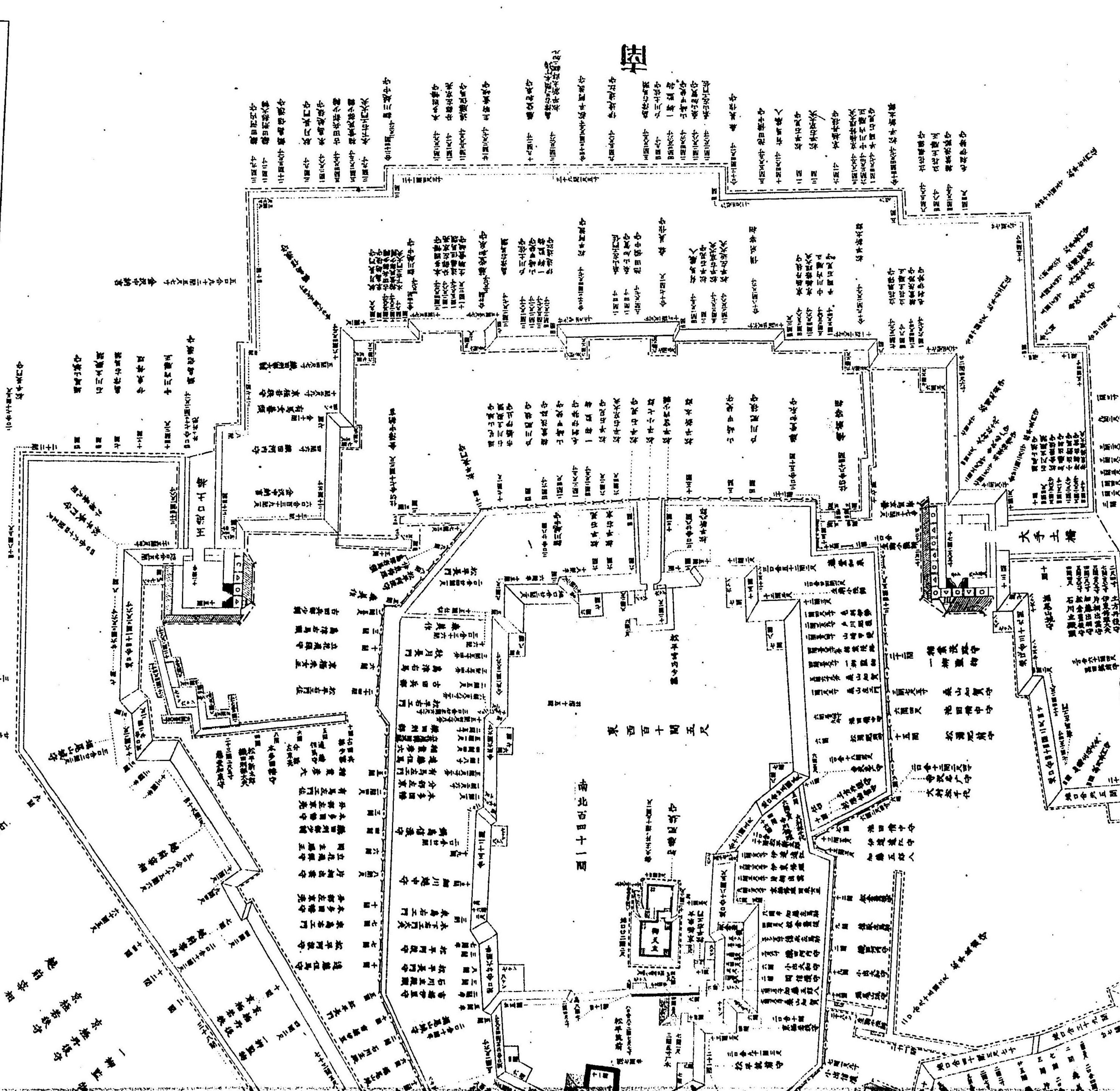
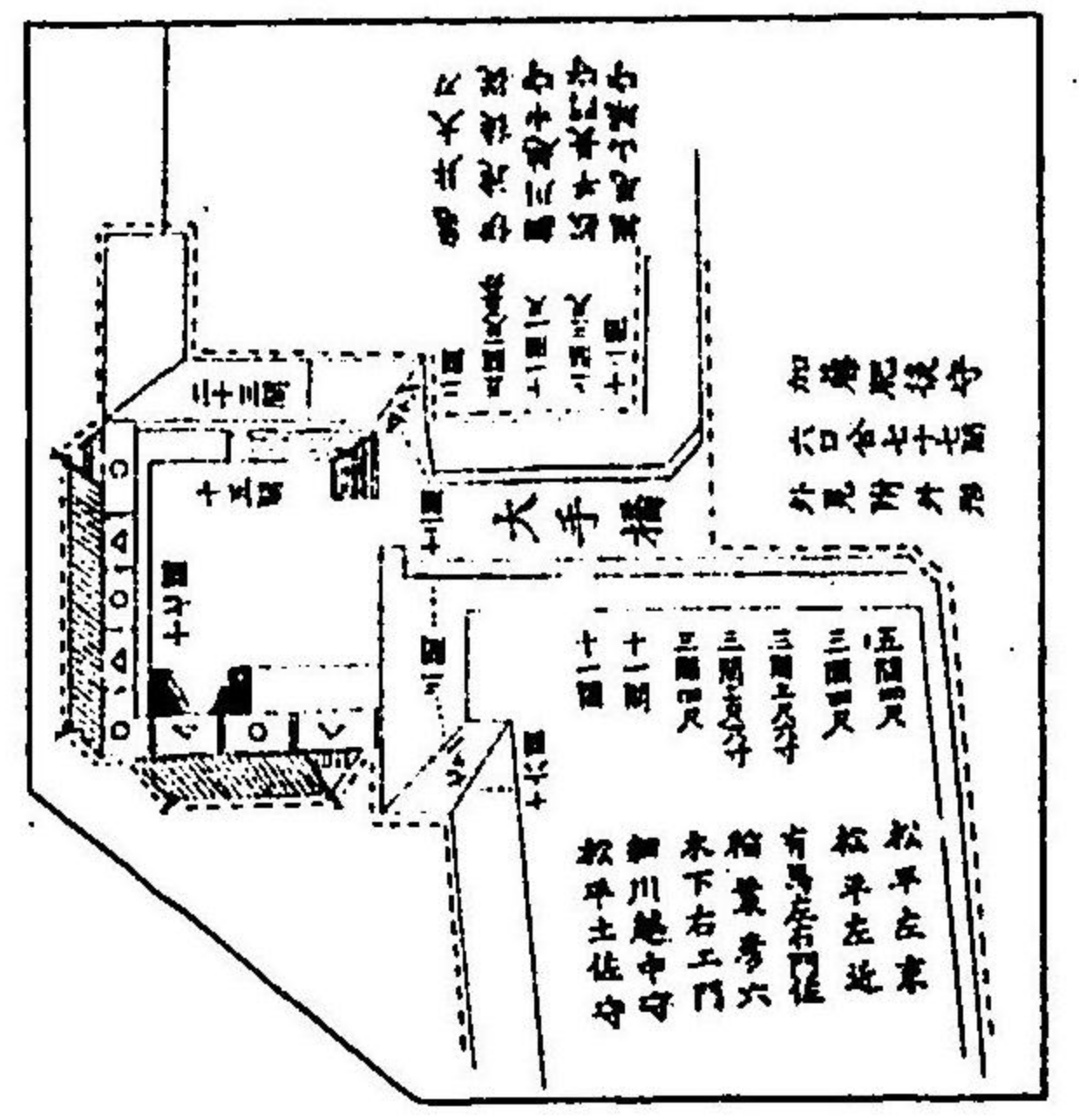
然レトモ此城修築ノ後大坂市街ノ川々ニ巨石散在シテ水理舟行ヲ妨礙セル者ハ此城修築用トシテ漕運スル中轉覆墜落セル所ノ石材ナルコトヲ知レハ利便ナル水路ヲ有スル大坂ノ地ニ在リテモ巨大ノ石材ヲ運搬スル時當局者ノ困難セシ狀情ハ想像スルニ餘リアリ尤モ是等川々ニ在ル石材中ニハ獨リ徳川氏ノ修築ノ時ノ者ノミナラス本願寺又ハ豊臣氏ノ築造當時ヨリ殘存セル者モ或ハアリシコトナラン

斯クノ如ク大坂ノ川々ニ散在スル所ノ石材ハ久シク水理舟行ノ妨礙物ト成リ居タルニ貞享中川村瑞賢大坂ノ河身ヲ修治スル時是等ノ巨石ヲ碎キ割リテ河岸ノ石垣修造ノ材料中ニ收用シタルヲ以テ今ハ河中ニ巨石ノ存在スル者無シ

地理考第十三章及ヒ
第三回工役ノ條參看

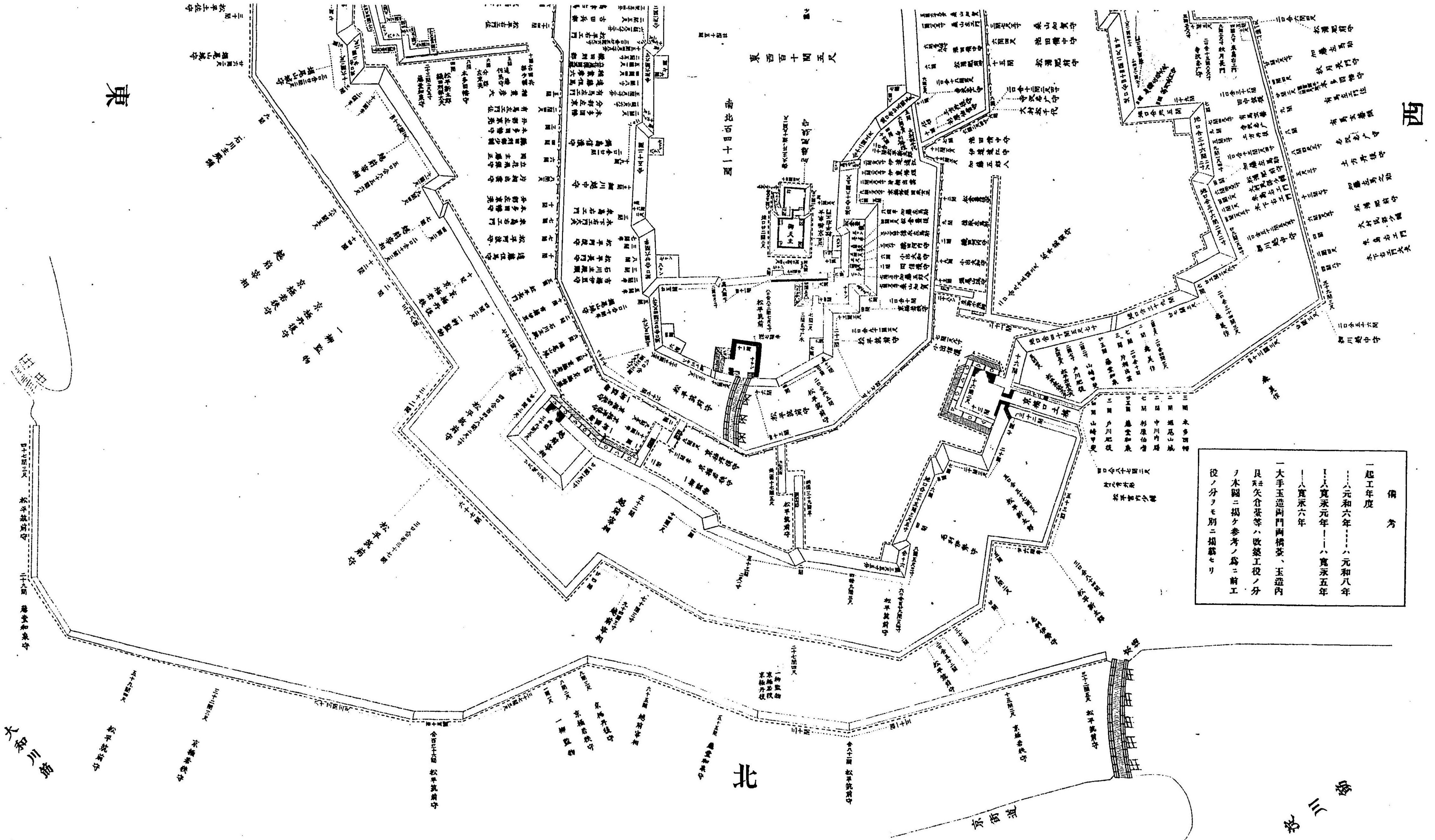
畿内治河記

大坂河水底有亂石傳道往昔工役之餘棄而不收甚礙河流今悉鑿出以充工料



東

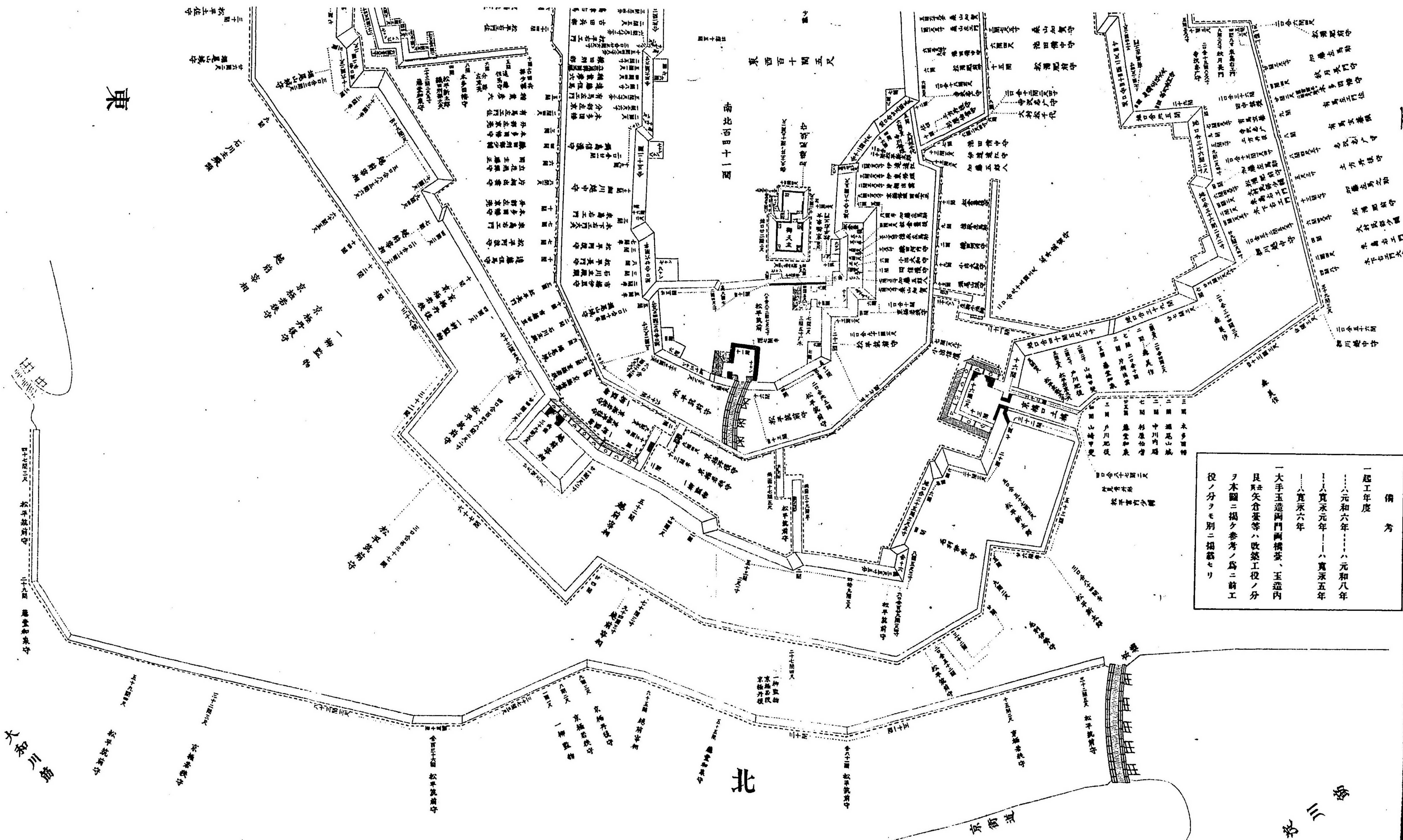
西



備考

一起工年度
 ……八元和六年……八元和八年
 ……八寛永元年……八寛永五年
 ……八寛永六年

一大手玉造兩門兩橋臺、玉造内
 具註矢倉基等、收築工役ノ分
 ノ木圖ニ掲ケ参考ノ爲ニ前工
 役ノ分ヲモ別ニ掲載セリ



備考

一起工年度
六元和六年.....八元和八年
 | 八寛永元年 |八寛永五年
 | 八寛永六年

一 大手玉造兩門兩橋臺、玉造内
 具足矢倉臺等ハ改築工役ノ分
 ヲ本圖ニ掲ケ参考ノ爲ニ前工
 役ノ分ヲモ別ニ掲シテリ

東

北

大和川筋

京街道

附運搬中ニ車又ハ船等ヨリ轉墜セル石ヲ棄却スル古來ノ風習ノ事

因ニ記ス築城用ノ石材ニシテ其運搬中ニ一旦船又ハ車等ヨリ轉墜セル者アル時ハ再ヒ取リテ築城ノ用ニ供セス其儘之ヲ棄却スルコトハ中古以來興レル風習ナルカ如シ抑モ此事ハ何ノ頃ヨリ行ハレタルカ其起因ノ觀ルヘキ者ナシト雖モ慶長十五年ヲ以テ舉行セラレタル尾張名古屋ノ城普請ノ頃ニハ早ヤ已ニ此風習ノアリタルコトハ明瞭ナリ而シテ之ヲ忌ム所ノ理由何如ト尋ヌルニ他無シ城ニ在リテハ落ケルト云フコトヲ甚シク忌ムニ因リテ乃チ船車等ヨリ墜ケタル石材ヲ用ヰテ石垣ヲ築造スルハ城ノ吉兆ナラストシテ棄却シテ用ヰサルナリトソ

右ハ此城ノ石垣ノ修築及ヒ修築用ノ石材ニ關スル事項ノ概要トス下本文ニ於テ每工役ニ從ヒテ叙述セン

附記 永祿天正慶長ノ頃ニ行ハレタル巨石運搬方法ノ梗概

大坂城ノ石垣ノ總シテ巨石ヲ以テ成リシコトハ右ニ記載セル所ノ如シ中ニ

就キテ本丸ニ在リテハ櫻之門口ノ升形ニ之丸ニ在リテハ追手京橋玉造口ノ升形等ニ在ル巨石ノ如キハ巨石中ノ最モ巨大ナル者ナリ然ルニ此城ノ一般ノ石材ヲ漕運セシ方法ノ世ニ知ラレサルノミナナス是等最モ巨大ナル所ノ石材ニ至リテモ如何ナル手段ニ由リテ運轉セシモノナルカ諸書並ニ見ル所ナシ世ノ人之ヲ遺憾トセリ因テ茲ニ古來城普請等ノ時陸路大石ヲ運搬セル手段ノ諸書ニ散見スル者ヲ概記シテ聊カ讀者ノ參考トス

二條御所ノ石 附信長ノ號令ノ大音聲及ヒ桶狭間ノ戰ノ事

永祿十二年織田信長ガ將軍足利義昭ノ爲メニ京都二條ノ構ヲ修築セシ時其庭前ニ据付ケンガ爲ニ細川ノ屋敷ヨリハ藤戸ト稱ズル大石ヲ又東山慈照院ヨリハ九山八海ト稱スル大石ヲ運搬セリ此時信長ハ自身ニ其場所ニ至リテ彼ノ巨大ナル名石ヲバ何レモ綾錦ヲ以テ包マセ種々ナル花ヲ以テ飾リ大綱餘多之ニ付セシメ笛鼓、太鼓ヲ以テ囃シ立テサセ自ラ下知シテ多人數ニテ即時ノ庭上ニ引付ケタリ 信長公記

本書ニハ彼ノ石ヲ車ニ載セタル事ヲ記セサレドモ思フニ地車ニ載セテ引

キタルモノナラン

又信長ノ大音聲ニシテ號令ノ壯烈ナリシコトハ左ノ記事ニ徴シテ知ルヘシ

戴恩記

上京に城郭をきつき公方にそなへ置給き其御普請の時大石の數百人しも引かぬる有けるを信長公さいを取てたゞ一こゑえいやこゑを出し給ひければ鳥の飛がごとく行けるとなり何時も人の氣はいさむといさまぬどに替る事也此人の御こゑは大きに有し御馬揃の時丸 清云丸トハ本書ノ書者松永貞徳自ラ云フモノが見物せし三條衣棚にてなにとて先はつかへて行ぬぞとの給し御こゑ東南西北四五町ほどづきこへしと人みな申き

信長公記

山際迄御人數被寄候俄急雨、石水を投打様に敵の輔すけに打付る身方は後の方に降か、る沓懸くわげんの到下の松の本に二かい三かいの桶の木、雨に東へ降倒る、餘の事に熱田大明神の神軍かと申候也空晴るを御覽し信長鎗をおつ取て大音聲を上てすはか、れくと被仰黒煙立て懸るを見て水をまくるが如く、くはつと崩れたり弓鎗鉄砲のほかさし物算を亂すに異ならず今川義元の塗輿も捨てくつれ逃げり

天文廿一年壬子五月十九日

旗本は是也是へ懸れと御下知在、未刻東へ向てか、り給ふ、初は三百騎計眞丸になつて義元を圍み退けるか二三度四五度歸し合々次第く、に無人に成て後には五十騎計に成たる也信長下立て若武者共に先を争つ、つき伏つき倒し、いらつたる若もの共亂れか、つて、しのぎをけづり、鎧をわり、火花をちらし、火焔をふらす、雖然敵身方の武者色は相まぎれず爰にて御馬廻御小姓衆歴々手負死人不知、員服部小平太義元にか、りあひ膝の口さられ倒伏毛利新介義元を伐臥頸をとる

安土城ノ石

天正四年織田信長ノ安土山ノ城普請ノ時西尾小左衛門小澤六郎三郎吉田平内等石奉行トシテ二千人三千人宛ノ人數ニテ大石ヲ一個々ニ山上ヘ引上ケタリ其中ニ津田坊ヨリ引出セル蛇石ト稱スル大石アリ是等ノ人數ニテハ一切山上ニ引上カラス是ニ於テ羽柴秀吉瀧川一益惟住長秀ノ三人ハ手勢ヲ率井テ石奉行等ニ助勢ヲ爲シ一萬餘人ノ人數ヲ以テ安土ノ山モ谷モ動ク計リノ勢力ヲ發シ夜晝二日ヲ費シ信長下知シテ始メテ此大石ヲ安土山上ノ天主ノ處ヘ引上ケタリ信長公記

本書是等巨大ノ石材ヲ山上ヘ引上クル所ノ方法手段ヲ記載セス

京都大佛殿ノ石

天正十四年京都大佛殿建立ノ時蒲生氏郷ハ六疊敷程ノ大石ヲ鹿ヶ谷ヨリ大佛殿普請場ヘ引クニ當リテ先ツ楠松等ノ虹梁ヲ以テ修羅車今世ノ地車ノ堅牢ナル者ナラント云ヲ造リ彼大石ヲ此車ノ上ニ載セ其引キ行クヘキ道筋ニハ丸太ヲ敷キ其上ニあらめヲ撒布シ右大石ヲ載セタル所ノ車ヲハ此敷丸太ノ上ニ上ホセ三千九

百人ニテ運轉シテ引キ行キタリ安齋隨筆

氏郷ハ二間ニ四間アル石ヲ純子ニ包ミ木ヤリノ音頭ヲ取り異形ノ出立ヲ爲シ多勢ヲ以テ引カセケレハ見物ノ貴賤押シ分ケラレヌ許也七日ニシテ白川ノ奥ヨリ大佛ニ至ル 太閤記

附同大佛殿ノ棟木及ヒ虹梁

天正十六年七月九日徳川家康ハ豊臣秀吉ノ需ニ應シテ大佛殿ノ棟木トスヘキ所ノ巨木ヲ駿河ノ富士山ヨリ伐り出スコトヲ松平家忠及ヒ三河遠江兩國ノ諸將ニ命シタリ是ニ於テ諸將ハ八月二日ヲ以テ駿河ノ興津ニ著到シ駿河遠江三河三國ノ人夫ヲ率井テ富士山ニ攀テ上リ同月十六日ヲ期トシテ此巨木ヲ伐採シ同月廿七日ニハ家康モ亦大宮ニ行キ之ヲ搬出スル景況ヲ一覽シ三國ノ人夫ハ何レモ山中ニ留リ居テ十月ニ至リテ始メテ此巨木ヲ富士山ヨリ引下シ十一月七日ヲ以テ人夫等ハ駿河ノ府中ニ引揚ケタリ 家忠日記

木材ヲ運搬スルコト斯ノ如キハ古來比類無キノ大舉ナレトモ本書ハ此巨木ヲ富士山ヨリ曳出セル方法手段ヲ記載セス思フニ此巨木ハ駿河ヨリ海

路大坂ニ迴漕シ淀河ヲ溯リ伏見ヨリ大佛普請場ニ曳キ著ケタルモノナラ
ン此巨木ヲ以テ棟木ト爲シ大佛殿ハ始メテ建テリト云フ

又大佛殿ノ虹梁ヲ上クル時ニハ滑車ヲ使用セリ 其方法先ツ高キ處ニ車ヲ
仕掛ケ置キ其上クヘキ所ノ虹梁ヲハ綱ヲ以テ結ヒ著ケ此車ニ其綱ヲ懸ケテハ
引キ上ケタル者ノ如シ甫庵ノ太閤記ニ尋常ナレハ千人許モ掛ラサレハ上カ
ルマシト見ヘタル虹梁ヲ車ノ働キニテ百人許ニテ引上ケタリ毎昔ヨリモ
自由ナル事共多ク有又節録ト評セリ然レハ此頃已ニ土木ノ工事ニハ地上ノ運
轉ニモ高處ノ引上ケニモ自在ニ車ヲ使用シタルコトヲ知ルヘシ槓杆ノ如キ
ハ當時之ヲ使用セルコトハ固ヨリ論無キコトナラン

名古屋城ノ石

慶長十五年尾張名古屋ノ城普請ノ時加藤清正ハ大石ヲ毛氈ニテ包ミ是レヲ
青キ大綱ニテ纏ヒテ地車ニ載セ錦繡ヲ以テ粧ハセタル所ノ兒小姓ノ美少年
共ヲ其石ノ上ニ立竝ハセ自身モ片鎌ノ槍ヲ持テ其中央ニ立テ木ヤリヲ歌
ヒ五六千ノ人數ニテ之ヲ引カセタリ名古屋清洲ノ商人等來リテ酒肴菓物ヲ
ドナ賣ルヲバ其價ノ高下ヲ論セス悉ク買取り之ヲ見物ノ諸人ニ投ケ與ヘテ
拾ハセケレハ數萬ノ見物人マデ興ニ乗シ一度ニ其大綱ニ取付キ木ヤリノ音
頭ニツレテ暫時ノ間ニ熟田ヨリ名古屋ノ普請場マデ引付ケタリ 續撰清正記
是等ニ由リテ想見ル時ハ此大坂城ノ大石ヲ運搬セシ手段ノ如キモ亦自ラ類
推スルコトヲ得ヘシ

第十二章 北ノ外曲輪二之丸及ヒ天主臺

元和六年正月十八日將軍秀忠始メテ此城修築ノ工役ヲ起シ北ノ外曲輪及ヒ二之
丸西北東ノ三方面ヲ修築セリ

台徳院殿御實記

元和六年庚申正月十八日大坂城修築の事を西北國諸大名に課せらる

大坂城御再造覺書

元和六年庚申正月大坂城御再造可被遊旨ニテ西國四國中國之諸大名へ御手傳被仰付

大坂城普請圖之記

元和六年庚申年二九御普請

此工役ハ大和、伊賀、伊勢、若狹、越前、加賀、能登、越中、丹波、丹後、但馬、因幡、出
雲、石見、播磨、美作、備前、備中、周防、長門、讃岐、伊豫、土佐、筑前、筑後、豊前、豊

後、肥前、肥後、日向、壹岐、ノ三十一國ノ大名四十八家凡ソ七百八十九萬四千八百石ニ課セシ者ニテ北ノ外曲輪ハ京橋南詰ヨリ東南ニ連ナル所ノ大和、猫間、兩川ニ對スル方面凡ソ五百七十二間餘ニ之丸ハ大手ヨリ京橋口青屋口玉造口ニ至ル西北東三方面凡ソ二千九百九十六間餘合計凡ソ三千五百六十八間餘ノ石垣ヲ築造スル者ナリ而シテ

北之外曲輪ハ 松平 筑前守利常 京極 若狹守忠高 藤堂 和泉守高虎

越前 宰相忠直 京極 丹後守高知 一柳 監物直盛

分擔シ、一之丸大手南詰ハ 加藤 肥後守忠廣 松平 新太郎光政

森 美作守忠政 堀尾 山城守忠晴

大手升形ハ 加藤 肥後守忠廣

橋臺ハ 龜井 大力茲政 伊達 侍從秀宗 松平 長門守秀就

細川 越中守忠興 松平 土佐守忠義 木下 右衛門太夫延後 稻葉 彦 六典通

有馬左衛門佐直純 松平右近大夫輝興 松平左京大夫政綱

大手北詰ヨリ京橋口南詰マテハ 加藤 肥後守忠廣 黒田 筑前守長政

池田備中守長幸 松平 新太郎光政 有馬左衛門佐直純 加藤 左馬助嘉明

秋月 長門守種春 田中 筑後守忠政 有馬 立蕃頭豐氏 寺澤 志摩守廣高

土方 丹後守雄氏 松浦 肥前守隆信 大村民部大輔純頼 來島右衛門市通春

木下 右衛門太夫延後 細川 越中守忠興 森 美作守忠政 本多 因幡守政武

杉原 伯耆守長房 片桐 出雲守孝利 藤堂 和泉守高虎 山崎 甲斐守家治

戸川 肥後守達安 堀尾 山城守忠晴 中川 内膳正久盛 松平左京大夫政綱

松平右近大夫輝興 松平宮内少輔忠雄

京橋口升形并ニ橋臺ハ 松平宮内少輔忠雄

京橋口北詰ヨリ青屋口西詰マテハ 松平宮内少輔忠雄 松平 新太郎光政

毛利 伊勢守高政 生駒 讃岐守正俊 松平 筑前守利常 一柳 監物直盛

京極 若狹守忠高 京極 丹後守高知 越前 宰相忠直

青屋口出升形西北東三方面ハ 松平 筑前守利常

同出升形南面ナル門臺ハ 越前 宰相忠直

青屋口東詰ヨリ玉造口東詰マテハ 松平 筑前守利常 一柳 監物直盛

京極 丹後守高知 京極 若狹守忠高 越前 宰相忠直 石川 主殿頭忠總
堀尾 山城守忠晴 松平 土佐守忠義 松平 長門守秀就 島津 右馬頭忠興
伊東修理大夫祐慶 中川 内膳正久盛 鍋島 信濃守勝茂
玉造口升形并ニ橋臺ハ 鍋島 信濃守勝茂
玉造口西詰ハ 鍋島 信濃守勝茂 織田兵部大輔信良 織田刑部大輔信則
伊達 侍從秀宗 島津 右馬頭忠興 伊東修理大夫祐慶 龜井 大力茲政
池田 備中守長幸 中川 内膳正久盛 稻葉 彦六典通 桑山 加賀守貞晴
玉造巽矢倉臺ハ 松平 長門守秀就
京橋口内南手中仕切ハ 松平 筑前守利常 堀尾 山城守忠晴
極樂橋外西手中仕切ハ 松平 筑前守利常
同東手中仕切ハ 京極 若狹守忠高 京極 丹後守高知 一柳 監物直盛
分擔ス、其丁場割ハ第十三圖ノ如シ
三月十七日秀忠、修築ノ功勞ヲ褒賞スル所ノ奉書ヲ始メテ助役ノ大名ニ賜フ
台徳院殿御實記元和六年庚申三月十七日

台徳院殿御實記元和八年壬戌六月

大坂城修築助役の諸大名に其功を褒賞せられて奉書を下さる
參議の輩には大坂城修築の事心いれ速成せしめ御感淺からず深く其勤苦を察したまへは謁見の
から猶仰下さるへしとなり
侍従以下には其功の甲乙を分て褒せらる甲功の輩には大坂修築心いれ速に告竣に及び勤苦のほと察
し思召る、となり 乙功の輩には今度大坂の修築心いれ成功し悦はせたまふとのみしるさる
案スルニ此時、修築全ク成リシニ非ス 助役大名ハ 各數箇所ヲ分擔シ居ルニ因
リ諸家共ニ其中先ツ或ル場所ノ成レルモノアリ 秀忠乃チ其成功ヲ賞セルモノ
ナリ

元和八年六月北ノ外曲輪及ヒ二之丸ノ石垣過半成レリ是ニ於テ是月ヲ以テ本丸
天主ノ石垣ヲ築ク此築造ハ加藤肥後守忠廣擔當ス

台徳院殿御實記元和八年壬戌六月

是月大坂城外郭石垣多門過半成功して本丸二丸の石垣を築ク

案スルニ實記ニ本丸二丸トアルハ本丸天主ノ誤寫ナラン次キニ天主石垣ノ成ル事アリ之ヲ證スヘ

シ二九ハ已ニ一昨元和六年ヨリ工事ヲ起シ又本丸全部ノ工事ニハ寛永元年ヲ以テ始メテ著手セリ

元和九年二月是ヨリ先キ北ノ外曲輪一之丸及ヒ天主ノ石垣成ル

台徳院殿御實記元和九年癸亥二月

一昨年す録の春より大坂城修築せしめられしに三年をへて外郭石垣多門并に本丸二丸の天守臺は成功

案スルニ實記ニ一昨年トアルハ一昨年(即元和六年)ノ誤脱又二ノ九ノ二字削ルヘシ今ノ大坂城ノ二之丸ニ天主堂ハナシ

七月六日秀忠二條城ヨリ此城ニ來リテ駐マルコト八日蓋シ親カラ城中一切ノ工事ヲ視察セシ者ナラン十二日二條城ニ還レリ是レヨリ先キ秀忠家光上洛シ秀忠ハ二條城ニ家光ハ伏見城ニ在リ是月二十七日家光征夷大將軍ニ補ス是レヲ三代將軍ト爲ス明年寛永元年本丸修築ノ事興ル

台徳院殿御實記元和九年癸亥七月六日

二條城より大坂へ御親巡あり十三日大坂より二條城に還御なる

第十三章 本丸山里丸

寛永元年正月五日將軍家光ハ本丸及ヒ山里丸修築ノ工役ヲ起スニ因リ黒印ヲシタル修築取締令狀ヲ發スルコト左ノ如シ

大猷院殿御實記寛永元年甲子正月五日

二條大坂の兩城構造せられたるにより黒印もて令せらるゝは

喧嘩口論なすへからすもし違犯せば理非ごもに雙方斬罪たるへし 知音縁故をもて荷擔せば其罪本人より重かるへし 押買狼藉すへからす みにたり竹木切取へからす 田圃を荒廢せしむへからす 石場を争ふへからす 構造の

間從者を歸郷せしむる事停禁たるへしもし事故あらは事はて、歸國の後沙汰に及ふへし

此工役ハ大和、伊賀、伊勢、近江、美濃、若狹、加賀、能登、越中、丹波、丹後、但馬、因幡、出雲、石見、播磨、美作、備前、備中、周防、長門、淡路、阿波、讃岐、伊豫、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、日向、壹岐、ノ三十二國ノ大名六十家凡ソ七百四十五萬二千八百石ニ課セル者ニテ本丸山里丸ノ周圍凡ソ一千七百五十三間餘ノ石垣ヲ築造セル者ナリ而シテ

本丸櫻之門升形ハ 松平宮内少輔忠雄

橋臺ハ 松平 石見守輝澄 松平 小七郎輝興 松平宮内少輔忠雄

櫻之門西詰ヨリ本丸西北隅姫門西詰マテ及ヒ姫門西手ノ帶曲輪マテハ

松平 新太郎光政 藤堂 和泉守高虎 生駒 小法師高俊 毛利 伊勢守高政

戸川 肥後守達安 山崎 甲斐守家治 稻葉 淡路守紀通 一柳 監物直盛

桑山 加賀守貞晴 桑山 左衛門佐一直 池田 備中守長幸 松浦 肥前守隆信

寺澤 志摩守廣高 大村 松千代純信 中川 内膳正久盛 平岡 牛右衛門賴資

伊達 遠江守秀宗 伊東修理大夫祐慶 片桐 出雲守孝利 京極 采女正高廣
京極修理大夫高三 松平 長門守秀就 加藤 左馬助嘉明 松倉 豊後守重政
徳永 左馬助昌重 織田 河内守長則 小出 大和守吉英 小出 信濃守吉親
加藤 五郎八泰興 桑山 加賀守貞晴 京極 若狹守忠高 藤堂 和泉守高虎
姫門々臺并ニ姫門東詰ヨリ本丸東北隅ニ至ル北手ノ全部及ヒ姫門前ナル山里升
形并ニ山里丸ノ全部及ヒ山里大門升形共 松平 筑前守利常

本丸東北隅ヨリ櫻之門東詰マテハ 京極 若狹守忠高 京極修理大夫高三
堀尾 山城守忠晴 石川 主殿頭忠總 市橋 伊豆守長政 松平 長門守秀就
松平 阿波守忠英 木下 右衛門大夫延俊 來島 右衛門市通春 細川 越中守忠利
鍋島 信濃守勝茂 本多 因幡守政武 分部 左京亮光信 片桐 出雲守孝利
有馬 左衛門佐直純 遠藤 但馬守慶隆 稻葉 彦 六典通 立花 飛彈守宗茂
立花 主膳正種次 織田 兵部大輔信良 織田 刑部大輔信則 松平 右衛門佐忠之
古田 兵部少輔重恒 島津 右馬頭忠興 秋月 長門守種春 京極 采女正高廣
森 美作守忠政 伊東修理大夫祐慶 松平 石見守輝澄 松平 左京大夫政綱

戸川 肥後守達安 稻葉 淡路守紀通 山崎 甲斐守家治 毛利 伊勢守高政
一柳 監物直盛
西手空堀中仕切ハ 土方 丹後守雄氏 杉原 伯耆守長房
東手空堀中仕切ハ 森 美作守忠政
天主西手中仕切ハ 松平 右衛門佐忠之 京極 采女正高廣
分擔ス

五月七日前將軍秀忠ハ秋元但馬守泰朝ヲ此城ニ遣ハシ修築助役ノ大名ヲ慰勞ス

大猷院殿御實記寛永元年甲子五月七日
秋元但馬守泰朝大御所の御使承はり大坂築城の諸大名を勞せらる

寛永二年二月本丸ノ修築成功ニ至レルニ因リ秀忠ハ青山大藏少輔幸成ヲ家光ハ

安藤右京進重長ヲ此城ニ遣ハシ檢閲セシム

大猷院殿御實記寛永二年乙丑二月
此月大坂城修築既に成功するにより大御所よりは青山大藏少輔幸成御所よりは安藤右京進重長をつかはさる

寛永三年二月二十五日秀忠ニ條城ヨリ此城ニ來リテ駐マルコト五日蓋シ石垣修
築ノ成績ヲ熟覽シ且殿館天主矢倉等ノ構造ニ付テ親裁スル所アリシナラン二十

九日二條城ニ還ル是ヨリ先キ秀忠上洛ニ條城ニ在リ

大猷院殿御實記寛永三年丙寅二月廿五日

この日大御所は二條城を出まし大坂の地を巡覽し給ふ廿九日大坂より二條城に還御

九月十六日家光亦二條城ヨリ此城ニ來リテ此城ノ既成及ヒ現在ノ工事ノ實況ヲ

親覽シ翌十七日二條城ニ還ル是ヨリ先キ家光上洛ニ條城ニ在リ是月六日二條城

ニ後水尾天皇ノ行幸ヲ仰ケリ後寛永五年ニ至リ二之丸南曲輪修築ノ事興ル第六

水尾天皇ニ條城天

主登臨ノ條參看

大猷院殿御實記寛永三年丙寅九月十六日
大坂にわたらせたまひ城郭構造のさまを御覽し給ふ十七日大坂より二條に歸らせ給ふ

十二月曩ニ石垣成功ニ至レルニ因リ秀忠ハ青山大藏少輔幸成ヲ家光ハ安藤右京

進重長ヲ此城ニ遣ハシ修築助役ノ大名ヲ慰勞ス

大猷院殿御實記寛永三年丙寅十二月

此年大坂城石垣成功したりければ青山大藏少輔幸成安藤右京進重長かしこに赴き助役の輩を慰勞せしめらる

寛永四年是歲猶ホ修築殘餘ノ工事アリ

大猷院殿御實記寛永四年丁卯十二月

此年大坂城は古田兵部少輔重恒修治の事にあつかる

第十四章 二之丸南ノ曲輪及ヒ東ノ帶曲輪

寛永五年二月二日家光ハ二之丸南ノ曲輪修築ノ工役ヲ起スニ因リ申子ヲ黒印ヲ

鈴シタル修築取締令狀ヲ發ス其令ハ寛永元年正月五日ノ令ニ同シ

大猷院殿御實記寛永五年戊辰二月二日

大坂城修築により御黒印をなしくたさる、事寛永元年正月五日の令におなし

此工役ハ大和、伊賀、伊勢、近江、美濃、若狹、加賀、能登、越中、丹波、丹後、但馬、因

幡、出雲、石見、播磨、美作、備前、備中、周防、長門、淡路、阿波、讃岐、伊豫、筑前、筑

後、豊前、豊後、肥前、日向、壹岐、ノ三十二國ノ大名五十四家凡ソ六百七十三萬三

千石ニ課セル者ニテ二之丸玉造口ヨリ大手ニ至ル南之曲輪凡ソ一千三百四十八

間餘ノ石垣ヲ築造シ且元和六年築造スル所ノ玉造口升形并ニ橋臺大手升形并ニ

橋臺ヲ築直ホセリ而シテ

玉造口升形ハ 鍋島 信濃守勝茂

橋臺ハ 金澤 中納言利常

玉造口西詰ヨリ大手南詰マテハ 金澤 中納言利常 織田 河内守長則

有馬 玄蕃頭豊氏 京極 若狹守忠高 織田 刑部大輔信則 鍋島 信濃守勝茂

秋月 長門守種春 來島 越後守通春 古田兵部少輔重恒 稻葉民部少輔一通
 木下 右衛門大夫延俊 細川 越中守忠利 本多 因幡守政武 分部 左京亮光信
 遠藤 但馬守慶隆 生駒 壹岐守高俊 藤堂 和泉守高虎 島津 右馬頭忠興
 戸川 土佐守正安 山崎 甲斐守家治 一柳 監物直盛 伊達 遠江守秀宗
 松平 阿波守忠英 桑山 左衛門佐一直 桑山 加賀守貞晴 池田 備中守長幸
 森 右近大夫忠廣 有馬 藏人康純 松平 石見守輝澄 松平 左京大夫政綱
 松平 右近大夫輝興 備前 宰相忠雄 京極 丹後守高廣 京極 修理大夫高三
 中川 内膳正久盛 平岡 石見守頼資 松平 新太郎光政 立花 飛彈守宗茂
 立花 主膳正種次 稻葉 淡路守紀廣 伊東 修理大夫祐慶 堀尾 山城守忠晴
 石川 主殿頭忠總 松倉 豊後守重政 毛利 伊勢守高政 松平 右衛門佐忠之
 松浦 肥前守隆信 大村 松千代純信 寺澤 志摩守廣高 加藤 出羽守泰興
 小出 對馬守吉親 片桐 出雲守孝利 土方 丹後守雄氏 杉原 伯耆守長房
 松平 長門守秀就
 大手 升形ハ 有馬 玄蕃頭豊氏

橋臺ハ 堀尾 山城守忠晴 石川 主殿頭忠總 松倉 豊後守重政
 加藤 出羽守泰興 小出 對馬守吉親 片桐 出雲守孝利 伊東 修理大夫祐慶
 土方 丹後守雄氏
 大手 内東手中仕切ハ 備前 宰相忠雄
 玉造 内西手中仕切ハ 金澤 中納言利常
 玉造 北手雁木坂東通リハ 古田 兵部少輔重恒 遠藤 但馬守慶隆
 分部 左京亮光信 本多 因幡守政武 松平 新太郎光政 織田 刑部大夫信則
 藏堂 和泉守高虎
 分擔ス

二月六日家光ハ使番駒井右京進親直徳山五兵衛直政ヲ京都大坂ノ目付ト爲シ赴
 任セシムルニ因リ訓令ス「大坂城衛戍ノ輩ヲバ堅ク定番加番令ニ服從セシメ其
 從僕等ニ至ルマテモ此城ノ修築及ヒ殿館造營ニ關スル輩ト密ニ會合スルコト有
 ラシム可カラス」ト

大猷院殿御實記寛永五年戊辰二月六日

大坂城誌第五卷

大坂城建築叢考

徳川氏

石垣修築

使番駒井右京進親直徳山五兵衛直政京坂目付仰付らるゝによりその條約を下さる
坂城定番加番の令かたく命し營築にあつかる輩と密に會合せさるよう僕從等にいたるまでかたく命すへし

三月十四日家光ハ板倉内膳正重昌ヲ京師并ニ大坂ニ遣ハスニ因リ訓令ス「大坂城營築工事ハ礎石据込成功ニ至レル時閱スヘシ石垣堅固ナラサル處アル時ハ下タ積ミ石ヨリ大ナル石ヲバ上ハ積ミニ用井シム可カラス且石面ハ磨カシム可カラス」ト此訓令ハ徳川氏ノ舉行セル此城ニ之丸南曲輪ノ石垣修築ノ工事ハ更ニ根石ヲ据エテ石垣ノ根底ヨリ新タニ築立テタル者ナルコトヲ分明ニ證セル者ナリ此ニ之丸ノ南曲輪ハ慶長十九年冬役ノ講和ノ時徳川氏ハ他ノ大手京橋玉造三門外ノ馬出曲輪等ト共ニ毀壞シテ人馬ノ通行シ得ル平地ト爲シ了ヘタルニ因リテ今復タ是レヲ設置スルコト、ナリ更ニ堀ヲ鑿リ礎石ヲ据エテ根底ヨリ石垣ヲ築立ツル者ナリトス 豊臣氏附記毀壞編 第十一章末段參看
大猷院殿御實記寛永五年戊辰三月十四日
この日板倉内膳正重昌を京坂に御使せらるゝ、により諭書を下さる
坂城の營築礎石成功せしとき閱すへし石垣堅固ならずは前令よりの大石は用ゆへからず且石面磨くへからず

案スルニ前令ハ前石ノ誤寫ナラン

五月重昌此城ニ來リテ家光ノ褒賞ノ命ヲ修築助役ノ大名ニ傳達シ且修築工事ヲ檢閲ス

大猷院殿御實記寛永五年戊辰五月
此月板倉内膳正重昌大坂に至り助役の輩に褒命を傳ふ

六月三日家光ハ使番大久保源三郎忠知神尾内記元勝ヲ此城ノ目付ト爲シ赴任セシムルニ因リ訓令ス「大坂城南ノ曲輪ニハ西東兩所ニ中仕切ヲ設クヘシ 前段備前金澤中納言利常ノ擔當スル大手内玉造内ノ兩中仕切ハ此命令ニ因リ設置セラル、者ナリ 此度新設ヲ命シタル矢倉臺 南ノ曲輪堀端通り一ハ西東兩所ノ隅々其他目立ツ所ハ七八間ニ營築スヘシ其他ノ所ハ一間程宛狹少ナルモ苦シカラス

矢倉ニ對シ中仕切ノ上ニ設クル見隠シ堀ハ總テ板倉内膳正重昌ガ言上セル如ク右南ノ曲輪ノ中仕切ノ上ニ設クル者ト同様ニ構造スヘシ。普請奉行戸田采女正氏鐵ハ修築諸般ノ事ニ心ヲ盡シ能ク機ニ投シテ根石ヲ据込ムニ因リ造營ノ功程速ニ進歩スルニ至レルコトヲ將軍滿悅アラセラル、旨ヲ氏鐵ニ傳フヘシ。將タ江戸ヨリ遣ハサレシ兩奉行ヘモ其旨ヲ傳ヘ總下奉行ヘモ同シク傳フヘシ。」ト

大猷院殿御實記寛永五年戊辰六月三日

使番大久保源三郎忠知花畑番神尾内記元勝大坂の目付命せらるゝにより授けらるゝ、論文にいふ
坂城造營西(東兩)二字誤脱此中仕切をして然るへしと思召ることたひ命せられし櫓西東の隅其外自立へ
き處七八間に營むへしさもなき所は一間ほど狹少たるもくるしからず東西の隅櫓臺より此の中仕切
迄も東西見隠し南面のことくなすへきかのむね板倉内膳正重昌より聞へ上けりこれはそのことくな
さしむへし

戸田左門(采女正)氏鉄諸事心いる、かゆへ折よく根石を居造營の功速にて悦思召旨傳ふへしは江
戸よりつかはされし兩奉行へも其旨を傳へ總下奉行へも同じく傳ふへし

下奉行六人作事練熟するにより日ならず成功あるよしこれも重昌聞へあく此等は左門氏鉄加々爪民
部少輔忠澄堀式部少輔直之と内議し御威の旨傳へ然るへきにおいては三人指揮にまかすへし

此作事ニ關スル下奉行六人賞與ノコトハ第十五章ニ出タス

案スルニ江戸ヨリ遣ハサレシ兩奉行トハ何人ナルヲ知ラス或ハ修築奉行タル加々爪民部少輔忠澄
堀式部少輔直之ナル乎

又總下奉行トハ修築助役諸大名ノ重臣ニシテ即チ其主人々々ノ名代トシテ此地ニ在番シ其家々ノ
修築丁場ニ於ケル一切ノ事ヲ擔任主宰スル者ヲ曰フナリ此下ニ下奉行トアル者亦同シ

此氏鐵ニ傳ヘシメタル訓令ハ前項ニ記セル板倉重昌ニ與ヘタル礎石成功セル

時閱ス可シトノ訓令ト相待テ徳川氏ガ此城ニ之丸南曲輪ノ石垣ヲ新タニ根底

ヨリ築立テタルコトヲ益明白ニ證スルニ足ル者ナリトス

六月廿三日家光ハ安藤右京進重長ヲ秀忠ハ青山大藏少輔重成ヲ上洛セシムルニ

因リ此城ニ來リテ處分スヘキ事ヲ併セテ訓令ス「大坂城構造下奉行ニ物ヲ賜ハ

ルヘキ事ハ普請奉行戸田采女正氏鐵加々爪民部少輔忠澄堀式部少輔直之ト協議

シ寛永元年賜リタル如ク下賜スヘシ」助役大名ノ長臣并ニ下奉行心ヲ盡シテ

幹旋スト聞キ兩將軍満足アラセラル、旨ヲ彼輩ニ傳達スヘシ。下奉行中拔群勵

精シテ事ニ從ヒシ者ニ對シテハ氏鐵及ヒ兩奉行ヨリ申立テタル通りニ褒詞ヲ加

フヘシト此時大坂町奉行ニモ訓令ス失倉並ニ諸門ノ
材木ヲ豫メ買置クヘシト(第十五章參看)

大猷院殿御實記寛永五年戊辰六月二十三日

本城より安藤右京進重長西城より青山大藏少輔幸成を上洛せしめらるゝ、よて令し下されしは

坂城構造の下奉行等賜物は戸田左門氏鉄並ニ兩奉行とはかり子年寛永賜わりしことく下さるへし助

役諸大名の長臣並に下奉行心いる、よし聞召れ御悅の旨傳ふへし下奉行の内ことさら丹精をぬきむ

つるもの、事氏鐵兩奉行より聞えあけしことく褒詞を加ふへし

七月十一日大坂ニテ安藤右京進重長青山大藏少輔幸成ハ兩將軍ノ訓令ニ照準シ

テ褒賞ヲ行ヒ細川越中守忠利ヲ始メ助役大名并ニ其重臣等ニ時服、羽織ヲ下賜

シ又總下奉行ニハ寛永元年ノ例ニ準シテ大坂町奉行島田越前守直時ノ官宅ニ於

テ帷子、羽織ヲ下賜シタリ是レテ此城修築ニ關シ一般ニ行ヒタル最後ノ賞典ト

爲ス

大猷院殿御實記寛永五年戊辰七月十一日

大坂にて安藤右京進重長青山大藏少輔幸成細川越中守忠利はしめ石壘助役のともから并に家司等等て時服羽織を下さる

同記同月十八日

大坂へ御使せし青山大藏少輔幸成安藤右京進重長へ奉書もて諭せられしはこたひ甲子寛永元年の例もて島田越前守直時官宅にて其地の下奉行等に帷子羽織を下され右かしこみしむね聞えあけぬ六人の下奉行ことさら精力をつぐすよしなれば時服に金銀をもそへてたまはるへきかその事は直時正俊等と能々ばかりあふへし

作事ニ關スル六人ノ下奉行賞與ノコトハ第十五章ニ出タス

寛永六年二之丸玉造口内定番屋敷ノ東手ヲ改築シテ其東ヲ帶曲輪ト爲ス初メ東ノ外側ニ設ケタル所ノ良矢倉臺ヲ城番屋敷東面ノ新ニ築造セル所ニ移シ且良矢倉臺ノ南ト西トノ兩方面ニ多門臺ヲ設置セリ此繩張モ亦藤堂和泉守高虎ト云フ且高虎ハ此改築工役ヲモ助成セリ其餘此工役ニ從事セル大名ノ有無ニ至リテハ今攻フル所ナシ以上諸大名ノ分擔セル丁場割ハ總テ第十三圖ニ照査シテ知ルヘシ

大坂城御再造覺書

寛永六年己巳重而大坂城御普請之義蒙仰東之郭玉造口石壁繩張御手傳相勤藤堂和泉守高虎ナリ申候事

寛永七年六月二十一日家光ハ大坂町奉行久貝因幡守正俊ニ訓令ス寛永五年此城二之丸南ヲ修築シタル時類毀セル家屋ノ地子ハ寛永五年、六巳年、七午年、ノ三年分ヲ免除シ寛永六年玉造口内改築ノ時退ケ石ヲ置キタル所ハ其石ノ在ル間其地ノ地子ヲ免除スヘシト

大猷院殿御實記寛永七年庚午六月廿一日

大坂町奉行久貝因幡守正俊暇たまはるるにて條約を下さる
寛永五年營築の時類毀せし家の地子は辰巳午三年五年乃か中ゆるさるへし巳年六年營築のとき退石置し所の地子もその石ある間はゆるさるへし

案スルニ退ケ石トハ修築用ノ石材ヲ選抜スル時不用トシテ芻子退ケラレタル石ヲ云フナリ本書卷首々記末段參看

右元和六年寛永元年寛永五年ノ三大工役ト寛永六年ノ補修工役トヲ以テ此城ノ石垣ノ修築始メテ大成ス今日現在スル所ノ大坂城ハ即チ是レナリ元和六年工役ヲ創起セルヨリ此ニ至リテ歲ヲ閱スルコト十年ナリ

以上十年間ニ此城ノ修築ヲ擔當セル大名、綜計スレハ六十四家ナリ此六十四家ヲ其祿高ノ多少ニ依リテ次第シ其工役ニ從事セル年度并ニ其擔當シテ修築セル

石垣ノ間數ヲモ併セテ標記スレハ第五表ノ如ク又此六十四家ヲ國分ケトスレハ第六表ノ如シ

本來石垣ハ其地口ノ間數ノミヲ掲クルヨリハ其高低ヲモ精算シテ全部ノ總坪數ヲ舉ケ又其掘鑿セル堀ノ面積坪數ヲモ掲クルヲ以テ善シトスルモ然レトモ圖面上ニ就キテ此事ヲ爲スモ到底實數ヲ得ルコト能ハス故ニ今姑ク石垣地口ノ間數ノミヲ掲ク固ヨリ其概要ヲ見ルニ過キサルノミ

第五表 備考

- 一本表ハ德川氏ノ舉行セル大坂城修築工事ノ總成績ノ大體ヲ綜覽センガ爲ニ調製セシモノナリ
- 一本表修築箇所、間數及ヒ修築擔當諸大名氏名并ニ起工年月ハ大坂城普請圖台徳院殿實記、大猷院殿實記ニ據リ其諸大名ノ實名及ヒ叙爵、代替、祿高并ニ領知等ノ類ハ台徳院殿實記、大猷院殿實記、大成武鑑八册、藩翰譜備考、寛永諸家系圖傳、領主代替記、主圖合結記、續撰清正記、慶元通鑑、德川加除封録、等ノ諸書ニ據ル
- 一本表ノ間尺ハ右大坂城普請圖ニ記載セルモノヲ數字ニ書キ換ヘタルノミ取テ原數ヲ増減セス
- 一本表三之丸石垣ノ間數ト第八表三之丸高塀ノ間數ト過不足懸隔アル事ハ第三表ノ備考ニ記セリ
- 一本表有馬豊氏ノ領知高ハ前封丹波福智山ノ分八万石ヲ通計ヨリ扣除シ後封筑後久留米ノ分二十一万石ヲ以テ通計ニ算入セリ

德川氏ノ大坂城修築諸大名工役從事ノ年度及ヒ擔當修築セル石垣ノ間數表 第五表

種別	修築						合、計	修築擔當大名
	元和六年正月	元和六年六月	元和八年	寛永元年正月	寛永五年二月	寛永六年		
三之丸	12,100	12,100	12,100	12,100	12,100	12,100	加賀金澤 12,100 能登越中兼領	松平筑前守 利常
二之丸	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	肥後熊本 10,000 豐後熊本兼領	加藤肥後守 忠廣
北之丸	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	越前福井 6,000	越前幸 相忠直
東之丸	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	筑前福岡 6,000	黒田筑前守 長政
南之丸	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	豊前小倉 6,000	松平右衛門佐忠之
西之丸	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	長門萩 6,000	細川越中守 忠興
東之丸	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	長門萩 6,000	細川越中守 忠利
西之丸	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	長門萩 6,000	松平長門守 秀就
合、計	57,800	57,800	57,800	57,800	57,800	57,800		

種別	修築				種別	修築			
	間	石垣	築	修		間	石垣	築	修
元和六年正月					元和六年正月				
元永元年正月					元永元年正月				
寛永五年二月					寛永五年二月				
寛永六年					寛永六年				
合計	三三三〇	九三三〇	五三三〇	一〇〇〇	合計	三三三〇	九三三〇	五三三〇	一〇〇〇
領知高氏名	伊勢野	美濃野	筑後三池	美濃野	領知高氏名	伊勢野	美濃野	筑後三池	美濃野
	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇		一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇
修築擔當大名	土方丹後守雄氏	織田河内守長則	立花主膳正種次	平岡牛衛門	修築擔當大名	土方丹後守雄氏	織田河内守長則	立花主膳正種次	平岡牛衛門
				平岡石見守					平岡石見守
				頼資					頼資
				六四					六四
				七四人					七四人

第六表備考

一本表ハ國ノ順序ニ據リテ諸大名ヲ記載ス此大坂城修築工役ヲ國役トシテ見ルニ便スルナリ

一本表有馬豊氏ノ領知ハ丹波福智山ノ分八万石ヲ扣除シ筑後久留米ノ分二十一万石ヲ以テ通計ニ算入セルコト第五表ノ例ノ如シ工役アリシ場所年度ヲ識別スル爲メ各欄ニ●ヲ付セリ

德川氏ノ大坂城修築諸大名國分表 第六表

種別	畿内				東海				近江			
	大和	伊勢	伊賀	美濃	尾張	越前	加賀	石川	近江	美濃	伊賀	伊勢
元和六年												
元永元年												
寛永元年												
寛永五年												
寛永六年												
修築總間數	二九二八	六三〇〇	二七二七	一五五七	八四八〇	三三三〇	一六〇〇	一〇〇〇	一七三九〇	九三三〇	一六六五五	一七三九〇
領知高氏名	高取	宇田	龍田	谷山	新庄	津	伊賀兼領	神戶	大溝	仁正寺	高須	高須
	三〇〇〇	三〇〇〇	二八〇〇	二六〇〇	一六〇〇	三三三〇	三三三〇	七〇〇〇	二〇〇〇	一七〇〇	五三七〇	五三七〇
修築擔當大名	本田因幡守政武	織田兵部輔信良	片桐出雲守孝利	桑山加賀守貞晴	桑山左衛門佐一直	藤堂和泉守高虎	一柳	監物直盛	土方丹後守雄氏	分部左京亮光信	市橋伊豆守長政	德永左馬助昌重

種別名	陽道					修築著手年度及場所	修築總間數	領知高氏名	修築擔當大名
	阿波	長門	備中	備前	美作				
元和六年 三之丸 元和本丸 元和九年 本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸	●	●	●	●	●		三、六〇〇	佐用	松平小七郎 輝興 松平右近大夫 輝興
元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸			●	●	●		三、九〇〇	岡山	森 美作守忠政 森 右近大夫忠廣
元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸				●	●		二、六〇〇	松山	備前幸相 忠雄
元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸				●	●		三、六〇〇	成羽	池田備中守長幸
元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸				●	●		三、六〇〇	庭瀬	山崎甲斐守家治
元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸 元和本丸				●	●		三、六〇〇	秋 周防兼領 德島 淡路兼領	戸川肥後守達安 戸川土佐守正安 松平長門守秀就 松平阿波守忠英

南海道					修築著手年度及場所	修築總間數	領知高氏名	修築擔當大名
讚岐	伊豫	土佐	筑前	筑後				
●	●	●	●	●		一、七〇〇	高松	生駒讃岐守正俊 生駒小法師 高俊
	●	●	●	●		三、九〇〇	松山	加藤左馬助嘉明
	●	●	●	●		五、三〇〇	宇和島	伊達侍從 秀宗
	●	●	●	●		三、九〇〇	大洲	伊達遠江守 秀宗
	●	●	●	●		六、〇〇〇	高知	加藤五郎八 泰興
	●	●	●	●		二、三〇〇	福岡	加藤出羽守 泰興
	●	●	●	●		三、〇〇〇	久留米	松平土佐守忠義
	●	●	●	●		三、〇〇〇	元和七年家斷絶	黑田筑前守長政
	●	●	●	●		二、〇〇〇	元和七年就本封	松平右衛門佐忠之
	●	●	●	●		二、〇〇〇	久留米	田中筑後守忠政
	●	●	●	●		二、〇〇〇	久留米	有馬玄 蕃豐氏
	●	●	●	●		三、〇〇〇	柳川	立花飛彈守宗茂

種別名	海												修築總間數	修築擔當大名								
	肥前				肥後				豐前													
	三之丸	四之丸	五之丸	六之丸	七之丸	八之丸	九之丸	十之丸	十一之丸	十二之丸	十三之丸	十四之丸										
元和六年																						
元享元年																						
元永元年																						
元永五年																						
元永六年																						
三之丸																						
四之丸																						
五之丸																						
六之丸																						
七之丸																						
八之丸																						
九之丸																						
十之丸																						
十一之丸																						
十二之丸																						
十三之丸																						
十四之丸																						
領知高氏名	三池	佐賀	唐津	平戸	島原	大村	熊本	小倉	竹田	日田	石川主殿頭忠總	立花主膳正種次	鍋島信濃守勝茂	寺澤志摩守廣高	松浦肥前守隆信	松倉豐後守重政	大村民部大輔純頼	大村松千代純信	加藤肥後守忠廣	細川越中守忠興	細川越中守忠利	中川内膳正久盛

通計三五國	道												修築總間數	修築擔當大名						
	日向						豊後													
	一之丸	二之丸	三之丸	四之丸	五之丸	六之丸	七之丸	八之丸	九之丸	十之丸	十一之丸	十二之丸								
元和六年																				
元享元年																				
元永元年																				
元永五年																				
元永六年																				
三之丸																				
四之丸																				
五之丸																				
六之丸																				
七之丸																				
八之丸																				
九之丸																				
十之丸																				
十一之丸																				
十二之丸																				
領知高氏名	白杵	日出	佐伯	森	飯肥	延岡	高鍋	土佐原	島津右馬頭忠興	稻葉彦六典通	稻葉民部少輔一通	木下右衛門大夫延俊	毛利伊勢守高政	久留島右衛門市通春	久留島越後守	伊東修理大夫祐慶	有馬左衛門佐直純	有馬藏人康純	秋月長門守種春	島津右馬頭忠興

以上元和六年乃至八年寛永元年寛永五年寛永六年ノ修築工事ヲ經過シテ大成シタル所ノ徳川氏ノ大坂城ハ第十四圖ノ如シ其石垣ノ布置高低、堀ノ廣狹深淺等ノ詳カナルハ圖解上編ニ於テ本丸山里丸二之丸三之丸北ノ外ヲ次第シ各方面ニ區分シテ解説ス

附記 石垣修築ニ從事セル人々ニ對スル徳川氏ノ特殊ノ賞罰

元和六年此城普請著手以降褒賞ノ事ハ徳川氏ヨリ早ク已ニ施行セラレ諸大名及ヒ其重臣下奉行ニ至ルマテ賞典ニ均霑セルコトハ前段本文ニ記セシカ如シ今茲ニ是等ノ人々ノ中ニ就キテ右一般ノ褒賞ヲ受ケタル外別ニ又賞ニ罰ニ徳川氏ヨリ殊遇ヲ受ケタル者ヲ附記シテ當時此城普請ノ一世ニ及ホシタル所ノ影響ノ區域ノ廣クシテ且大ナリシコトヲ知ラシメントス
繩張役、普請總指圖役、兼普請助役、藤堂和泉守高虎ハ、元和六年七月十一日特ニ其分擔セル修築工事成速カナルコトヲ賞セラル

普請奉行戸田采女正氏鐵ハ寛永元年五月朔日、工事ヲ精勵セルコトヲ奉書ヲ以テ褒セラル

普請助役細川越中守忠利ハ寛永元年四月十二日其分擔セル修築工事ノ速カニ成功セルコトヲ褒セラレ。同年五月二十八日大坂ニテ忠利ノ重臣長岡式部有吉頼母ハ其擔當セル修築工事成功ニ至レル勲勞ヲ褒セラレ安藤右京進重長ヨリ將軍家光ノ命ヲ傳ヘテ時服、羽織ヲ賜ハリ翌二十九日秋元但馬守泰朝ヨリ前將軍秀忠ノ命ヲ傳ヘテ時服、羽織ヲ賜ハリ。又忠利ハ同年七月二十八日江戸城中ニ召サレテ修築工事ノ速カニ成功セルコトヲ將軍家光ヨリ褒セラレ。寛永五年九月十一日將軍家光ヨリ又特ニ内書ヲ賜ヒテ修築速成ノ功ヲ褒セラル

其他ノ諸大名及ヒ其重臣中ニモ是等特殊ノ恩命ヲ受ケタル者モ或ハアリシコトナラン但タ余ハ未タ文献ノ徵スヘキ者ヲ見サルノミ

細川忠利ハ寛永九年豊前小倉二十九萬九千石ヨリ九州第一ノ雄鎮タル肥後熊本五十四萬石ニ轉封セラル

戸田氏鐵ハ寛永十二年攝州尼崎五萬石ヨリ東山道ノ要衝タル美濃大垣十萬石ニ轉封セラル

普請奉行加々爪民部少輔忠澄ハ遠江中田一作掛塚ヲ領シ寛永中武藏相模共合セテ一萬石マテニ加増セララル

同堀式部少轉直之ハ越後推谷五千五百石ナリシニ寛永十年上總蒞谷ニテ四千石ヲ加増シ併セテ九千五百石トセラレ後チ一萬石トセラレタリ

其他日下部大隅守宗好等モ亦多少ノ特恩ヲ受ケシコトナラン而シテ是等ノ加封ノ事ハ徳川氏ハ重モニ此諸人ノ大坂城築造ニ勵精從事シタル勞ニ報イタル者ナリト云フ

獨リ徳永左馬助昌重ノ如キハ此修築工事ヲ怠慢ニ付シタリトノ事ヲ主因トシテ論ゼラレ寛永五年二月二十八日其領知美濃高洲五萬三千七百石ヲ沒收セララル

又藤堂高虎ニハ此時加封ノコトアラヌ因テ聊カ之ヲ辯センニ是ヨリ先キ高虎ハ伊賀ノ上野及ヒ伊勢ノ津ニテ二十二萬石ナリシニ元和元年大坂夏陣ノ軍功ニ因リ井伊掃部頭直孝ト均シク五萬石加増セラレ同時ニ又金銀分銅各一萬兩宛ノ者二個ヲ直孝ト均シク下賜セラレ元和三年高虎ハ忠秀ノ第五女

和子東福門院ヲ後水尾天皇ノ後宮ニ入内ノ事ヲ近衛殿ニ圖リ其内議成リタルニ因リ又五萬石此五万石ハ初メ伊勢田丸城付ノ地ニテ賜リタリシカ後此地ヲ紀伊家加増セラレタルヲ以テ當時三十二萬石ナリ其加増セラレテヨリ年ヲ經ルコト未ダ幾ハクナラス加之井伊直孝ノ三十萬石後三十五万石ニ對スル封土權衡上ノ關係モアル等ノ故ヲ以テ此時加封ノコトハ有ラサリシ者ナラン

案スルニ高虎ハ晚年益徳川氏ニ容レラレテ僧天海ト共ニ常ニ幕府ノ機密ノ事ニ參畫シテ其意見ヲ採用セラレタルト其徳川氏ヨリ高虎天海ガ受ケタル所ノ所遇ノ優渥ナルトハ他ノ諸大名中ニ比類アルコトナシ乃チ高虎ハ天海ト圖リテ今ノ東京上野公園ナル高虎ノ邸地ヲ獻シ此ニ東照宮ノ祠ヲ建テント言ヘハ幕府ハ忽チ是レヲ嘉納シ今ノ東京上野公園ハ不忍地ニ臨ムノ邸地タル頃ヨリ一名ヲ上野屋敷トモ稱シタルハ此地ノ形狀高虎カ領地タル伊賀ノ上野ニ似セルニ因リテ高虎ノ家人等ノ呼ビ始メタルニ起レル者ニテ其黒門車坂等ノ名ノ如キモ伊賀ノ上野ニ在ル所ノ名稱ヲ其儘付セル者ナリト云フ(大坂夏陣勳方餘録)高虎及ヒ天海死スレハ幕府ハ此兩人ノ像ヲ以テ日光東叡兩山ノ東照宮ノ神體ノ兩脇ニ配祀セル等ノコトヲ觀テモ徳川氏ガ高虎等ヲ其生前待ツコトノ特殊ナリシコトヲ知ルヘシ而シテ高虎

ノ斯ノ如ク德川氏ニ親任セラレ、ニ至レル所以ノ者ハ豊臣秀吉薨シテ後
ナ高虎ガ德川家康ニ心ヲ傾ケテ親近シ秀忠ノ世ヲ經テ家光ノ初世ニ互リ
終始德川氏ノ爲メニ盡ス所アリタルニ因ルナリ 其土木工事ノ一端ニ就キテ觀ル
モ本書卷首々記中ニ述ヘタルカ
如シ(大坂夏
御陣勤方餘録) 德川氏ト高虎トノ關係斯クノ如キ事情ナルヨリ推シテ之ヲ
觀ル時ハ德川氏カ高虎ノ此大坂城普請ノ勞ニ報ユルコトノ如キハ必スシ
モ他ノ大名ニ於ケルカ如ク急ニスルコトヲ要セストノ深意ハ德川氏ト高
虎ト交互ノ胸懷中ニ或ハ在リテ存シタルコトモアラン是レ高虎ノ細川忠
利戸田氏鐵等ト共ニ將軍ヨリ特別ナル褒賞ノ恩命ヲバ蒙リナカラ加封ノ
恩典ニハ獨リ與カラサリシ所以ナル乎

因ニ記ス東照宮ノ神體ノ兩脇ニ高虎天海ヲ配祀セルハ他故アルニ非ラ
ス家康臨終ノ際高虎天海ハ來世ニテモ不相替御奉公可申上ト言ヒタル
ヲ家康ノ嘉納シタルニ因ルナリ 大坂夏御陣勤方
餘録、攝殿實錄

殿館矢倉等ノ營建

首記 殿館其他造營ノ概要

元和六年七月十七日秀忠先ツ二之丸西北東三方面ノ矢倉多門造營ノ工事ヲ
起シ元和八年六月ヨリ北ノ外曲輪ノ倉庫造營ノ工事ニ著手シ寛永元年十二
月ヨリ家光更ニ二之丸ノ西之丸ニハ倉庫ヲ設置シ本丸ニハ殿館其他ヲ營建
スヘキ準備ヲ爲シ寛永三年正月ヲ以テ本丸ノ矢倉多門殿館及ヒ天主矢倉等
造營ノ工事ヲ起シ寛永五年七月以降二之丸南曲輪ノ矢倉并ニ大手玉造ノ諸
大門等造營ノ工事ヲ舉行ス凡ソ此造營工事ハ石垣修築ノ工事ト終始シ寛永
六七年ノ頃ニ至リテ大成シタル者ナルニ似タリ前後造營ノ事ニ與カリタル
者左ノ如シ

矢倉多門殿館天主矢倉造營奉行ハ小堀遠江守政一 號宗 材木買入方ハ大坂町
奉行島田越前守直時久貝因幡守正俊倉庫構造奉行ハ大番富永喜左衛門正義
横地勘之丞吉次作事奉行ハ五味金右衛門豊直喜多見五郎左衛門勝忠 以上
ニ係ル引用書ハ後
段本文中ニ載ス

矢倉多門高堀等ノ狹間ノ切開キ方ハ藤堂和泉守高虎ノ家士吉田六左衛門元

直米村勘左衛門一長ナリ元直ハ弓術一長ハ砲術ノ達人ニテ夙ニ將軍秀忠ニ知ラレタルニ因リ特ニ此狹間切開キヲ命セラレタル者ナリト云フ

大坂城御再造營書

御城の扉矢倉多門等之狹間は和泉守家來吉田六左衛門元直米村勘左衛門一長に爲切候様にの上意に而則兩人へ申付爲切申候事

六左衛門ハ雪荷齋重勝之子ニテ弓術ハ父ニ不劣者ニ御座候以前大和大納言秀長卿方ニ罷在和泉守舊識之者ニ御座候ニ付後ニ當家へ召抱梓權平元次共合而八百石宛行家中之者へ弓術指南爲仕候兩人大坂表五月六日七日兩日働有之候雪荷父子射術相勝候義ハ將軍家ニモ兼而御存知被拜領仕候且又御側衆へ卷葉前指南仕候様被仰付毎度江戸御城へ罷出候
勘左衛門ハ砲術精鍊之者ニ而以前増田右衛門尉長盛方ニ罷在關ヶ原以後當家へ召抱知行七百石遣シ鐵砲組預ク中廣大坂冬御陣之節和泉守申付城方ニ立有之候苗之吹貫之旗ヲ石火矢ニ而爲打候處手際ヨク打切堀へ落シ申候其砌尾張宰相様御見及被成殊外御感稱被成下其段台徳院様之上聞ニ選シ蒙仰候て家傳之藥方書指上申候
右之次第を以此度狹間切之御用も兩人へ被仰付候由ニ御座候

因ニ記ス藤堂和泉守高虎ハ此城普請ノ成ルヲ祝シテ所持ノ石火矢二十挺ヲ献シタルニ幕府ハ之ヲ玉造口ノ備砲ト爲シタリ

大坂城御再造營書

其節和泉守所持之石火矢貳拾挺爲御祝儀献上仕候處玉造口ニ被指置候由

國史眼

弓法ハ中絶シ第十六紀ニ日置正次正善射ヲ以テ著ハレ門人吉田重賢其術ヲ傳ヘ日置、吉田流ノ弓術起リ徳川氏ニ至リ盛ニ行ハル

右凡ソ十年間ニ營建セラレタル建物ハ概スルニ本丸殿館凡ソ六十六室四千六百餘坪、天主矢倉穴藏初重乃至五重凡ソ七百八十六坪、又周圍ニ屬スル大門矢倉多門合計凡ソ六十一棟、高堀物見合計凡ソ五十二箇所ニシテ右大門乃至物見ノ延長總間數凡ソ三千五百八十三間五尺、其餘城中各所ノ倉庫并ニ内外ノ大小番所等ト爲ス

右大門、矢倉、多門、高堀、物見等周圍ニ屬スル諸建物ノ棟數、箇所、延長間數并ニ是レニ切り開カレタル窓、石落、狹間等ノ員數ハ第七表ノ如シ其詳ヲカナルハ載セテ第八表ニ在リ

第七表 備考

一本表ハ大坂城ノ本丸山里九二之九三之九ノ周圍ニ屬スル諸大門、矢倉、多門、高堀、物見等ノ棟數、箇所、延間數及ヒ是等ノ建物ニ切開カレタル窓、石落、狹間、出堀等ノ員數ヲ綜覽スヘキカ爲ニ調製セリ但本表ハ第八表ヲ節約シテ編製シタル者ナルヲ以テ其製表ニ關スル事ハ總テ第八表ノ備考ニ載ス

德川氏ノ大坂城大門矢倉多門高堀物見等ノ棟數箇所間數狹間綜覽表 第七表

種別	曲輪		諸大門 同所升形多門	矢倉		多門 姫門共	合計		高堀 出外 見	物見	合計	通計
	棟數	延間數		二重	三重		六棟	一棟				
建	六棟	三七四	六棟	一二棟	一四棟	二六棟	六一棟	一八ヶ所	二ヶ所	二ヶ所	五二ヶ所	六ヶ所
物	三棟	二七四	三棟	一二棟	一四棟	二六棟	六一棟	一八ヶ所	二ヶ所	二ヶ所	五二ヶ所	六ヶ所
棟數及	三棟	二七四	三棟	一二棟	一四棟	二六棟	六一棟	一八ヶ所	二ヶ所	二ヶ所	五二ヶ所	六ヶ所
延間數	三棟	二七四	三棟	一二棟	一四棟	二六棟	六一棟	一八ヶ所	二ヶ所	二ヶ所	五二ヶ所	六ヶ所
窓	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
石	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
落石	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
狹間	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
隱狹間	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
矢狹間	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
鐵砲	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
出堀	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二
合計	三	二	三	二	二	二	二	二	三	三	二	二

右本表ニ掲載セル外窓狹間等ノ設ケアラサル多門二棟高堀七ヶ所アリ其詳ヲカナルハ載セテ第
八表備考第三項ニ在リ

右ハ此城ノ建物造營等ニ關スル事項ノ概要トス左ニ毎工事ヲ次第シテ叙述
ス

第十五章 矢倉多門殿館天主矢倉ノ營建

元和六年七月十七日二代將軍秀忠ハ二之丸ニ矢倉ヲ構造スルニ因リ小堀遠江守

政一ヲ舉ケテ造營奉行ト爲ス

元和七年冬二之丸ノ諸矢倉成ル

台徳院殿御實記元和六年庚申七月十七日

小堀遠江守政一ハ外郭諸櫓構造の奉行をつとめ翌年の冬に至り成功す

元和八年六月二之丸ノ多門過半成ル是ニ於テ秀忠ハ是月更ニ大番頭高木主水正

正次松平半三郎重則ニ命スルニ倉庫ヲ設置スヘキ事ヲ以テシタルニ因リ正次重

則ハ大番富永喜左衛門正義横地勘之丞吉次ヲ以テ奉行ト爲シ倉庫十二棟ヲ構造

ス案スルニ大坂城中ニ多數ノ倉庫アルハ北ノ外曲輪ト西之丸トナリ然ルニ翌寛

永元年ニ至リ西之丸ニ倉庫建設ノ舉アレハ今ノ建設ハ北ノ外曲輪ナルヘシ

台徳院殿御實記元和八年壬戌六月

是月大坂城外郭石壘多門過半成功よて成役の番頭高木主水正正次松平半三郎重則に府庫を構造すへ
しと命せられ大番富永喜左衛門正義横地勘之丞吉次を奉行として府庫十二構造せしめらる

元和九年二月是ヨリ先キ二之丸ノ多門成ル

是月秀忠ハ小堀遠江守政一ニ命シ本丸ニ假館ヲ造營ス今年秀忠家光父子上洛シ此城ニモ來臨スヘキヲ以テナリ第十二章參看

台徳院殿御實記元和九年壬戌二月

是より前キ外郭石垣多門并ニ本丸の天主臺は成功す

今年は兩御所御上洛ありて大坂へもわたらせらるへければ先假殿を造營すへしこ小堀遠江守政一に命せらる

寛永元年十二月五味金右衛門豊直ハ本丸西丸作事奉行ト爲リ堺攝津河内和泉奉行喜多見五郎左衛門勝忠ハ本丸西丸作事奉行兼勤ト爲ル

大猷院殿御實記寛永元年甲子十二月

此月五味金右衛門豊直は大坂城本丸西丸作事奉行喜多見五郎左衛門勝忠は堺攝津河内の奉行にて兼勤す

案スルニ西之丸ニハ乾坤兩矢倉ヲ除クノ外ハ多數ノ倉庫アルノミナリ然ルニ此兩矢倉構造ノ事ハ是ヨリ先キ元和六年七月中小堀政一ニ命シタレハ今西丸作事奉行ヲ設ケタルハ西丸ニ倉庫ヲ構造スルニ在ル者ナルコトヲ知ルヘシ而シテ本丸ノ作事奉行ハ殿館其他諸建物構造ニ關スル諸般ノ施設ノ準備ヲ爲スニ在リシ者ナラン

寛永三年正月三代將軍家光ハ本丸ニ殿館并ニ天主矢倉ヲ構造スルニ因リ申子テ小堀遠江守政一ヲ以テ造營奉行ト爲ス

大猷院殿御實記寛永三年丙寅正月

この月小堀遠江守政一が大坂城天守本丸構造の奉行を命せらる

寛永五年二月二日是日二之丸南ノ曲輪石垣修築ノ工役起ル等テ大手并ニ玉造口升形及ヒ橋臺ノ改築アリ(第十四章參看)

六月三日一昨年寛永三年正月ヨリ構造ニ著手セル本丸ノ殿館其他ノ諸建物ノ大成スルニ至レルハ顧フニ大抵此頃ニ在ラン是日家光ハ使番大久保源三郎忠知神尾内紀元勝ヲ此城ノ目付ト爲シ赴任セシムルニ因リ訓令ス下奉行六人作事練熟スルニ因リ日ナラス成功スル由板倉内膳正重昌言上セリ是等ハ戸田左門氏鐵加々爪民部少輔忠澄堀式部少輔直之ト内議ヲ爲シ將軍其勳勞ヲ感賞セラル、旨ヲ彼ノ下奉行等ニ傳フルヲ以テ善シトスレハ其傳達ノ取計ヲヒハ氏鐵等三人ニ委任スヘシト

大猷院殿御實記寛永五年戊辰六月三日

使番大久保源三郎忠知花畑番神尾内紀元勝大坂の目付命せらる、により授けらる、論文にいふ

下奉行六人作事練熟するにより日ならず成功するよしこれも重昌聞へあく此等は左門氏鐵加々爪民部少輔忠澄堀式部少輔直之と内議し御威の旨傳へ然るへきにおいては三人指揮にまかすへし

案スルニ實記六人ノ下奉行ノ名ヲ明記セス故ニ何人タルヲ知ル可カラス然レトモ其作事練熟スト言ヒ且前後ノ關係ヨリ推測スルニ下奉行六人トハ富永喜

左衛門正義横地勘之丞吉次五味金右衛門豊直喜多見五郎左衛門勝忠吉田六左衛門元直米村勘左衛門一長ノ六人ヲ指定セル者ナルニ似タリ本章首記參看今姑ク斷シテ六人ノ下奉行トハ以上ノ六人ナリト見做シテ編述ス

願フニ本丸ノ殿館其他ノ建物ハ右ノ如ク殆ント大成ニ至ラントセル故ナラン是月ヲ以テ二之丸南ノ曲輪等ノ矢倉并ニ諸大門構造ノ事興ルニ至レルコト左ノ如シ

六月廿三日家光ハ安藤右京進重長ヲ秀忠ハ青山大藏少輔幸成ヲ上洛セシムルニ因リ大坂ノ町奉行島田越前守直時久貝因幡守正俊ニ訓令ヲ爲セリ曰ク大坂城ノ矢倉并ニ諸門ノ造營ニ供スヘキ木材ヲハ豫メ買置クヘシ

大猷院殿御實記寛永五年戊辰六月廿三日

本城より安藤右京進重長西城より青山大藏少輔幸成を上洛せしめらるゝ、によて令し下されしは坂城櫓并諸門の材木あらかしめ買へきよし島田越前守直時久貝因幡守正俊へつたふへし

然ラハ二之丸南之曲輪ノ諸矢倉并ニ大手玉造等ノ諸門ノ如キモ此命令ニ因リテ買入タル所ノ木材ヲ以テ是歳七月以降ニ於テ造營ニ著手セル者タルコトヲ知ルヘシ

七月十八日江戸老中ヨリ奉書ヲ以テ大坂ニ滞在セル青山大藏少輔幸成安藤右京進重長ニ訓令ス六人ノ下奉行殊ニ精力ヲ盡シテ事ニ從フ由ナレハ時服ニ金銀ヲ添ヘテ賜ハルヘキ乎此事ハ大坂町奉行島田越前守直時久貝因幡守正俊等ト能ク協議シテ計ラフヘシト尋テ此老中奉書ノ訓令ニ據リ青山幸成安藤重長ヨリ將軍ノ命ヲ傳ヘ事業勉勵ノ褒賞トシテ六人ノ作事下奉行ヘハ時服ニ金銀ヲ副テ賜リタルコトヲ知ルヘシ

大猷院殿御實記寛永五年戊辰七月十八日

大坂へ御使せし青山大藏少輔幸成安藤右京進重長へ奉書もて諭せられしはこたひ甲子寛永元年の例もて島田越前守直時官宅にて其地の下奉行等に帷子羽織を下され各かしこみしむね聞えあけぬまた六人の下奉行ことさら精力をつくすよしなれば時服に金銀をもそへてたまはるへきか其の事は直時正俊等と能くはかりあふへし

右文中ノ石垣修築ニ關スル下奉行賞與ノコトハ第十四章ニ出タセリ

寛永七年六月二十一日家光ハ此城修築工事ノ爲メニ頽毀セル家屋ノ地子及ヒ現在退石ヲ置ク所ノ地子ヲ免除セリ第十四章參看

願フニ前項ニ舉ケタル所ノ二之丸南ノ曲輪ノ諸矢倉并ニ大手玉造等ノ諸門ノ造營モ亦大抵此前後ニ成就シ右元和六年元和八年寛永元年寛永三年寛永五年ニ大

小五回ニ起シタル此城ノ矢倉多門殿館天主矢倉倉庫等ノ造營工事ハ此ニ至リテ始メテ大成シタル者ナルヘシ而シテ右ニ記載セシ所ノ外是等建物造營ニ關スル記事ノ詳細ナルハ諸書并ニ見ル所無シ

以上凡ソ十年間ニ營建セラレタル建物ハ前項首記ノ末段ニモ記セルカ如ク概スルニ本丸殿館、天主矢倉、城中各所ノ倉庫、及ヒ内外ノ番所、其餘周圍ノ大門、矢倉多門、高塀、物見等ト爲ス而シテ大門、矢倉、多門、高塀、物見等ノ延長總間數ハ凡ソ三千五百八十三間五尺ニシテ内曲輪本丸凡ソ八百八十六間四尺、外曲輪二之丸凡ソ二千六百九十七間一尺ナリ其窓、石落、石狹間、隱狹間、矢狹間、鐵砲狹間、出塀ハ總數凡ソ四千五百五十七ニシテ内曲輪凡ソ千三百、外曲輪凡ソ三千二百五十七大手門并ニ同所升形東側ノ多門ノ窓其他ノ數ハ未詳ナルカ故ニ此數中ニ算入セスアリ今大門、矢倉、多門等ヲ各其所在ノ位置ニ從ヒテ本丸山里丸二之丸三之丸各方面ニ區分シ其切り開カレタル窓、石落、狹間等ヲモ併セテ記載スレハ第八表ノ如シ

第八表 備考

一本表ハ大坂城ノ本丸山里丸二之丸三之丸ノ周圍ニ屬スル大門、矢倉、多門、高塀、物見等ノ位置及ヒ棟數、箇所、延間數并ニ是等ノ建物ニ切開カレタル窓、石落、狹間、出塀等ノ員數ヲ綜覽スヘキ爲ニ調製セリ

一本表矢倉ハ隅々ニ在ルニ因リ外面ニ向フ所ノ兩面ノ間數ヲ掲ク但初重ノ間數ナリ

一本表本丸ニ在リテハ内多門十七間三尺

二之丸ニ在リテハ玉造定番屋敷北手ノ多門十五間五尺右ノ多門ノ東手ノ塀長二

右同所帶曲輪南埋門兩脇ノ塀長極樂橋外西東南仕切門兩脇ノ塀長長六十六

三之丸ニ在リテハ鳴野橋内西仕切兩脇ノ塀長

ハ窓、狹間等アラサルヲ以テ是レヲ載セス但右ノ多門以下ハ内構ニ屬スル者ニシテ其間尺ヲ合計スレハ延長二百二十六間四尺ナリ長欠ケタル者ヲ除ク

一本表二之丸北手伏見矢倉脇以東青屋口大門々々臺マテノ多門三棟ノ間ニ介在スル

二ヶ所ノ塀長延六ハ窓狹間等無シト雖モ外構ニ屬スル故ヲ以テ其箇所并ニ間數ヲ掲載ス

一二之丸大手門并ニ同所升形東側ノ多門ノ窓、狹間ハ編者未タ其員數ヲ詳カニセ

ス故ニ本表姑ク是等ノ員數ヲ掲載セス

一本表ノ三之丸高塀ノ間數ト第三表及ヒ第五表ノ三之丸石垣ノ間數トノ過不足アルノコトハ第三表ノ備考ニ記セリ

一本表大門、矢倉、多門、高塀、物見等ハ前項本文ノ末段ニ記セルカ如ク現在實物ノ

所在ノ位置ニ從ヒテ掲載セル者ナレハ大坂城總圖第四十ト對照シテ熟覽スヘシ是

レ編者ノ讀者ニ希望スル所ナリ

德川氏ノ大坂城大門矢倉多門高塀物見等ノ棟數箇所間數狹間諸曲輪各方面區分表 第八表

曲輪方面	種別	建物	棟數及箇所	延間數	狹間		員數	鐵砲	出塀	合計	
					石落	隱狹間					
南面	自東南隅多門(水號)至西南隅多門(水號)	櫻門	一棟	一七二	二四	五				一九	
		矢倉三重	二棟	二六〇	四〇	九				二〇九	
		多門	五棟	一四四	三三	八〇				二五七	
		高塀	門冠木	二ヶ所	二二二						二二二
		物見	一ヶ所	二五		二					二七
		小計	八ヶ所	一七二	二八	九					一九
		矢倉三重	四棟	五〇	室	一五					六五
		多門	五棟	九七	四九	六四					一六一
		高塀	門冠木	二ヶ所	二二二						二二二
		小計	三ヶ所	一七二	二八	九					一九
西面	自西南隅矢倉(水號)至西北隅多門(水號)及北帶曲輪東北隅取付	小計	九ヶ所	三三〇	二八	一五				三三	
		高塀	門冠木	二ヶ所	二二二						二二二
		多門	五棟	九七	四九	六四					一六一
		矢倉三重	四棟	五〇	室	一五					六五
		高塀	門冠木	二ヶ所	二二二						二二二
		物見	一ヶ所	二五		二					二七
		小計	八ヶ所	一七二	二八	九					一九
		矢倉三重	四棟	五〇	室	一五					六五
		多門	五棟	九七	四九	六四					一六一
		高塀	門冠木	二ヶ所	二二二						二二二

丸山		丸	
東面		北面	
自東北隅矢倉(水號)至東南隅矢倉(水號)及南手ノ物見		自西北隅多門(水號)至東北隅多門(水號)	
多門	共姫門	三棟	八九〇
矢倉	三重	一棟	一三〇
高塀	門冠木	二ヶ所	二二二
小計	四ヶ所	一〇五三	七三
矢倉	三重	四棟	五〇
多門	門	三棟	一〇六一
高塀	門冠木	一ヶ所	四四
物見	一ヶ所	二四	一
小計	七ヶ所	一六九三	一四八
本丸	合計	二八棟	四六五
山里	大門	一棟	一五二
矢倉	二重	二棟	二六〇
多門	門	五棟	一八四
高塀	門冠木	二ヶ所	二二二
小計	三ヶ所	四六三	四
高塀	門冠木	二ヶ所	二二二
外構	共	三ヶ所	四六三
合計			三三三

曲輪方面別	建築物	棟數及延間數		狹間		員		數	
		棟數	延間數	石落	石狹間	矢狹間	鐵砲	出塀	合計
西面 自大手門大 至京橋口大 門際	山里丸合計	八ヶ所	二五三	三五	三	二七	四	二八	二八三
	本丸通計	三ヶ所	八六四	五九	四	二	二	一六	一三〇〇
	大手門	一ヶ所	四七四
	大所升形東多門	一ヶ所	四七四
	矢倉二重	三ヶ所	四〇〇
	多門ハ號	一ヶ所	一三五
	高塀	四ヶ所	二八四
	高塀外	四ヶ所	二八四
	小計	八ヶ所	四七三
	京橋口大門	一ヶ所	五五
	同所升形多門	一ヶ所	五五
	矢倉三重	一ヶ所	一七〇
多門ル號	二ヶ所	一八三	
高塀	二ヶ所	二二三	
高塀外	三ヶ所	一〇三	
北 面 自京橋口大 至青屋口大 門際	高塀	三ヶ所	一〇三

東面 自青屋口大 至玉造口大 門際		南面 自玉造口大 至大手門際		西面 自京橋口大 至藏曲輪東 仕切門際		東面 自青屋口大 至玉造口大 門際	
小計	五ヶ所	三三三	一五六
青屋口大門	一ヶ所	四三三	三五
矢倉二重	一ヶ所	一五〇
高塀	五ヶ所	三三四
高塀外	五ヶ所	三三四
小計	五ヶ所	三三三
玉造口大門	一ヶ所	四三三
同所升形多門	一ヶ所	四三三
矢倉二重	一ヶ所	一三〇
多門ソ號	二ヶ所	二四〇
多門タ號	二ヶ所	二四〇
高塀	六ヶ所	二四二
高塀外	六ヶ所	二四二
小計	八ヶ所	三〇〇
二之丸合計	二ヶ所	三三二
二之丸通計	三ヶ所	三六六
高塀	四ヶ所	八五〇
三之丸	三ヶ所	三六六
三之丸通計	六ヶ所	一〇八九
總計	五二ヶ所	三三三

大坂城誌第五卷 大坂城建築參考 德川氏 殿館矢倉等營建

右大門、矢倉、多門、殿館、天主矢倉、倉庫等ノ位置ハ第十四圖ノ如シ而シテ大門、矢倉、多門等ハ右圖中ニ標記セルイロハノ符號ニ照應シ圖解上編ニ於テ本丸山里丸ニ之丸三之丸^{北ノ外}ナ次第シテ一々其構造ヲ解説シ殿館ハ別ニ第十九圖ヲ揭ケ圖解下編ニ於テ殿中各室ノ構造ヨリ室内ノ裝飾繪畫ニ説キ及ホシ天主矢倉又第二十圖乃至第二十九圖ヲ揭ケ同下編ニ於テ其構造ヲ解説ス

附記 建物造營ニ盡力セル人々ニ對スル徳川氏ノ處遇

石垣修築ニ從事セル人々ニ對シテハ元和六年三月以降慰勞褒賞ノ數回ノ恩命アリシコトハ前章ニ記セシカ如シ而シテ此建物造營ニ從事セル人々ニ對シテモ亦六人ノ作事下奉行ニ優渥ナル褒賞及ヒ慰勞ノ恩命アリシコトハ右本章ニ記セシカ如シ右ノ外大坂町奉行久貝忠左衛門正俊島田清左衛門直時ハ寛永二年正月元日叙爵シテ正俊ハ因幡守、直時ハ越前守ト稱スベキ恩命アルニ至レリ顧フニ徳川氏ハ此他猶ホ造營ニ從事セル人々ニ賞與ヲ行ヘルコトアルベケレド載籍之ヲ省略シテ今見ル所無シ而シテ造營奉行小堀遠江守政一^{號宗}ハ茶道庭園ノ技藝ニモ勩能ニシテ其父小堀新助正次^{正次慶長九年二月廿九日歿}其遺領近江小室一万二千四百六十石子政一繼ク政一初メ作助ト稱ス以來殊ニ家屋建築ノ事ニ精シク凡ソ徳川氏ノ興セル重モナル土木ノ工事ニハ伏見江戸城中ノ諸建物等ヲ初メトシテ政次父子ノ設計ニ成レル者多シト云フ

大坂城誌華一名浪第六卷

大坂城建築彙考第四

圖解上

徳川氏ノ大坂城諸曲輪諸門矢倉多門
及ヒ倉庫諸建物總圖解

首記 城ノ大體

此城ハ本丸山里丸二之丸三之丸北ノ外曲輪トモ云フノ四大曲輪ヲ以テ成リ土地ハ本丸最モ高ク二之丸ノ南部之ニ亞キ山里丸又之ニ亞キ二之丸ハ漸ク北シテ漸ク低ク三之丸最モ低シ

錦城明細秘録ハ此城ノ間數坪數ヲ記シテ云フ本丸ハ周廻六百二十三間二尺二之丸ハ周廻千四百三十四間四尺三之丸ハ仕切曲輪京橋堀際ヨリ玉造藏曲輪東仕切門際ニ至ル周廻八百十六間三尺ニシテ總坪數ハ凡ソ二十三萬餘坪ナリト

石垣ノ高サハ本丸ノ東手ニテ十三間半ニ之丸ノ南手ニテ十二間半山里丸ノ西手ニテ七間半三之丸ノ北手ニテ三間半ナリ

石垣ノ石ノ大ナルハ此城ヲ以テ天下第一ト爲ス就中巨大ナル石ニハ諸大名ノ家紋或ハ合印等ヲ刻セルモノアリ但シ此城ノ石垣ニハ伏見廢城ノ石モ亦混淆スルニ因リ同城ヲ築造セル諸大名ノ家紋等モ亦アリト知ルヘシ

此城ノ石垣ハ切合ノ築造法ヲ用井且石面ハ之ヲ磨カス

海國兵談

石垣に三等あり野面、打關、切合、なり、まづ、ノヅラは生れの儘の石を築く、ウチカキは石の角々打欠て築く、切合は空閒なきやうに切合せたるなり

大猷院殿御實記 寛永五年戊辰三月十四日板倉内膳正重

坂城の營築礎石成功せしとき関すへし中略 石面磨くへからす

此城ノ石垣ハ長キ大石ヲ組合セ其合セ目ヲ鉛ちきりニテ三ヶ所ツ、緊シク繋キタル者ト云フ故ニ此城ハ全城實ニ一箇ノ大磐石ヨリ成レル者ニ異ナラス

石垣ノ内廻リハ本丸ハ總がんぎ造リニテ山里丸ハがんぎ大小凡ソ十ヶ所ニ之丸ハがんぎ大小凡ソ七十四ヶ所ニ之丸ハがんぎ大小凡ソ十一ヶ所アリ

虎口大升形ノ冠木門及ヒ中仕切小升形門等ノ兩脇ハ何レモがんぎ造リニテ冠木門外ノ橋臺モ兩側或ハ片側ハがんぎ造リナリ

虎口大升形ハ七ヶ所ニシテ本丸及ヒ山里丸ニ櫻門、姫門、山里門ノ三ヶ所ニ之丸ニ大手、京橋、青屋、玉造ノ四ヶ所アリ 此七ヶ所ニハ何レモ大門及ヒ冠木門アリ其他諸門ノ重モナル者ハ本丸ニ櫻門内東手ノ大番頭泊番所脇門、

同所北續キ内多門ノ南北兩門、玄關前西手ノ堀重門、小天主下西手ノ御成門、天主下西手ノ仕切門ノ六ヶ所、山里丸ニ姫門西手ノ帶曲輪入口門一ヶ所、二之丸ニ太鼓矢倉脇南仕切門、西丸前北手ノ北仕切門、極樂橋外西東兩仕切門、

厂木坂門、同所南手ノ築違仕切門、東仕切門トモ云フ玉造帶曲輪南北兩埋門ノ八ヶ所、

三之丸ニ筋鐵門、鳴野橋門、同所藏曲輪西仕切門、同曲輪東仕切門ノ四ヶ所アリ合計大小二十六門ナリ 此除本丸ノ各通用門并ニ山里丸ニ之丸ノ役人屋敷小

本丸山里丸ハ總多門構ニ之丸ハ東南西ノ三面ハ高堀構北ノ一面ハ多門構ナリ何レモ所々ノ隅々ニハ矢倉アリ三之丸ハ總高堀構ナリ

矢倉ハ總數二十六棟ニシテ本丸ニハ三重十一棟山里丸ニハ二重二棟ニ之丸

ニハ三重一棟二重十二棟此餘本丸ニ五重ノ天主矢倉一棟二之丸ニ太鼓矢倉一棟アリ

多門ハ總數二十九棟ニシテ本丸ニ十六棟山里丸ニ五棟二之丸ニ八棟アリ高塀ハ五十ヶ所ニシテ此内冠木門脇又ハ中仕切門脇ニ屬スル者十八ヶ所出升形又ハ外構ニ屬スル者二十二ヶ所アリ其位置及ヒ種別等ハ第八表之ヲ詳ラカニス又物見二ヶ所ハ本丸ニ在リ

此餘窓、狹間等ノ設ケアラサル多門二棟アリ本丸東手ノ内多門^マ二之丸玉造内北手ノ多門^ツ是レナリ又塀ハ同上ノ者七ヶ所アリ二之丸玉造内北手ノ多門^ツノ東脇、同所帶曲輪南埋門脇、極樂橋外西東兩仕切門脇、三之丸鳴野橋内西仕切門脇ノ塀是レナリ右ハ何レモ第八表備考第三項ニ詳記セルヲ以テ茲ニ贅セス

右矢倉以下何レモ總塗籠白壁ニテ屋根瓦葺ナリ但天主矢倉ノ屋根ハ瓦葺ナリシ乎銅葺ナリシ乎ハ今攷フル所ナシ

案スルニ此城ノ正殿ヲ銅御殿ト稱ス屋根ノ銅葺ナルニ因リ此稱謂ノ興リ

タルモノナラン已ニ是等ノ類例アリ且江戸城天主矢倉ノ屋根ノ銅葺ナリシ等ニ據リテ類推スレハ此大坂城ノ天主矢倉ノ屋根モ亦恐ラクハ銅葺ナリシナラン 第三十六章(銅殿)第三十九章(天主矢倉)參看

矢倉ノ屋棟ハ總テ殿館ト平行シ東西兩側ノ矢倉ノ屋棟ハ南北ニ通り南北兩側ノ矢倉ノ屋根ハ東西ニ通り以テ殿館ヲ周匝擁護スル形象ヲ表シ獨リ天主矢倉ノ屋棟ハ本丸殿館ニ直隸直向シテ南北ニ通り以テ全城ヲ鎮護スル形象ヲ表セリ

狹間ハ天主矢倉ニ在リテハ四方面共ニ切り開カル、モ其餘周圍ノ矢倉多門等ニ至リテハ狹間ハ總テ外ニ向ヘル方面ノミニ切り開カレ城内ニ向フ方面ニハ開設セラレス而シテ天主矢倉以下矢倉ノ内廻ハリニハ四方面共ニ武者走りアリ多門ノ内廻リニハ外側ニ向ヘル方面ノミニ武者走りアリ

大門矢倉多門其他此城四方面ノ形象ハ第十五圖乃至第十八圖ノ如シ 明治三十二年七月ノ寫真ニ係ル

井ハ總數二十九ニシテ本丸ニ五ツ山里丸ニ二ツ二之丸ニ二十一 大手橋臺ノ

外ニツアリ

此城修築ノ繩張ハ藤堂和泉守高虎德川氏修築第十
二章首記參看殿館、矢倉、多門、高堀等ノ構
造ハ小堀遠江守政一第十五
章參看狹間切開キハ藤堂高虎ノ家士弓術家吉田六左衛
門元直、砲術家米村勘左衛門一長、諸倉庫ノ構造ハ大番富永喜左衛門正義橫
地勘之丞吉次ナリ第十五
章首記參看

右ハ此城ノ總體ニ關スルモノ、概要トス左ニ各曲輪ニ分テ詳述ス

德川氏ノ大坂城之總圖ハ第十四圖ノ如シ

附言

豐臣氏ノ大坂城ノ二之丸ハ今ノ大手京橋玉造ノ三虎口外ニ當ル所ニ各壯
大ナル馬出曲輪アリ此三箇ノ馬出曲輪アリテ此城二之丸ノ築城ノ體始メ
テ具ハリ守備ノ用亦始メテ全キヲ見ルナリ

因ニ記ス元治元年長州藩ニ事アリ大坂城中戒嚴ノ議興リ、幕府雇郡上
藩軍學者山脇治右衛門ハ此城ニ馬出曲輪ヲ設置スベキ議ヲ首唱セシカ
バ、城代松平刑部大輔信古、玉造口定番京極主膳正高富、京橋口定番保

科彈正忠正益、町奉行松平大隅守信敏、目付德永主税并ニ若年寄稻葉兵
部少輔正巳モ亦此議ヲ賛成シタルニ因リ乃チ治右衛門及ヒ幕府軍艦役
庄内藩佐藤與之助、薩州藩木脇權一兵衛ハ繩張ヲ爲シ、破損奉行齋田角
左衛門ハ人夫ヲ督シ大手京橋玉造三虎口外ニ遽カニ胸壁ヲ築造セリ此
三虎口外ノ馬出曲輪ノ此城ニ必用ニシテ缺ク可カラサル事ハ古今一ナ
ルヲ知ルヘシ

右山脇等ノ築造セル胸壁ノ圖ハ第十四圖ノ大手京橋玉造三門外ニ附刻
シテ讀者ニ示ス

又豐臣氏ノ三之丸ハ概スルニ東面ハ藏曲輪以南猫間川通リヲ伏見町ノ邊
ニ達シ南面ハ稻荷町ノ邊ヨリ西ニ折レテ宰相山眞田山等ノ北通リヲ東横
堀ノ邊ニ至リ西面ハ東横堀通リノ邊ヲ北ノ方淀川ニ及ホシ北面ハ東横堀
ノ邊ヨリ以東淀川南岸通リヲ京橋ニ至リテ今ノ仕切曲輪ニ合スルモノナ
リ故ニ今ノ三之丸則チ藏曲輪及ヒ仕切曲輪ハ豐臣氏ノ三之丸ノ一小部分
ニ過キサルモノトス第八章首記、第十章及
第十圖第十二圖參看

本丸

首記 本丸ノ大體

本丸ハ寛永元年ノ修築ニ係リ第十三章及第十四圖參看此城ノ中心ニシテ、南櫻之門ヲ大手トシ、西北、姫門ヨリ山里丸ト通シ山里丸大門ヲ以テ搦手トシ總多門構ニテ多門ノ隅々ニ三重ノ矢倉十一棟アリ中ニ殿館倉庫等ヲ營建シ殿館ノ北ニ五重ノ天主矢倉ヲ起テ全城ノ鎮護トス又東南ニハ内多門構アリ其東ヲ廐曲輪トシ西北外側ニハ總高堀構アリ帶曲輪トス而シテ櫻之門升形ハ渡矢倉多門構、姫門ハ多門續キノ構ニテ姫門外ノ山里出升形ハ高堀構ナリ

本丸ハ此城第一ノ高地ナリ寛永元年ノ城普請圖ニ據レハ小天主臺上黃金水ノ井ハ地上ヨリ水面マテ十八間二尺廐曲輪ノ井ハ全十四間一尺臺所前銀水ノ井ハ全十四間五寸金藏前金水ノ井ハ全十三間五尺五寸敷寄屋圍ノ井ハ全十三間五尺五寸ナリ

本丸山里丸等ノ四面ノ總間數ハ凡ソ左ノ如シ

南面東西百十間餘北面東西九十二間餘東面南北百四十五間餘西面南北百三十七間餘

此周廻六百二十三間二尺總坪數 一萬四千餘坪ト稱ス

石垣ノ高サハ南面櫻之門東手空堀ニテ十間全所西手ニテ八間半西面堀ニテ十二間半北面山里丸橋樂橋西手ノ堀ニテ七間半東面堀ニテ十三間半ナリ

周圍ノ堀ハ南面及ヒ西面ノ南部ハ空堀ニテ西面ノ北部并ニ北東ノ兩面ハ水入りナリ傳ヘ云フ空堀ノ底ハ渾テ平石ニテ敷キ詰メテアリト而シテ本丸山里丸ノ堀ノ周廻ハ七百四十八間二尺ト稱ス

堀巾ハ南面櫻門橋臺ニテ十五間半西面中央ニテ三十四間北面極樂橋ニテ二十六間半東面中央ニテ二十三間ナリ

右石垣及ヒ堀ハ關西三十二國ノ大名六十家ノ分擔修築セル者ナリ

周圍

第十六章 南面 自櫻之門口 至南西隅

大坂城誌第六卷 大坂城建築考 徳川氏 諸曲輪諸建物圖解

櫻之門口南向

本丸ノ大手ニテ兩大番頭持ナリ陪臣ノ輩入ル事ヲ禁ス

升形

東西十四間二尺餘南北十二間二尺餘此升形ニハ有名ナル大石多シ

金城開見録但左ノ本文ハ攝管秘録大坂城圖解ヲ參照シテ少シク取捨スルモノナリ

龍虎石

冠木門左右高塚下の石垣の南面に在り東を龍石とし西を虎石とす二ツ共高さ二間餘横

三間半餘ありて相對峙する勢あり石は御影石にて赤色を帯ひ龍虎の象髣髴として自ら石面に顯はる雨の降る日には平常にても能く見ゆれども梅雨の頃には殊に鮮に顯はると云ふ

蛸石

升形の中北側面に在り高さ四間半横六間餘地上より多門まで一石にて支へたり蛸の形自ら石面に顯はる顯象季節の關係は都て龍虎石に同じ

振袖石

升形の中西側面に在り石の形振袖に似たるに因り此名あり斜に石垣に横たはれり高さ二間半餘横六間半餘あり

角石

櫻の門臺内に在り高さ四間半此石亦地上より橋まで一石にて支へたり巨石は此外所々にあれども是等を以て冠と爲す二之丸京橋口升形の中にも亦二箇の巨石あり

寛永系圖傳池田家譜

忠雄宮内少輔 寛永元年又築大坂櫻門石垣壹四間横八間ノ一大石ヲ備前國ヨリ運送ス

然レハ右等ノ巨石中ニハ池田忠雄ノ備前國ヨリ運漕シ來レル者アルヲ知ルヘシ

又二之丸ノ大手門ニハ加藤肥後守ト銘ヲ鐫セル巨石モアリ其餘諸大名ノ運搬シ來レル石モ亦尠ナカラザルナラン第十二章昔記修築ニ用ヘタル石ノ出所ノ條參看

櫻之門西向

本丸 升形ノ東側ニ在り渡矢倉構ニテ總筋鐵張ナリ門臺并ニ門臺南續キナル多門ノ西端共合シ長十七間二尺餘、窓十四、石狹間五、大番頭預ナリ

冠木門南向

升形ノ南側ニ在り總筋鐵張ナリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ兩脇塀長延十二間二尺餘、石狹間八、

旗臺

冠木門内兩脇ニ在ル石垣ノ臺ナリ

橋臺土橋ト稱ス

冠木門外ノ渡リナリ幅六間長十五間半橋臺ノ兩側ニハ大石ヲ切合セテ二段ニ疊上ケタルがんぎアリ

番所

櫻之門内東手ニ表大番所西向アリ大番衆出番ス同所南手ニ大番與力番所北向アリ升形ノ中西手ニ大番同心番所東向アリ

鐵砲方預多門本丸

升形ノ上櫻之門ヨリ北西兩面ニ折廻リ建連ラナル次キノ鐵砲方預多門ヲ合シ長延五十六間三尺餘、窓三十二、石狹間四十、

鐵砲方預多門本丸

櫻門升形上ノ鐵砲方預多門際ヨリ曲折シテ西ノ方鐵砲方預多門ヲ合シ長延五十六間三尺餘、窓三十二、石狹間四十、

鐵砲方預多門本丸

長サ間數合シテ前ニ出ツ

石垣高サ

右鐵砲方預多門ハニテ八間半向側ニテ五間

堀巾 右同所ニテ十六間

鐵砲方預矢倉本丸 鐵砲方預多門西續キノ隅ニ在リ東西六間南北七間ニテ三重ナリ屋棟南北ニ通ル高サ七間二尺、窓二十一、隠狭間十、石狹間九、石落六、

物見 鐵砲方預矢倉ノ北ニ在リ長二間五尺餘、窓二、石狹間二、

鐵砲方預多門本丸 物見ノ北ニ在リ西折シテ弓方預矢倉マテ建續ク長延十九間五尺餘、窓八、石狹間十一、

堀巾 右鐵砲方預多門前ニテ三十間

以上本丸南手ノ西部トス

第十七章 西面自南西隅至姫門口

弓方預矢倉本丸 鐵砲方預多門西續キノ隅ニ在リ東西七間南北六間ニテ三重ナリ屋棟東西ニ通ル高サ七間二尺、窓十九、隠狭間八、石狹間九、石落五、

弓方并ニ具足方預多門本丸 弓方預矢倉ノ北續キノ在リ片菱矢倉マテ建續ク具足方預矢倉東續キノ多門共合シ長延四十四間六尺餘、窓二十二、石狹間三十、

堀巾 右弓方并具足方預多門前ニテ十六間

具足方預片菱矢倉本丸 具足方預多門北續キノ隅ニ在リ東西外側ニテ七間南北外側ニテ七間アリ三重ナリ屋棟南北ニ通ル高サ七間二尺、窓二十二、隠狭間十、石狹間十、石落五、

具足方預多門本丸 片菱矢倉ノ東續キノ在リ長間數合シテ前ニ出ツ

堀 具足方預多門ノ東ニ在リ長三間四尺餘、窓四、石狹間一、

弓方預多門本丸 堀ノ東ニ在リ弓方預矢倉マテ建續ク長十八間四尺、窓十、石狹間十二、

弓方預矢倉本丸 弓方預多門北續キノ隅ニ在リ東西五間南北六間ニテ三重ナリ屋棟南北ニ通ル高サ七間餘、窓十一、隠狭間四、石狹間四、石落二、

堀巾 右弓方預矢倉前ニテ二十三間

弓方預多門本丸 弓方預矢倉ノ北續キノ在リ具足方預矢倉マテ建續ク長延三十四間餘、窓十七、石狹間二十二、

石垣高サ 右弓方預多門ニテ十二間半向側ニテ七間一尺

堀巾 右同所ニテ三十四間

具足方預矢倉本丸 弓方預多門北續キノ隅ニ在リ東西七間南北六間ニテ三重ナリ屋棟東西ニ通ル高サ七間二尺、窓十三、隠狭間五、石狹間四、石落三、

具足方預多門本丸 具足方預矢倉ノ北續キノ在リ姫門マテ建續ク間數其他後ニ出タス

以上本丸ノ西手トス

第十八章 北面自姫門口至北東隅

堀巾 本丸ノ一ノ堀手タリ兩大番頭持ナリ

大坂城誌第六卷 大坂城建築彙考 徳川氏 諸曲輪諸建物圖解

姫門 北向 本丸 本丸北手ノ西詰ニ在リ實ハ山里出升形一之門ナリ 山里出升形ノ事ハ後段 西ハ具足方預

多門ニ東ハ大番頭并ニ鐵砲方預多門ニ建連ラナル

大番頭并ニ鐵砲方預多門 本丸 姫門ノ東續キナリ前章具足方預多門カ并ニ姫門々臺多門共

合シ長延四十四間三尺餘、窓三十二、石狹間二十九、

がんぎ 姫門内東入り口同門外北降リ口等ニ在リ

番所 姫門内西手ニ大番與力番所向北手ニ大番同心番所向アリ

鐵砲方預多門 本丸 鐵砲方預多門東續キノ隅ニ在リ東西七間南北六間ニテ三重ナリ屋棟東西ニ

通ル高サ七間二尺、窓十八、隱狹間八、石落二、

堀 鐵砲方預多門ノ東ニ在リ長四間五尺餘、窓二、石狹間三、

破損方并ニ金方預多門 本丸 堀ノ東ニ在リ長二十五間二尺餘、窓十七、石狹間十七、

堀 金方預多門ノ東ニ在リ長二間四尺餘、窓二、石狹間二、

藏方預多門 本丸 堀ノ東ニ在リ藏方預多門マテ建續ク長十五間一尺餘、窓十、石狹間十、

以上本丸ノ北手トス

第十九章 東面 自北東隅 至東南隅

藏方預多門 本丸 藏方預多門ノ東續キニ在リ本丸東北ノ隅ニ當レリ東西七間南北八間ニテ三

重ナリ屋棟南北ニ通ル高サ七間五尺、窓二十六、石狹間十一、石落三

石垣高サ 右藏方預多門ニテ十三間半

堀巾 右同所ニテ二十四間

鐵砲方預多門 本丸 櫛矢倉ノ南續キニ在リ長延四十三間五尺餘、窓三十一、石狹間三十、

堀巾 右藏方預多門ノ南端ニテ二十一間

堀 鐵砲方預多門ノ南ニ在リ長四間四尺餘、窓三、石狹間三、

鐵砲方預月見矢倉 本丸 堀ノ南ノ隅ニ在リ東西六間南北七間ニテ三重ナリ屋棟南北ニ通ル高

サ七間二尺、窓十八、隱狹間九、石狹間七、石落二、

鐵砲方預多門 本丸 月見矢倉ノ南續キニ在リ具足方預多門マテ建續ク長三十一間二尺餘、窓二

十一、石狹間二十一、

具足方預多門 本丸 鐵砲方預多門南續キノ隅ニ在リ東西六間南北七間ニテ三重ナリ屋棟南北ニ

通ル高サ七間二尺、窓十五、隱狹間十、石狹間七、石落二、

具足方預多門 本丸 具足方預多門ノ南續キニ在リ大番頭預多門マテ建續ク長三十一間餘、窓

十六、石狹間二十一、

堀巾 右具足方預多門北端ニテ二十四間

石垣高サ 右多門ノ向側ノ木阪南手ニテ八間

大番頭預多門 本丸 具足方預多門南續キノ隅ニ在リ東西八間南北七間ニテ三重ナリ屋棟東西

ニ

大坂城誌第六卷 大坂城建築彙考 徳川氏 諸曲輪諸建物圖解 三四三

ニ通ル高サ七間五尺、窓十七、隠狹間五、石狹間九、石落二、

堀巾 右大番頭預矢倉前ニテ二十一間

物見 大番頭預矢倉ノ南ニ在リ長二間四尺餘、窓一、石狹間二、

以上本丸ノ東手トス

第二十章 南面 自東南隅 至櫻之門口

大番頭預多門本丸 物見ノ南ヨリ西ニ折廻リ大番頭預矢倉マテ建續ク長延二十四間一尺餘、窓十

五、石狹間十九、

堀巾 右大番頭預多門ノ東手ナル空堀仕切石垣中央ヨリ南へ二十五間

右多門前南面中央ニテ十八間

大番頭預矢倉本丸 大番頭預多門西續キノ隅ニ在リ東西六間南北七間ニテ三重ナリ屋棟南北ニ通

ル高サ七間二尺、窓十九、隠狹間八、石狹間六、石落三、

石垣高サ 右大番頭預矢倉ニテ十間向側ニテ五間

大番頭預多門本丸 大番頭預矢倉ノ西續キノ在リ櫻之門渡矢倉マテ建續ク長十四門一尺、窓七、

石狹間十、

堀巾 右大番頭預多門西手ノ橋臺脇ニテ十五間半

以上本丸南手ノ東部トス

内 部

第二十一章 西半面 自櫻之門内 至天主下埋門

敷石 櫻之門内ヨリ玄關マテ切石ニテ敷詰ナリ

堀重門 又車寄門ト云フ東向 玄關西手ノ筋堀ノ中央ニ在リ

能舞臺并ニ樂屋 大廣間ノ南庭ニ在リ鉄砲方預多門本丸ノ北手ニ當ル

石火矢藏 二棟 一棟ハ鉄砲方預矢倉本丸ノ東ニ一棟ハ弓方預矢倉本丸ノ北ニ在リ二棟共ニ鉄砲方

預ナリ

井 具足方預片菱矢倉本丸ノ東ニ當リ白書院西北ノ庭上ニ在リ井筒ハ御影石ニテ鑿リ貫キナリ地上ヨ

リ水面マテ十三間五尺五寸此邊ハ數寄屋園ニテ有名ナル地藏形石燈籠及ヒ自然石手水鉢等アリ

御成門 北向 小天主臺ノ西ニ在リ

天主下仕切小升形埋門 東向 御成門ノ北手ニ在リ天主臺ノ西北ノ隅ヨリ具足方預矢倉本丸ニ達

ス此小升形ハ北ヲ外トシ是ヨリ以南ノ固メタリ門内兩脇ニハ堀裏ニ登ルガンギアリ兩脇堀長延十

八間一尺餘、石狹間七、

以上本丸曲輪内殿館ノ西部トス

第二十二章 東半面 自大番與力番所 至奧大番所

大坂城誌第六卷 大坂城建築參考 德川氏 諸曲輪諸建物圖解

大番與力番所 北向

前段第十六章櫻之門内ノ條ニ記セルモノヲ再録ス

櫻之門内ノ南手ニ在リ

表大番所 西向

櫻之門内ノ東手正面ニ在リ

門 西向

表大番所ノ北續キニ在リ

大番頭泊番所 門ノ北續キニ在リ

南向 大番頭泊番所ノ東續キニ在リ

門 南向

大番同心番所 北向

大番同心番所 北向

門ノ南手ニ在リ

大番頭預多門 本丸

門ノ東際ヨリ起リ

門 東向

多門ノ中央ニ在リ

銀水ノ井

多門中央ノ門内北手ニ在リ臺所ノ東北ニ當レリ地上ヨリ水面マテ十四間五寸

廐曲輪

多門ノ東南ニ在ル曲輪ナリ亦大番頭預ナリ

井

廐曲輪ノ内ニ在リ地上ヨリ水面マテ十四間一尺

金藏 一棟

三間梁八間

帳藏 一棟

三間梁四間

金藏 一棟

三間梁九間

右三棟ハ銅殿ノ東ノ園中ニ在リ南ヨリ北ニ建並フ城代預ナリ

金方泊番所

右同所北手ニ在リ兩大番頭金奉行地役人ニ及ヒ大番衆ヨリ假役人ニ相詰ル夜ハ金奉

行ハ泊番ヲ爲シ同心ハ晝夜共相詰ル

腰掛 二間梁四間半

金藏園ノ門外北手ニ在リ

大番同心番所 西向

金藏園ノ東手鐵砲方預多門ノ前ニ在リ

金水ノ井

金藏園ノ北手ニ在リ地上ヨリ水面マテ十三間五尺五寸

奥大番所 南向

天主ノ東北破損方并ニ金方預多門ノ南手ニ在リ大番衆出番ス

以上本丸曲輪内殿館ノ東部トス

山里丸

首記 山里丸ノ大體

山里丸ハ寛永元年本丸ト同時ノ修築ニ係リ本丸ノ搦手タリ西南ニ本丸姫門
 出升形ヲ帶ヒ北ニ山里大門ヲ開キ一之丸ト通シ總多門構ニテ東西ノ兩隅ニ
 二重ノ矢倉二棟アリ山里大門升形ハ渡矢倉多門構ナリ
 其本丸姫門々臺ヨリ東隅ニ至ル本丸北手ノ全部及ヒ姫門前ナル山里出升形
 并ニ山里丸ノ全部及ヒ山里大門升形兵松平筑前守利常一手ニ擔當シテ修築
 セル者ナリ

山里丸ハ本丸ニ比スレハ土地頗ル低ク且南面ニハ本丸北手ノ矢倉臺多門臺ト成レル石垣高ク壁立シタルハ曲輪内極メテ幽邃ナリ寛永元年ノ城普請圖ニ據レハ山里大門升形南手ノ井ハ地上ヨリ水面マテ六間四尺五寸ナリ之本丸廡曲輪ノ井ノ地上ヨリ水面マテ十四間一尺ナルニ比スレハ其差七間二尺五寸ナリ故ニ本丸姫門ノ内外ト山里出升形冠木門門外トニ工ミニがんぎヲ分設シ高低ノ差此ノ如クナル兩地ヲ容易ニ接続ス今之ヲ詳述セシニ乃チ本丸姫門内東入り口ニ第一がんぎアリ姫門外北降り口ニ第二がんぎアリ此石階ヲ降り出升形ニ入ルナリ出升形冠木門門外ニ又東北兩面ニ向ヒテ開キタルがんぎアリ是ヲ第三がんぎトス此がんぎヲ降りテ始メテ山里丸ノ平地ニ達ス以上ノ三がんぎハ距離僅少ノ間ニ能ク屈曲シテ設ケタルモノナリトス此三がんぎノ外山里大門内東手ニ又がんぎアリ南東ノ兩面ヨリ西ノ方大門ニ向ヒテ漸々ニ窄マリタルがんぎナリ此がんぎヲ降りテ升形ノ中ニ入ルナリ故ニ此升形ノ中ハ更ニ低シ升形ノ北口ニ冠木門アリ冠木門外ニ木橋ヲ架ス極樂橋是ナリ

極樂橋ヲ渡リ一之丸ニ入り夫ヨリ青屋口ノ算盤橋ヲ渡レハ三之丸仕切ナリ三之丸ノ鳴野口外ニモ木橋ヲ架ス鳴野橋ト云フ此橋ヲ渡レハ乃チ曲輪外ニシテ鳴野村ナリ又後段三之丸ノ首記ニ述ルカ如ク猫間平野大和ノ諸川三之丸ヲ遠リ淀川ニ合シテ海ニ入ル是レ此城ノ本丸ノ搦手ヨリ容易ニ曲輪外ニ出ツルヲ得又容易ニ淀川及ヒ大坂海上ニ達スルヲ得ル所以ナリ

第二十三章 姫門口至山里口
姫門口 東向 本丸ノ一ノ搦手タリ

山里出升形 東西十七間南北九間餘南ニ本丸姫門アリ出升形東北西ノ三面ハ高塙構ニテ東ニ冠木門西ニ埋門アリ升形内廻リニハ塙裏ニ登ルがんぎアリ塙長延四十一門五尺餘石狹間二十七、出

堀四、
姫門 北向 本丸 升形ノ南側ニ當ル實ハ山里出升形一之門ナリ前段本丸ノ部第二十八章ニ略叙セリ
冠木門 東向 山里口門 升形ノ東側ニ在リ實ハ出升形二之門ナリ
がんぎ 姫門内東入り口同門外北降り口前段本丸ノ部ニ記セル者ヲ再録ス及ヒ冠木門門外ニ在リ
埋門 西向 升形ノ西側ニ在リ帶曲輪入口ノ門ナリ
帶曲輪

本丸ノ首記ニ略叙セル如ク此曲輪ハ本丸ノ西北ニ當リ南西北三面ハ總高堀
構ニテ山里出升形ノ西門ヨリ入ル所ナリ平常ノ切リトス堀長延五十二間三
尺餘、矢狹間十一、石狹間二十六、出堀十二、
初メ此曲輪ニハ焔硝藏アリシト云フ

攝營秘録

山里出升形埋門鍵箱の蓋に山里帶曲輪御焔硝藏に參る埋御門鍵と有り

金城聞見録

秘シ曲輪門有り嚴敷鑰して入る事を禁す

案スルニ鐵砲ハ戰時必須ノ武器ナルニ因リ天主ノ穴藏ニハ焔硝ヲ貯ヘ急需ニ供スルコトナリ
タリ然レトモ焔硝ヲ天主ノ穴藏ニ貯フルコトハ頗ル危險ノ虞アルカ故ニ此曲輪ニ焔硝ヲ貯ヘタ
ルモノナラン或ハ此曲輪ハ初メヨリ焔硝ヲ貯フヘキ爲ニ設ケタルモノナルモ亦知ルヘカラス又
二之丸玉造口内ノ帶曲輪モ亦焔硝ヲ貯ヘタル所ナラト云フ第二十九 章參看又郭外鴨野村長興寺村等ニモ
焔硝藏ノ設ケアリ第三十三 章參看

堀巾 右帶曲輪前ニテ二十三間

石垣高サ 右同所向側ニテ三間一尺

堀 出升形外北手ニ在リ長四間五尺餘、窓二、石狹間三、

鐵砲方預多門山里丸 堀ノ北ニ在リ鐵砲方預矢倉マテ建續ク長十間四尺餘、窓六、石狹間七、

堀巾 右鐵砲方預多門前ニテ四十一間

石垣高サ 右同所向側ニテ二間半

鐵砲方預片菱矢倉山里丸 鐵砲方預多門ノ北續キニ在リ山里丸西北ノ隅ニ當レリ東西外側ニテ

六間南北外側ニテ七間アリテ二重ナリ棟南北ニ通ル此矢倉ヲ西菱矢倉ト稱ス東ノ菱矢倉ニ對シテ

此稱アルナリ高サ六間、窓二十一、隱狹間四、石狹間九、石落五、

堀巾 右片菱矢倉北手ニテ三十一間

鐵砲方預多門山里丸 片菱矢倉東取付キヨリ山里大門升形ノ多門臺マテ建續ク長間數ハ次キノ

山里升形多門ノ下ニ合セ書ス

第二十四章 山里口至東南端本丸取付

山里口 北東向 山里丸ノ大門ナリ實ハ本丸ノ二ノ搦手タリ山里加番持ナリ

升形 東西十一間餘南北十間餘

大門 西北向 山里丸 升形ノ東側ニ在リ渡矢倉構ニテ總筋鐵張ナリ門臺長十五間一尺餘、窓十

四、石狹間四、石落三、

鐵砲方預多門山里丸 大門渡矢倉ヨリ升形ノ上南西兩面ニ折廻リ建連ラナル前項ニ掲ケタル西

ノ方ノ鐵砲方預多門號ヲモ合シ長延五十八間二尺餘、窓三十四、石狹間三十九、

がんぎ 升形東手大門内ニ在リ東南兩面ヨリ西ノ方大門ニ向ヒテ降ルがんぎナリ

冠木門 北東向 升形ノ北側ニ在リ總筋鐵張ナリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ兩脇塀長延七

間一尺餘、石狹間四、

旗臺 冠木門内兩脇石垣ノ臺ナリ

極樂橋 冠木門外ヨリ二之丸架ス木橋ナリ長二十六間半幅四間極樂橋外左左二之丸ニ仕切小升形ア

リ山里口ノ固メタリ此兩仕切ノ事ハ二之丸第二十七章ノ下ニ述ブ

番所 大門内東手ニ見附大番所西北向升形ノ中南手ニ札改番所北東向アリ山里加番家臣足輕出番ス

山里加番預多門山里丸 大門渡矢倉東續キニ在リ折廻リ菱矢倉マテ建續ク長延三十三間二尺

餘、窓二十、石狹間二十三、

堀巾 右山里加番預多門東手ニテ二十三間

山里加番預菱矢倉山里丸 多門ノ東續キニ在リ山里丸東北ノ隅ニ當レリ北面外側ニテ六間東面

外側ニテ七間アリテ二重ナリ棟南北ニ通ル高サ六間、窓十六、石狹間九、石落五、西菱矢倉ニ對シ東

菱矢倉ノ稱アリ此矢倉ハ菱形ニ取リシ曲輪ノ隅ニ當レルヲ以テ菱形造リノ建築ナリ内外諸材其他

附屬ノ諸品共悉皆菱形ヨリ成リ亦奇觀ヲ極ムト云フ

堀巾 右菱矢倉前北東向ニテ二十六間

石垣高サ 右同所向側ニテ半間

山里加番預多門山里丸 菱矢倉ノ南續キニ在リ長十六間二尺餘、窓十、石狹間十一、

堀 山里加番預多門ノ南ニ在リ本丸石垣ノ東北隅ニ接ス長一間五尺餘、窓二、石狹間一、

井 山里大門升形ノ南西ニ在リ地上ヨリ水面マテ六間四尺五寸

山里加番小屋一加番小屋ト云フ 升形ノ東南ニ在リ地坪二千五百四十坪アリ門西向

井 大門内東手ニ在リ地上ヨリ底マテ七間五尺但から井

二之丸

首記 二之丸ノ大體

二之丸ハ西北東三面ハ元和六年ノ修築第十二ニ係リ南面ハ寛永五年ノ築造

ニ成リ第十四本丸山里丸ヲ圍ヒ遠レル曲輪ニテ周廻千四百三十四間四尺ト

稱ス外ハ西南ニ大手、西北ニ京橋、東北ニ青屋、南東ニ玉造ノ四虎口アリ内

ハ南手ニハ南ト東トノ兩仕切アリテ本丸櫻之門ノ固メト爲リ北手ニハ西ト

東トノ兩仕切アリテ山里丸大門ノ固メト爲リ又西手ニハ北仕切アリ東手ニ

ハ厂木坂門アリテ各其方面ノ固メト爲リ櫻之門ヨリ本丸ト通シ山里大門ヨ

リ山里丸ト通シ東南西ノ三面ハ高堀構、北ノ一面ハ多門構ニテ隅矢倉十三

棟アリ此内三重ノ矢倉一棟、二重ノ矢倉十二棟ナリ外ニ一重ノ矢倉一棟ア

リ太鼓矢倉トス又大手京橋玉造ノ三升形ハ渡矢倉多門構ニテ青屋口及ヒ厂木坂ハ多門續キノ構ナリ又玉造口定番屋敷北東ノ兩面ハ多門構ナリ
 土地ハ南方高クシテ北方漸々ニ低シ乃チ櫻之門ノ前通りハ土地ノ全體渾テ高シ西ヨリ北ニ遠レハ城代屋敷ノ邊ヨリ稍低キニ就キ更ニ北シテ元西之丸土藏前ニ至レハ益低クナリテ此處ニがんぎアリ尾止坂ト云フ此がんぎヲ降リ目付小屋前ノ仕切ヲ出テ茲ニテ又がんぎヲ降り京橋口定番屋敷ノ前通りヲ經テ東シ、テ極樂橋外ノ西仕切ヲ入り東仕切ヲ出テ東南ノ曲リ目ノ邊ニ至レハ最モ低シ夫ヨリ青屋口加番小屋、同中小屋、厂木坂加番小屋等ノ前通りヲ南スレハ土地又漸々ニ高シ厂木坂ヲ登リ厂木門ヲ入レハ愈高ク東仕切ヲ入レハ再ヒ南方ノ高處ニ達ス是ヨリ西ハ乃チ櫻之門前通りナリ
 石垣ノ高サハ南面四番矢倉ノ邊ニテ十二間半内側本丸ニ面スル所ノ空堀際ニテ高サ五間西面坤矢倉ホノ角ニテ十一間内側尾止坂下ノ堀際ニテ高サ三間北面伏見矢倉ホノ角ニテ六間内側北仕切外ノ堀際ニテ高サ二間東面、中小屋加番小屋、中央ノ出角ニテ六間本丸堀際菱矢倉ニ面スル曲リ角ニテ高サ半間巽矢倉ホノ角ニテ十一間半本丸堀際厂木門内ニテ高サ八間

周圍ノ堀ハ總テ水入りナリ其周圍千六百五十間四尺ト稱ス

堀巾ハ大手橋臺土ニテ四十一間、其北、堀中ニテ四十六間、西手ノ中央城代屋敷裏ニテ七十六間、京橋々臺土ニテ三十六間、北手ノ中央金奉行元屋敷裏ニテ三十四間、青屋口算盤橋ニテ二十六間、其東、堀中ニテ六十二間、東手中央厂木坂加番小屋裏ニテ四十九間、玉造橋臺土ニテ三十五間、其西、堀中ニテ四十六間、南手ノ中央西東大番衆小屋裏境界ノ所ニテ三十九間ナリ
 右石垣及ヒ堀ハ三之丸北ノ外曲輪ト同時ニ關西三十一國ノ大名四十八家ノ分擔修築セル者ナリ

第二十五章 大手至城代屋敷

大手 西向 此城ノ大手ニテ城代持ナリ

升形 東西十五間餘南北二十一間餘

大門 南向 二之丸 升形ノ北側ニ在リ渡矢倉構ニテ總筋鐵張ナリ

多門 二之丸 升形ノ上東側ニ在リ大門渡矢倉ヨリ建續キナリ大門々臺ヲ合シ長延四十七間四尺餘

室井ニ狹間等ノ數未タ詳ナラス

右大門并ニ多門ハ天明三年十月十一日夜雷火ニテ焼失シ後六十五年嘉永元年ニ至リ再造セラレヌ
今現在スル所ノ大門及ヒ多門ハ即チ是レナリ第四十章及ヒ第四十一章參看

因ニ記ス余、元大坂同心安達重固ニ聞ク所左ノ如シ

大坂城御普請ノ時私ノ父安達某ハ此御普請方ヲ勤務セリ追手御門ノ石垣ノ土中ニ沈ミ居タル部分
ヲ起コシ直シタル時其石ニ加藤肥後守ト彫付ケテアリタリ當時父ハ之ヲ石摺トシタリキ今ハ之ヲ
藏セスト第四十一章參看

多門二之丸 升形ノ上南側ニ在リ一棟別建ナリ長十三間五尺餘、窓十一、石狹間十一、

冠木門西向 升形ノ西側ニ在リ總筋鐵張ナリ門内兩脇ニハ堀裏ニ登ルがんぎアリ兩脇堀長延二十

一間一尺餘、鐵砲狹間七、石狹間十四、

旗臺 冠木門内兩脇石垣ノ臺ナリ

橋臺土橋ト稱ス 冠木門外ノ渡リナリ幅十三間長四十一間餘ニシテ門ノ方ハ爪先上リニ漸々ニ高シ橋

臺ノ兩側ニハ大石ヲ切り合セ總高サ七尺餘ニ三段ニ疊上ケタルがんぎアリ

下馬之井 橋臺ノ外南手ニ在リ此城ニハ下馬札ヲ建設セス此井ヲ以テ下馬ノ標トス故ニ此名アリ

傳ヘ云フ石山本願寺別院ノ時ノ臺所ノ井ナリト故ニ蓮如之井トモ稱ストナリ常ニ蓋ヲ覆ヒテ汲ム
事ヲ禁ス

金城間見録

此井は方八尺高サ四尺餘の巨石を繋り貫きて井筒となし水底より石にて張上げたる也

番所 大門内北手ニ見附大番所、南同西手ニ札改足輕番所、東門臺ニ足輕番所、西升形ノ中南手ニ札

改升形番所、北冠木門外橋臺北側ニ札改張番所、南橋臺外正面西側ニ辻番所、東アリ城代ノ家臣足輕

等出番ス

腰掛井ニ馬繫 橋臺外辻番所ノ北手ニ在リ

堀 大手門臺際ヨリ千貫矢倉際マテ長十間六尺餘、鐵砲狹間五、石狹間七、武者走巾二間、

城代預千貫矢倉二之丸 大手門内北手西側ノ隅ニ在リ東西七間南北八間ニテ二重ナリ屋棟南北

ニ通ル高六間半、窓二十五、隱狹間十九、石落五、

金城間見録

此橋ハ當城繩張の最初築きたるものなりと鐵の板金を以て内を張たり第五章附記參看

石垣高サ 右千貫矢倉ニテ十一間向側ニテ七間

堀巾 右矢倉南手ニテ四十六間北手ニテ三十九間

井 城代屋敷ノ南手ニ在リ

城代屋敷 千貫矢倉ノ北手ニ在リ地坪二千六百十坪アリ門東向玄關ハ東向ニテ唐破風造リナリ

堀 千貫矢倉際ヨリ坤矢倉マテ折廻リ長延百五間四尺餘、矢狹間十五、鐵砲狹間四十一、出堀十七、武

者走巾二間、

堀巾 右城代屋敷西北隅元西之丸取付ノ所ニテ七十六間

第二十六章 元西之丸至北仕切門

元西之丸 土藏曲輪 城代屋敷ノ北續ニ在ル曲輪ナリ地坪七千二百二十六坪アリ東面ハ竹矢來ヲ以テ

圍ト門ニケ所アリ東向ナリ

鹽噌方預坤未申矢倉ニ之丸 元西之丸西南ノ隅ニ在リ東西八間南北七間ニテ二重ナリ屋棟東西ニ

通ル高六間半、窓二十五、隠狭間二十一、石落六、

石垣高サ 右坤矢倉ニテ十一間

堀巾 右坤矢倉北手石垣曲リ目ニテ四十六間

堀 右坤矢倉際ヨリ乾矢倉際マテ長延五十五間餘、矢狹間十一、鐵砲狹間二十六、出シ堀九、武者走ニ

間半、

城代并ニ定番預乾戌亥矢倉ニ之丸 元西之丸西北ノ隅ニ在リ東西外側ニテ八間南北外側ニテ八

間アリテ二重ナリ此矢倉ハ西ニ向ヒク字形ヲ爲シ屋棟亦ク字形ニ南北ニ通ル高サ六間、窓二十六、

隠狭間十六、石落四、

此矢倉ハ三方正面ノ矢倉又ハ筋鐵矢倉ト稱ス

堀巾 右乾矢倉南面ノ方ニテ四十間北面ノ方ニテ四十二間

石垣高サ 右乾矢倉向側西北ノ隅ニテ二間五尺

堀 乾矢倉際ヨリ京橋渡矢倉際マテ折廻リ長延百十三間餘、矢狹間十九、鐵砲狹間五十一、出堀二十

三、武者走巾二間、

又此曲輪内ニ在ル所ノ倉庫其外諸建物ハ左ノ如シ

石火矢藏 二間半梁 一棟 鐵砲方預

追手破損小屋 一棟

物置 一棟

鹽噌藏 三間梁 一棟 三間梁 一棟 鹽噌方預

米藏 四間梁 六棟 五間梁 一棟 五間梁 一棟 四間梁 一棟 四間梁 一棟 三間梁 一棟 三間梁 一棟

繡藏 四間梁 四棟 藏 方預

三間梁 一棟 鐵砲方預

四間梁 一棟 具足方預

四間梁 一棟 鐵砲方預

十二間 一棟 鹽噌方預

八間 一棟 藏 方預

三間梁 一棟

六間 一棟

燔硝石藏九尺梁一間一棟 鐵砲方預

八角形薪藏三間十二棟 鹽噌方預

米改所 一棟

堀巾 右元西之丸北手中央ニテ二十八間

井 元西之丸外東手ニ在リ

本役目付小屋 元西之丸外東北ニ在リ目付不在ノ時ハ西大番頭預ナリ地坪六百坪アリ門南向
がんぎ 尾止坂ト稱ス土藏曲輪前ノ通路ニ在リ南ヨリ北ニ向ヒテ降ルがんぎナリ

石垣 尾止坂西側ニ起リ元西之丸曲輪前通リヲ一帶ニ北ノ方ニ築連テタリ

石火矢藏二間半梁 尾留坂ノ東手本丸ノ堀際ニ在リ鐵砲方預ナリ

北仕切小升形門 東向 目付小屋ノ東ニ在リ南仕切ト共ニ城代持ナリ此小升形ハ北ヲ外トシ是ヨ
リ以南ノ固メタリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ長延七十四間餘、石狹間四十三、

此小升形門外ニがんぎアリ東北ニ向ヒテ降ル

番所 門内西手ニ見附番所、東門外東手ニ通耳番所アリ

第二十七章 京橋口至極樂橋外東仕切門

京橋口西北向 京橋口定番持ナリ

升形 東西十三間餘南北十五間餘

升形ノ中ニ大石ニツアリ一箇ハ豎三間餘横八間餘、一箇ハ豎三間横四間アリ外曲輪第一ノ巨石ナ
リ此外二三間ノ石ハ所々ニ在リ本丸櫻門ニモ亦巨石アリ

大門 北東向 二之丸 升形ノ南側ニ在リ渡矢倉構ニテ總筋鐵張ナリ

鐵砲方并ニ京橋定番預多門二之丸 升形ノ上東北兩面ニ建連ラナル大門渡矢倉ヨリ建續キ
ナリ東面ハ鐵砲方、北面ハ京橋定番預ナリ

大門々臺并ニ多門長延五十二間五尺餘、窓三十二、石狹間二十九、石落四、

冠木門 西北向 升形ノ西側ニ在リ總筋鐵張ナリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ兩脇塀長延十

二間三尺、石狹間八、

旗臺 冠木門内兩脇石垣ノ臺ナリ

橋臺 土橋ト稱ス 冠木門外ノ渡リナリ長三十六間幅十一間五尺橋臺ノ北側ニハ大石ヲ切合セテ二段ニ
疊上ケタルがんぎアリ

番所 大門内南手ニ見附大番所、北東同西手ニ札改番所、升形ノ中北手ニ札改升形番所、南西冠木門外

橋臺北側ニ札改張番所、南西同西手ニ札改番所、升形ノ中北手ニ札改升形番所、南西冠木門外

京橋破損小屋 大門内見附大番所ノ東手ニ在リ

井 京橋破損小屋ノ北手ニ在リ

京橋定番屋敷 京橋口升形ノ東北ニ在リ地坪二千四百坪アリ門南向

井 京橋定番屋敷内ニ在リ

堀巾 右京橋定番屋敷西手中央ニテ五十六間

石垣高サ 右同所向側ニテ三間五尺

堀 京橋升形多門際ヨリ伏見矢倉際マテ折廻リ長延九十六間三尺餘、矢狹間二十二、鐵砲狹間三十

八、出塀十七、武者走巾二間、

金奉行元屋敷 京橋定番屋敷ノ東續キニ在リ地坪千八百六十坪アリ門南向

焔硝石藏外三間半十一間餘 石臺長十四間巾五間半

火藥藏三間半 金奉行元屋敷内ニ在リ鐵砲方預ナリ

京橋定番預伏見矢倉^{二之九} 號 金奉行元屋敷内西北ノ隅ニ在リ此城ノ北端ニ當レリ東西九間南

北八間ニテ三重ナリ屋棟東西ニ通ル高サ七間五尺、窓四十九、隱狹間九、石落五、

此矢倉ハ伏見桃山ノ矢倉ヲ解キ此處ニ徒シ建テタル者ナルニ因リ伏見矢倉ノ名アリト云フ^{二之九}

中ニ三重ノ矢倉アルハ獨リ此一棟ノミナリ

石垣高サ 右伏見矢倉ニテ六間北面向側ニテ半間

堀巾 右伏見矢倉南手ニテ四十五間北手ニテ三十二間

破損方、京橋定番、鐵砲方、預多門^{二之九} 號 伏見矢倉ノ東續キニ在リ折廻リ長延六十七間半

餘、窓三十、隱狹間四十二、此内伏見矢倉ノ際三間ハ破損方其他ハ京橋定番、鐵砲方預ナリ

堀巾 右多門ノ東手ニテ三十四間

堀 多門ノ東ニ在リ長三間一尺餘

極樂橋外西仕切小升形門 南西向 金奉行元屋敷東脇ニ在リ山里加番持ナリ此小升形ハ西ヲ外

トシ東仕切ト相待テ山里九大門ノ固メタリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ兩脇塀長延三十六

間四尺餘

番所 門内北手ニ札改番所、南門外東手ニ通耳番所アリ

鐵砲方、目付、町奉行、城代、定番預多門^{二之九} 號 西仕切北手ヨリ東仕切北手マテ建續ク長

延七十間五尺餘、窓四十五、隱狹間四十六、

石垣高サ 右多門西手ニテ六間

堀巾 右多門東手ニテ二十七間

山里加番家中小屋 西仕切門内北手ニ在リ地坪二百坪アリ門南向

副便目付小屋 山里加番家中小屋ノ東ニ在リ目付不在ノ時ハ山里加番預ナリ地坪二百坪アリ門

南向

山里加番家中小屋 副便目付小屋ノ東ニ在リ地坪百九十坪アリ門南向

極樂橋外東仕切小升形門 南西向 山里加番家中小屋ノ東ニ在リ山里加番持ナリ此小升形ハ東

ヲ外トシ西仕切ト相待テ山里丸大門ノ固メタリ門内兩脇ニハ塀築ニ登ルガんギアリ兩脇塀長延二
十四間四尺餘

堀 東仕切外北手多門際ニ在リ長三間餘

番所 門内北手ニ見附番所、南門外西手ニ通耳番所アリ

第二十八章 青屋口至玉造帶曲輪取付及ビ厂木坂

青屋口 北東向 中小屋加番持ナリ

出升形 東西二十四間餘南北十六間餘出升形西北東ノ三面ハ高塀ナリ塀長延七十一間一尺餘、矢狹

間十一、鐵砲狹間二十一、出塀十三、武者走巾一間、

大門 北東向 二之丸

鐵砲方預多門 大門ヨリ建續キナリ

小門 北東向 出升形北側西手ニ在リ

算盤橋引橋ト稱ス 出升形小門前ヨリ三之丸ニ架ス木橋ナリ長三十六間巾三間此橋ハ中央ヨリ稍南ニ

寄リタル處敷尺ノ間橋板ニ車ヲ設ケ平常ハ内ニ引入レ置非常ノ時押出シテ通行スル仕掛ケナリ

算盤橋外北語三之丸ハ仕切曲輪ニ柵門アリ平常ハ切トス三之丸玉造藏曲輪ニ西東兩仕切小升形アリ此青屋

口ノ固メタリ此兩仕切小升形ノ事ハ三之丸第三十二章ノ下ニ述フ

番所 門内西手ニ見附番所東向アリ

堀巾 右出升形西手ニテ五十四間東手ニテ六十二間

石垣高サ 右出升形東手向側東北ノ隅ニテ四尺

加番破損小屋 東仕切外北手ニ在リ

堀 青屋口升形際ヨリ玉造帶曲輪際マテ長延百六十六間二尺餘、矢狹間三十六、鐵砲狹間六十九、出

堀三十五、

石垣高サ 中小屋加番小屋東手中央ニテ六間

堀巾 青屋口加番小屋東手中央ニテ四十二間厂木坂加番小屋東手ニテ四十九間、

青屋口加番小屋 三加番小屋ト云フ 青屋口南手東側ニ在リ地坪千二百五十一坪アリ門西向、

中小屋加番小屋 二加番小屋ト云フ 青屋口加番小屋ノ南續キ東側ニ在リ地坪二千二百四十九坪アリ門西向

厂木坂加番小屋 四加番小屋ト云フ 中小屋加番小屋ノ南續キ東側ニ在リ厂木坂下ニ當レリ地坪千七百坪

アリ門西向

右三小屋共小屋内ニハ各井アリ

右三小屋ノ在ル處ヲ市正曲輪ト稱ス第八章及ヒ第四

厂木坂 厂木坂加番小屋前通り厂木門外ニ在リ南ヨリ北ニ向ヒテ降ルガんギナリ

第二十九章 玉造口至玉造内東仕切門

大坂城誌第六卷 大坂城建築叢考 徳川氏 諸曲輪諸建物圖解

三六五

大坂城誌第六卷 大坂城建築考 德川氏 諸曲輪諸建物圖解

三六六

玉造口 南向 玉造定番持ナリ

升形 東西十五間餘南北十四間餘

大門 東向 二之丸 升形ノ西側ニ在リ渡矢倉橋ニテ總筋鐵張ナリ

鐵砲方預多門 二之丸 升形ノ上北東兩面ニ建連テナル大門渡矢倉ヨリ建續キナリ

右大門々臺并ニ多門長延四十八間二尺餘、窓二十八、石狹間二十二、石落五、

冠木門 南向 升形ノ南側ニ在リ總筋鐵張ナリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ兩脇塀ニ折廻リ

長延二十間四尺餘、矢狹間四、鐵砲狹間九、石狹間十四、

旗臺 冠木門内兩脇石垣ノ臺ナリ

橋臺 土橋ト 冠木門外ノ渡リナリ長サ三十五間幅十二間橋臺ノ東側ニハ大石ヲ切合セテ三段ニ疊

上ケタルがんぎアリ

堀巾 右橋臺西手ニテ四十六間

番所 大門内北手ニ見附大番所、南升形ノ内東手ニ札改升形番所、西冠木門外橋臺西側ニ札改張番

所向アリ與力同心出番ス

堀 玉造升形東際ヨリ巽矢倉際マテ長十三間六尺餘、矢狹間二、鐵砲狹間五、出堀二、武者走巾二間半

玉造定番預巽辰 己矢倉ニ之丸 玉造升形東手東南ノ隅ニ在リ此城ノ東端ニ當レリ東西七間南北

八間ニテ二重ナリ屋棟南北ニ通ル高サ六間半、窓二十七、隱狹間十六、石落五、

石垣高サ 右巽矢倉ニテ十二間半向側東手ニテ一間四尺南手ニテ八間

堀巾 右巽矢倉東面ニテ四十間東南ノ隅ニテ五十九間南面ニテ四十間

帶曲輪

巽矢倉ノ北手ニ在リ此曲輪ハ二之丸ノ東端ニ當ルヲ以テ乃々東北兩面ニハ

二之丸外構ノ高土居遠リ西ニハ定番屋敷ノ矢倉臺多門臺トナレル高キ石垣

アリ又曲輪ノ内ニハ古松六七本アリ何レモ年久シキ大樹ニテ枝葉頗ル繁茂

シタレハ曲輪内畫モ薄暗クシテ幽陰ナリ

埋門 南ニ在ルモノハ南向

北ニ在ルモノハ北向 帶曲輪ノ南北ニ各一ツアリ何レモ平常ベ切ナリ

堀 帶曲輪南ノ埋門ノ兩脇ニ在リ西ハ折廻リ北ノ方玉造定番預多門ニ接シ東ハ巽矢倉ニ接ス長間

數本詳

玉藏 一棟 帶曲輪内ニ在リ鐵砲方預ナリ

金城間見録

前後に門二ツあり切にして昔より入る事を固く禁す御本丸隠し曲輪焔硝をたくはへしと爰も又

夫等の類ならん 第二十三 章參看

堀 巽矢倉際ニ起リ折廻リ北ノ埋門ニ接ス長延六十三間一尺餘、矢狹間十一、鐵砲狹間二十三、

玉造定番屋敷 玉造口升形ノ北手ニ在リ地坪千五百七十五坪アリ門南向ナリ此屋敷ハ二之丸南

大坂城誌第六卷 大坂城建築考 德川氏 諸曲輪諸建物圖解

三六七

方ノ高地ノ東端ナルヲ以テ東北兩面ノ多門臺及ヒ矢倉臺ノ石垣ハ其築下カリタル敷丈ノ裾ヲ帶曲輪西手ヨリ折廻シノ木坂下加番小屋南手ニ曳キ送レリ

井 玉造定番屋敷内ニ在リ

玉造定番預多門^二之丸^一 玉造定番屋敷東面ニ在リ長九間餘、窓六、隠狭間四、

玉造定番預良^寅矢倉^レ之丸^一 多門ノ北續キニ在リ玉造定番屋敷東北ノ隅ニ當レリ東西六間南

北七間ニテ二重ナリ屋棟南北ニ通ル高六間、窓十六、隠狭間九、石落三、

玉造定番預多門^二之丸^一 長矢倉ノ西ニ在リ此多門ハ曲尺ノ手ニ東面ヨリ北面ニ折曲ガレリ長十

五間餘、窓八、隠狭間二、

塀 多門ノ西ニ在リ長二間

玉造定番預多門^二之丸^一 塀ノ西ニ在リ七十間多門ト稱ス玉造定番屋敷ノ北手ニ當リノ木坂門マ

テ建續ク長七十五間五尺餘此内西方八間四尺餘ノ木坂加番預ナリ

ノ方七十間多門ヨリ建續キニテ是ヨリ以南ノ固メタリ

番所 門臺ノ内西手ニ見附番所、東門内西手ニ足輕番所、東門外西手坂ノ中段ニ通耳番所アリノ木坂

加番青屋口加番ノ家臣足輕交代出番ス

井 玉造定番屋敷外南手ニ在リ

玉造破損小屋 玉造定番屋敷ノ南手向側ニ在リ

塀 玉造升形大門渡矢倉際ヨリ東大番頭小屋内東手ノ一番矢倉マテ折廻リ長延八十一間餘、矢狭間

十九、鐵砲狹間二十二、石狹間五十二、出塀十五、武者走巾三間、

第三十章 玉造内東仕切門至大手内南仕切及ヒ大手

東仕切小升形門築造仕切ト稱メ、西向、東大番頭小屋北手ニ在リ玉造定番持ナリ此小升形ハ北ヲ外トシ大

手内南仕切ト相待テ本丸櫻之門ノ固メタリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルガんぎアリ兩脇塀長延六十間

五尺餘、矢狹間十六、鐵砲狹間十五、石狹間三十五、

番所 門内東手ニ見附番所アリ同心出番ス門外南手ニ通耳番所アリ東大番頭ノ家臣出番ス

東大番頭小屋 東仕切ノ南手ニ在リ地坪二千二百八十坪アリ門北向

井 東大番頭小屋構内ニ在リ

塀 東大番頭小屋ノ東、一番矢倉以北ニ在リ間數前ニ出ツ

東大番頭預一番矢倉^二之丸^一 東大番頭小屋東手中央ノ隅ニ在リ東西六間南北七間ニテ二重ナ

リ屋棟南北ニ通ル高サ六間、窓十五、隠狭間十、石狹間八、石落二、

堀巾 一番矢倉東面北手ニテ四十八間南手ニテ四十五間

塀 一番矢倉際ヨリ二番矢倉際マテ長二十四間六尺、矢狹間五、鐵砲狹間七、石狹間十七、出塀六、武

者走巾三間、

大坂城誌第六卷 大坂城建築考 徳川氏 諸曲輪諸建物圖解

東大番頭預二番矢倉^{二之九} 東大番頭小屋東南ノ隅ニ在リ東西七間南北八間ニテ二重ナリ屋

棟南北ニ通ル高サ六間半、窓二十二、隠狭間九、石狹間十、石落五、

石垣高サ 二番矢倉ニテ十二間半東面向側ニテ七間

堀巾 二番矢倉東面ニテ四十間南面ニテ三十六間東大番頭小屋南手中央ニテ四十二間

堀 二番矢倉際ヨリ三番矢倉際マテ長延四十二間四尺餘、矢狹間十、鐵砲狹間十、石狹間二十八、出堀

堀八、武者走巾三間、

東大番小屋 東大番頭小屋ノ西續キニ在リ地坪二千五百七十坪アリ門北向

東大番衆ハ五十人ヲ以テ一組トス

井 一ハ東大番小屋構内東手ニ一ハ西手ニ在リ

東大番組頭預二番矢倉^{二之九} 東大番小屋東南ノ隅ニ在リ東西七間南北六間ニテ二重ナリ屋

棟東西ニ通ル高サ六間、窓十五、隠狭間十二、石狹間九、石落四、

堀 三番矢倉際ヨリ四番矢倉際マテ長延三十二間一尺餘、矢狹間七、鐵砲狹間八、石狹間二十、出堀

六、

東大番組頭預四番矢倉^{二之九} 東大番小屋南西ノ隅ニ在リ東西八間南北七間ニテ二重ナリ屋

棟東西ニ通ル高サ六間半、窓二十一、隠狭間十二、石狹間八、石落三、

堀 四番矢倉際ヨリ五番矢倉際マテ長延二十三間五尺餘、矢狹間五、鐵砲狹間六、石狹間十六、出堀五、

石垣高サ 四番矢倉ニテ十二間半向側ニテ七間

地破損小屋 東大番小屋北手ニ在リ

大番破損小屋 東西南大番小屋境界北手ニ在リ

堀巾 東西南大番小屋南手境界ノ處ニテ三十九間

西大番小屋 東大番小屋ノ西續キニ在リ地坪二千五百七十坪アリ門北向

西大番衆モ亦五十人ヲ以テ一組トス

西大番組頭預五番矢倉^{二之九} 西大番小屋東南ノ隅ニ在リ東西七間南北六間ニテ二重ナリ屋

棟東西ニ通ル高サ六間、窓十三、隠狭間九、石狹間七、石落二、

堀 五番矢倉際ヨリ六番矢倉際マテ長延五十一間一尺餘、矢狹間十二、鐵砲狹間十一、石狹間三十四、

出堀十一、武者走巾三間、

西大番組頭預六番矢倉^{二之九} 西大番小屋南西ノ隅ニ在リ東西八間南北七間ニテ二重ナリ屋

棟東西ニ通ル高サ六間半、窓二十五、隠狭間二十、石狹間十、石落五、

堀巾 六番矢倉前ニテ四十二間

井 一ハ西大番小屋構内東手ニ一ハ西手ニ在リ

堀 六番矢倉際ヨリ北ノ方南仕切マテ折廻リ長延五十九間五尺餘、石狹間三十七、武者走巾二間半、

南仕切小升形門^{北向} 西大番小屋北手ニ在リ城内持ナリ此小升形ハ北ヲ外トシ玉造内東仕切ト

相待テ本丸櫻之門ノ固メタリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ兩脇塀ノ間敷ハ合シテ前ニ出ツ

番所 門内南手ニ見附番所北西手ニ足輕番所東アリ門外東手ニ通耳番所アリ

太鼓矢倉二之丸 南仕切ノ西手ニ在リ時ノ太鼓ヲ打所ナリ東西三間南北二間半ニテ一重ナリ屋棟

東西ニ通ル高サ四間、窓九、

金城聞見録

四方に大窓有り障子を用ゆ二六時中の太鼓を打所也御坊主六人是は當座に居付の御坊主也交代して取扱ふ香を盛りて時の印を立火を點し置き火其印の所に來れば懸置たる大鈴自ら落る仕懸になして時刻を計るなり城中は酉の刻より出入止なり此太鼓は至て古物にて音色殊に勝れ遠く三四里間に響くといふ元は和州竹林寺の什物なりしか太閤陣中に用ひられしを後に時の太鼓となせるなりとぞ
胴の中にサハリの如き薄金にて輪を三重に設け太鼓を打毎に自ら廻る如くにしたり此金に響て音色甚高く遠くひびくとぞなり

此太鼓ノ胴ノ中ニ銘アリ正安壬寅正月宗師長老智光律師ノ撰文ニ係ル文ニ曰ク生馬山大聖竹林寺太鼓云々張大工左近將監八重行宗按スルニ正安四年壬寅ハ乾元ト改元アリ明治三十二年ヲ距ル五百九十七年ナリ金城聞見録 攝津秘録

西大番頭小屋 大手升形ノ裏手ニ在リ二之丸ノ西南隅ニ當レリ地坪千百三十坪アリ門北向

堀 六番矢倉際ヨリ七番矢倉際マテ長二十五間三尺餘、矢狹間三、鐵砲狹間九、石狹間十六、出堀四、武者走巾三間、

西大番頭預七番矢倉二之丸 西大番頭小屋西南ノ隅ニ在リ東西七間南北八間ニテ二重ナリ

屋棟南北ニ通ル高六間半、窓二十五、隱狹間十五、石狹間十、石落四、

石垣高サ 七番矢倉ニテ十二間半西手向側大手橋臺南ニテ七間

堀巾 七番矢倉南面ニテ四十五間西面北手ニテ五十六間

井 西大番頭小屋構内ニ在リ

堀 七番矢倉際ヨリ大手升形南手ノ多門際マテ折廻リ長延二十八間四尺餘、矢狹間五、鐵砲狹間八、石狹間十九、出堀四、武者走巾二間半、

三之丸

首記 三之丸ノ大體

三之丸ハ二之丸ノ北手ヲ圍ヒタル帶曲輪ニテ元和六年二之丸西北東三面ト同時ノ修築ニ係リ西ヲ仕切曲輪ト云ヒ地坪六千三百八十坪アリ東ヲ藏曲輪ト云ヒ地坪一萬九千坪アリ總稱シテ北ノ外曲輪トモ云フ其周廻ハ西面京橋口北手ノ堀外ニ起リ北面外川通り東面猫間川通りヲ遶リ南面堀割ノ溝ニ傍ヒテ藏曲輪東仕切門ニ至リ八百七十五間ト稱ス仕切曲輪ハ外ハ西ニ筋鐵門口アリ北ニ鳴野橋口アリ藏曲輪ハ内ハ西東ノ兩仕切アリ二之丸青屋口ノ固

ト爲リ乃ナ青屋口ヨリ二之丸ト通ス總高堀構ナリ
 土地ハ當城第一ノ低地ニシテ本丸ニ面スル所伏見矢倉前ノ堀際ニテ石垣高
 サ三尺青屋口算盤橋ノ東南隅ニ當レル東仕切西手ノ堀際ニテ四尺北面外川
 通りノ石垣ノ高サハ鳴野橋ノ西手東手共ニ三間半ナリ
 右石垣ハ關西ノ大名六家ノ分擔修築セル者ナリ
 猫間平野大和ノ三川三之丸ノ東北ヲ遠リ西流シテ淀川ニ合シ海ニ入ル
 北手ノ川中ハ京橋ニテ五十間餘鳴野橋ニテ二十九間ナリ

第三十一章 仕切曲輪

筋鐵門口 西向 此曲輪ノ西手ニ在リ

筋鐵門 西向 總筋鐵張ナリ此門ハ西ヲ外トシ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ

番所 門内東手堀際ニ在リ又此番所ノ西北ニ當レル曲輪外京橋南詰ノ門内ニハ京橋番所アリ同所西續キニハ下番所アリ

堀 筋鐵門兩脇ヨリ鳴野橋際マテ長延三百二十六間四尺餘、矢狹間百十、鐵砲狹間二百八十九、出堀二十四、武者走巾一間半、

石垣高サ 仕切曲輪北手中央ニテ一間半

鳴野門口 北東向 北曲輪ノ北手ニ在リ

鳴野門 北東向 門外ハ鳴野村トス

鳴野橋 鳴野門外ヨリ鳴野村ニ架ス木橋ナリ長二十九間巾二間

番所 鳴野門内東手ニ通耳番所アリ

第三十二章 藏曲輪

藏曲輪 西仕切門以東ヲ云フ

西仕切門 南西向 鳴野門内東手ニ在リ此仕切ハ西ヲ外トシ東仕切ト相待テ二之丸青屋口ノ固メタ

リ平常ノ切ナリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルがんぎアリ

藏番人小屋 門内北手ニ在リ

堀 西仕切ヨリ折廻リ東仕切ニ至ル長延五百四十八間二尺餘、矢狹間百三十八、鐵砲狹間五百九、出堀六十一武者走巾一間半、

石垣高サ 藏曲輪北手中央ニテ三間半

算盤橋外柵門 青屋口算盤橋北詰ニ在リ平常ノ切ナリ

又此曲輪内ニ在ル所ノ倉庫米改所并戸ハ左ノ如シ

米藏 四間梁 二棟 四間梁 二十九棟 藏方預

筈輪木藏 一棟 藏方預

藏 一棟 藏方預

米改所 三ヶ所

八角形薪藏渡リ 十二棟 鹽噌方預

石火屋藏 一棟 鐵砲方預

井 三ヶ所

東仕切門西向 藏曲輪ノ南ニ在リ此仕切ハ南ヲ外トシ西仕切ト相待テニ之九青屋口ノ固メタリ平常ベ切ナリ門内兩脇ニハ塀裏ニ登ルガんギアリ塀間數ハ前ニ出ツ

藏番人小屋 門内東手ニ在リ

塀外土手 長八十二間四尺餘幅一丈一尺石垣高サ二間半餘土手ヨリ上石垣高サ五尺

附記 曲輪外藏場及ヒ船番所

首記 藏場船番所附記ノ大意

曲輪外ノ藏場及ヒ船番所ハ本圖固ヨリ之ヲ載セス其建置ノ年紀亦未詳ニ屬ス而シテ平時ト無ク戰時ト無ク其用ハ則テ極メテ大ナリ故ニ其所在ヲ茲ニ附載スト云フ

第三十三章 焰硝藏米藏船藏及ヒ船預番所

鳴野焰硝藏場 鳴野橋外鳴野村ニ在リ焰硝ヲ製造貯藏ス

錦城明細秘録

鳴野焰硝場東西三十二間餘南北五十間餘坪數千六百二十坪餘總廻リ塀中仕切共長延二百十間餘

糞合藏三間半 北之方藥マフリ所一間半 南一間半 同續番屋三間 南ツノ屋三間半

右一棟

糞直シ藏二間半 同續洗藏六間半 同續直シ灰藏三間半 右一棟

麻柄藏二間半 同續鍛冶小屋三間半 右一棟

薪藏二間半 一棟

藥藏二間半 一棟

鐵砲藏二間半 同續修理所六間 東之方緣側二間 南之方緣側二間半 右一棟

長興寺焰硝藏場 此城ノ北方三里餘長興寺村ニ在リ倉庫員數其他共未詳

右兩藏場ハ鐵砲方預リナリ

大坂城誌第六卷 大坂城建築彙考 徳川氏 諸曲輪諸建物圖解

三七八

難波米藏 此城ノ南方難波村ニ在リ土蔵十七棟アリ

藏奉行並ニ地役人ニ大番衆ニ其外同心十二アリ藏目附米拂方等出役ス

船藏及ヒ船預番所 船ハ紀伊國丸、浪花丸、鳳凰丸、ノ三艘トス何レモ船手ノ掛リ也

船番所ハ此城ノ西方川口、木津川、安治川、ノ三ヶ所ニ在リ

大坂城誌 一名浪華誌 第七卷

大坂城建築彙考第五

圖解下

徳川氏ノ大坂城本丸殿館及ヒ天主矢

倉總圖解

首記 本丸殿館ノ大體

殿館ハ寛永元年十二月ヨリ營建ノ準備ヲ爲シ寛永三年正月ヲ以テ天主矢倉等ト共ニ造營工事ニ着手セルモノニテ小堀遠江守政一ノ設計ニ成リ第十五章 參看
本丸南部ノ最モ廣キ處ノ中央ニ在リ南受ケノ建方ナリ櫻之門ヲ入レハ東ノ方前面ニ當リ表大番所アリ左旋シテ北ニ向ヘハ正面ハ立關左リハ大廣間右ハ大臺所ニテ屋根ハ總檜皮葺獨リ銅御殿ノ屋根ハ銅葺ナリ櫻之門ヨリ立關マテ切石ニテ敷詰ム正面ナル立關ノ兩脇并ニ左右ノ三面ハ筋壁ノ練塀ニテ

大坂城誌第七卷 大坂城建築彙考 徳川氏 殿館圖解

三七九

左リノ塀ニ車寄門アリ立關ノ左リ脇ニハ唐銅製ニテ四角ナル大水溜方四尺高三尺アリ

殿館ハ總間數凡ソ六十六室立關座敷部屋納戸臺所共合算スニシテ廊下凡ソ十六箇所、椽側凡ソ十三箇所アリ文庫二棟附屬セリ錦城明細祕祿ニ云フ殿館ノ建坪ハ總數三千六百餘坪ニシテ疊數二千六百八十四疊金城聞見錄ニ云フ襖二千八百五十八本、障子二千九百二十本、兩戸二千八百五十本、杉戸二千百十二本、半障子并ニ半戸五百三十八本、上葺五ヶ所ト

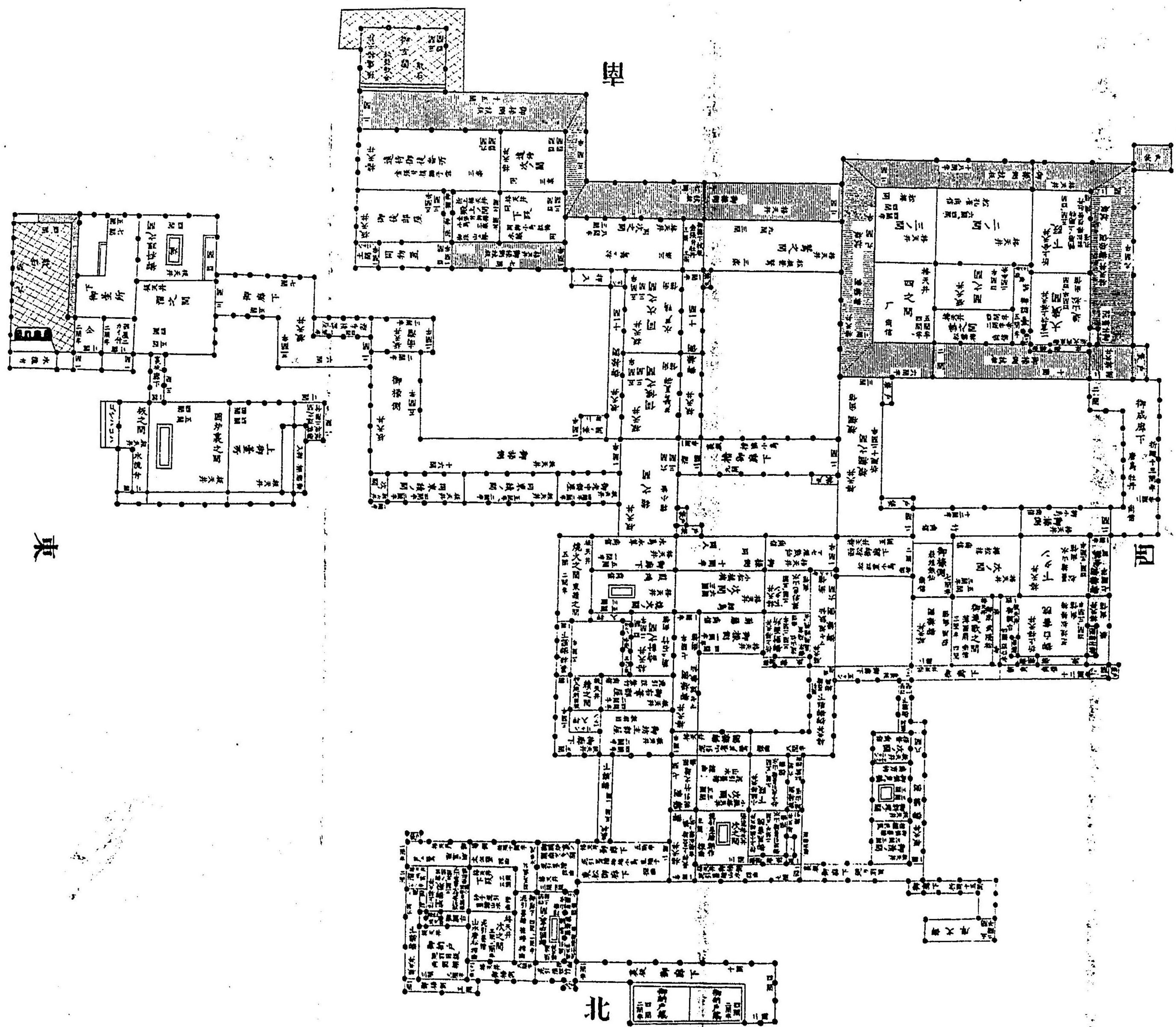
右ハ殿館總體ノ概要トス左ニ各章ニ分テ每室ノ名稱、位置、廣狹及ヒ構造ノ梗概并ニ室内ノ彩色、模様、繪畫、彫刻等ヲ詳述ス

徳川氏ノ大坂城本丸殿館之總圖ハ第十九圖ノ如シ

殿館

第三十四章 立關 遠侍之間 徒部屋 殿上之間 鶯之間 大廣間

徳川氏ノ大坂城本丸殿館總圖(第十九圖)



玄關 南向 敷石ノ正面ニ當レリ 張違格天井

入口兩開キナリ中ハ眞四角ノ切石ヲ×字形ニ組合セテ敷詰ム式臺ヨリ箱壇五段ヲ登リ北ノ方椽側ニ入ル

遠侍之間 獅子之間 椽側ヲ隔テ、玄關ノ北ノ正面ニ在リ東西九間南北四間 格天井

次之間 上之間ノ西ニ在リ 東南四間南北四間 格天井

椽側 拭板 玄關ノ北ニ起リ遠侍之間ノ南西兩面ヲ遮ル、南ノ方長十五間幅二間、西ノ方長五間半幅二間 格天井

上之間天井塗緣繪丁子花形九曜花車地紋花輪違金地錦紋四方塗椽、長押之上下共金張付繪楨獅子、襖同斷、次之間同斷

上之間ヨリ次之間へ仕切鴨居之上彫物狹間飛洲濱中ニ松梅鶴

椽側天井塗緣繪金地花形錦紋、長押之上金張付繪牡丹、鴨居之上簾狹間飛

洲濱中ニ彫物花鳥 狩野三樂筆

徒部屋 遠侍之間ノ北ニ在リ 東西五間半南北三間 板天井

徒部屋物置 徒部屋ノ北ニ在リ東 同物置 板敷 右物置ノ東續キニ在リ 東西二間南北一間半 天井 未詳

大坂城誌第七卷 大坂城建築築考 徳川氏 殿館圖解

殿上之間

徒部屋ノ西ニ在リ遠侍之間ノ北ニ當レリ

上段

西向 東西三間 南北三間 床 西向 棚 西向

折上格天井

下段

上段ノ西ニ在リ東西四間南北三間

格天井

椽側

拭板 殿上之間ノ北面ニ在リ長七間幅一間半

格天井

上段天井塗縁繪金地墨繪之草花、床之内金張付繪山ニ櫻、棚之内金張付繪

同斷、小襖栗柿杷柳梅壁張付柳ニ小鳥、襖繪櫻

下段天井塗縁繪金地墨繪之草花、廻リ金張付繪柳ニ小鳥紅梅木賊、遠侍之

間へ之仕切襖繪紅梅、鴨居之上簾狹間飛洲濱中ニ彫物牡丹片表桐ニ鳳凰

狩野三樂筆

鷺之間

殿上之間ノ西ニ在リ西ノ方大廣間ニ接シタル方ヲ上之間トス

上之間

大廣間ノ東ニ在リ東西九間南北三間

格天井

上之間ヨリ次之廊下

拭板 上之間ノ東ニ在リ長三間幅一間半

格天井

次之間

廊下ノ東ニ在リ東西八間半南北三間

格天井

椽側

拭板 鷺之間ノ南面ニ在リ長十七間幅二間

格天井

上之間天井塗縁繪金地丁子唐花形錦紋、廻リ金張付繪根笹ニ小松鷺、次之

間同斷

上之間椽側天井塗縁繪金地花形錦紋、長押之上金張付繪牡丹、西之方仕切

杉戸繪浪ニ犀、東ノ方仕切杉戸繪水ニ大鳥片表柏ニ根笹松ニ鷺

上之間ヨリ次之間へ取付之廊下天井右同斷、鴨居之上金張付繪牡丹、仕切

杉戸繪笹ニ兎片表鹿ニ木之葉

次之間椽側天井塗縁繪金地花形錦紋、廊下へ之中仕切杉戸繪竹ニ虎、鴨居

之上竹之節彫物松ニ牡丹小鳥

狩野三樂筆

大廣間

鷺之間ノ西ニ在リ

上段

南向 大廣間西北ノ隅ニ在リ東西四間南北四間半

床

南向 棚 南向 棚 (右脇ニ) 西向 附書院 (左脇ニ) 東向

二

重折上格天井

天井塗縁繪金地牡丹唐草錦紋、床之内金張付繪大松、棚之内金張付繪笹ニ

茨竹、小襖繪梅芙蓉椿櫻蒲萄枇杷茄子柳梅、附書院天井繪金地花形、狹間

障子腰ヨリ下金張付繪草花、間之總廻リ金張付繪遠山ニ大松

調臺 上段ノ東ニ在リ東西
一間半南北五間半 格天井

天井塗縁繪金地花形錦紋、四方廻リ金張付繪桃之立木、長押之上金張付繪

遠山ニ松、小襖金張付繪松ニ金鶏、襖縁古金襴

下段 上段ノ南ニ在リ東
西四間南北五間 折上格天井

天井塗縁繪金地錦紋蝶之丸牡丹唐草、西側襖金張付繪大松立木、南側まい

ら戸金張付繪松櫻、次之間仕切鴨居之上彫物岩ニ浪、松櫻牡丹根笹、襖繪

櫻孔雀

二之間 下段ノ東ニ在リ東
西六間南北四間 格天井

天井塗縁繪金地唐草錦紋、北側金張付繪岩ニ櫻鴨居之上彫物岩ニ松牡丹

櫻孔雀、南側まいら戸金張付繪松立木、東側次之間仕切襖金張付繪松立木、

鴨居之上彫物岩ニ唐松根笹牡丹櫻

三之間 二之間ノ東ニ在リ東
西四間半南北四間 格天井

天井塗縁繪金地唐草錦紋、西側上之間仕切襖金張付繪松立木、鴨居之上彫

物岩ニ唐松牡丹根笹櫻、鳳凰、北側次之間仕切襖金張付繪松ニ孔雀、鴨居之

上竹之節彫物松櫻牡丹唐鳥、南側まいら戸金張付繪櫻、東側まいら戸金張

付繪松ニ孔雀

四之間 雁之間ト
モ云フ 三之間ノ北ニ在リ東
西四間半南北五間半 格天井

天井右同斷廻リ金張付繪遠山ニ雁、間ノ廻リ繪芦ニ雁

雪之間 溜之間トモ云フ四之間ノ西ニ
在リ東西四間半南北二間半餘 格天井

天井塗縁繪金地唐草錦紋、廻リ金張付、右同斷襖繪雪ノ松梅

間之間 雪之間ノ南ニ在リ東西
四間半南北二間半餘 板天井

椽側 拭板
大廣間ノ四面ヲ透ル西之方長九間半幅二間、南之方長十八間半幅二間、東之方長九間半
幅二間、北之方長十六間半幅二間、西北之隅二間四方 附戸袋西之方椽側ノ外南ト北ノ
兩端ニ各一
ヶ所アリ 格天井

西之椽側天井塗縁繪金地八重菊錦紋、長押之上金張付繪芙蓉、北之方仕切

杉戸繪麝香猫ニ唐木同杉戸北面繪椿、鴨居之上竹之節彫物菊ニ唐松

南之椽側天井右同斷、長押之上金張付繪芙蓉、中仕切杉戸繪唐木唐鳥片表

牡丹、鴨居之上竹之節彫物牡丹、西之方仕切杉戸繪芦ニ鶴、鴨居之上簾狹

間飛洲濱中ニ彫物牡丹ニ小鳥

東之椽側天井右同斷、長押之上金張付繪芙蓉、鴨居之上簾狹間飛洲濱中ニ彫物花鳥、同北之方仕切杉戸繪蘇鐵根笹

北之椽側天井右同斷、長押之上金張付繪芙蓉、西之方仕切杉戸繪芦ニ鴨、東之方仕切杉戸繪枇杷茨笹片表柳ニ雪鷲、鴨居之上竹之節彫物菊ニ唐鳥

御成廊下へ取付之所杉戸三面共椿麝香猫 以上狩野尙信筆

御成廊下 大廣間ノ西北ヨリ白書院ノ西南ニ互ル折廻リ長十三間半幅二間 格天井

天井塗縁繪金地唐花形錦紋、廻リ金張付繪牡丹花鳥同唐鳥、東側まいら戸金張付繪同斷 狩野尙信筆

第三十五章 白書院 西松廊下 對面所 柳廊下 清之間

料理之間 文庫

白書院 御成廊下ノ東續キニ在リ

上段 南向 白書院西北ノ隅ニ在リ 東西四間南北三間半 床 南向棚 南向棚(右脇ニ) 西向 附書院(左脇ニ) 東向 折上

格天井

天井塗縁繪泥引墨繪之山水、床之内金張付繪ませ垣ニ梅松ニ鳴鳩ニ二羽、棚之内金張付繪ませ垣ニ梅椿小鳥、小襖繪菊水仙芙蓉牡丹朝顔芍藥露草櫻

附書院未詳

調臺 上段ノ東ニ在リ 西一間南北四間 板天井

廻リ金張付繪松蔦雉子

下段 上段ノ南ニ在リ 東西四間南北三間半 格天井

天井塗縁繪泥引墨繪之花鳥、西側まいら戸金張付繪松柳萩垣、長押之上繪金砂子泥引墨繪之山水、南側右同斷、東之方次之間へ仕切襖金張付繪松椿根笹鳩、鴨居之上彫物岩ニ松牡丹鳳凰

次之間 下段ノ東ニ在リ 西五間南北三間半 格天井

天井塗縁繪金地菊座唐花形錦紋、北側次之間仕切襖繪ませ垣ニ櫻、鴨居之上右同斷、廻リ金張付繪遠山ニ椿、西側上之間仕切襖金張付繪ませ垣ニ櫻、鴨居之上彫物岩ニ唐松根笹ニ牡丹唐鳥、南側まいら戸金張付繪山ニ椿櫻、東側まいら戸右同斷

連歌之間

次之間ノ北ニ在リ東 床 東向 床板長四間楠ノ一枚板ト云フ 格天井

天井塗縁繪金地菊座唐花形錦紋、床之内金張付繪大松立木奥州武隈之松ノ風景ト云フ南側

次之間へ之仕切襖金張付繪牡丹金鷄、東側まいら戸金張付繪ませ垣ニ牡

丹、北側まいら戸右同斷、長押之上金張付繪す、き穗團扇之内ニ草花山水

椽側

白書院ノ西南東ニ面ラ透ル、西之方長七間半幅一間半、南之方長十二間半幅二間、東之方長七間半幅二間、附戸袋西之方椽側ノ外北端ニアリ 格天井

西之椽側天井塗縁繪金地菊座唐草錦紋、南之方仕切杉戸繪岩ニ鴛鴦片表

す、きニ金鷄、鴨居之上竹之節彫物牡丹いなも草小鳥、北之方杉戸繪萩垣

ニ薦

南之椽側天井右同斷、東之方仕切襖繪竹、中仕切杉戸繪柳ニ小鳥、鴨居之上

竹之節彫物牡丹梅ニ小鳥

東之椽側天井右同斷、北之方仕切杉戸繪鐵せん片表萩垣ニ菊、鴨居之上竹

之節彫物唐松梅根笹

廊下

朝顔廊下ト稱ス白書院ノ北面ニ在リ長十二間半幅一間 格天井

天井塗縁繪金地菊座唐草錦紋、長押之上金張付繪朝顔、中仕切杉戸繪唐木

唐鳥、鴨居之上竹之節彫物牡丹小鳥 以上狩野尙信筆

西松廊下

白書院ノ東南ヨリ對面所ノ西南ニ互ル長五間幅二間 格天井

天井塗縁繪金地菊座唐花形錦紋、床之内金張付繪松ニ楓小鳥、西之方仕切杉戸

繪牡丹小鳥、東之方杉戸繪芙蓉ニ麝香 狩野尙信筆

對面所

西松廊下ノ東ニ在リ

上段

對面所西北ノ隅ニ在リ 床 南向 棚 南向 折上格天井

天井塗縁繪金地唐花形錦紋、床之内金張付繪海棠ニ薄岩ニ雉子、襖繪牡丹、

長押之上繪遠山ニ小松小鳥、狹間障子腰ヨリ下金張付繪草花

下段

上段ノ南ニ在リ東 西三間南北三間 格天井

天井塗縁繪泥引墨繪之花鳥、南西之狹間障子腰ヨリ下金張付繪ませ垣ニ

菊牡丹、東之方次之間へ之仕切襖繪ませ垣ニ牡丹櫻ニ猫、廻り鴨居之上金

張付繪薄彩色山水

次之間

下段ノ東ニ在リ東 西六間南北三間 格天井

天井塗縁繪金地泥引墨繪之山水、北之方南之方まいら戸金張付繪松ニ梅

根笹ニ雉子、西之方下段へ之仕切襖金張付繪萩松、東之方焼火之間へ之仕切襖右同斷澤邊之梅ニ小鳥ナリ水潜リ梅ト稱ス、廻リ鴨居之上金張付繪小松

椽側

對面所ノ西南北三間ニ在リ、西之方長六間幅一間半、南之方長十間半幅一間半、北之方長四間半幅一間半 附戸袋南之方椽側ノ外東端ニアリ 格天井

西之椽側天井塗縁繪金地八重菊錦紋、北之方仕切杉戸繪岩之腰ニ唐人物

羊片表波、南之方仕切杉戸繪柳ニ鷺片表柴垣ニ菊

南之椽側天井右同斷、長押之上金張付繪ませ垣ニ鐵せん、東之方仕切杉戸繪鳴うつら鳴ひよ鳥、中仕切杉戸繪柴垣ニ菊

北之椽側天井右同斷、東之方仕切杉戸繪柴垣ニ菊片表ませ垣ニ藤 以上

狩野尙信筆

柳廊下

對面所ノ西北ヨリ黒書院ノ西南ニ互ル折廻リ長六間半幅一間半 格天井

天井塗縁繪泥引墨繪之花鳥同山水、兩側張付繪泥引墨繪柳ニ乙鳥、東之方

仕切杉戸繪躑躅 狩野尙信筆

柳廊下ヨリ西之方廊下 長五間半 裏板天井 幅一間

右廊下ヨリ北ノ方廊下 折廻リ長四 間幅一間 裏板天井

清之間

前項ニ記載セル廊下北綴キノ北端ニ在リ東西三間南北三間 板天井

料理之間

清之間ノ南ニ在リ東西三間南北三間 圍爐裏アリ 板天井

次之間

料理之間ノ南ニ在リ東西三間南北二間 板天井

椽側

清之間料理之間ノ西面ニ在リ長八間幅一間 板天井

清之間料理之間次之間共ニ天井并ニ廻リ共繪無シ總體白土壁ナリ

中仕切二ヶ所、襖繪泥引清之間ノ方片表芭蕉櫻欄小鳥、料理之間ノ方片表

芦ニ雪降鶴、一ヶ所ノ襖繪泥引料理之間ノ方片表牡丹ニ野鷄、次之間ノ方

片表根笹

西之椽側北之方仕切杉戸繪泥引墨繪之柳片表木蓮華小鳥、南之方仕切杉

戸繪竹片表枯木ニ小鳥 狩野尙信筆

文庫

清之間北之方黒書院 廊下 折廻リ長十 五間幅一間、廻リ羽目板 裏板天井

取付ヨリ文庫へ之

右廊下ノ北綴キノ在リ 東西五間南北二間半

第二十六章 黒書院 東松廊下 銅殿 納戸藏

大坂城誌第七卷 大坂城建築考 徳川氏 殿閣圖解

黒書院

柳廊下ノ東續キニ在リ黒書院ノ木材ハ霧島松ト云フ

上段

南向 黒書院西北ノ隅ニ在リ 東西三間南北二間半

床 南向、床縁黒塗、棚南向、附書院(左脇ニ在リ) 東向

折上小

組格天井

下段

上段ノ南ニ在リ東 西三間南北三間

小組格天井

次之間

下段ノ東ニ在リ東 西三間南北三間

小組格天井

椽側

黒書院ノ四面ヲ透ル、西之方長六間幅一間、南之方長八間半幅一間半、東之方長七間幅一間半、北之方長七間幅一間

張違格天井

上段

床之内張付金砂子泥引墨繪之山水、棚之内張付金砂子墨繪之蒲萄小

襖繪菊ニ蒲萄山茶花、天井廻リ長押之上張付金砂子泥引墨繪之山水、下段

同斷

次之間

天井廻リ張付金砂子泥引墨繪之花鳥、長押之上張付繪竹ニ雀

三之間

天井廻リ右同斷繪墨繪之唐之耕作

西之椽側

天井右同斷長押之上張付泥引、北之方仕切羽目繪紅葉、中仕切杉戸繪唐鳥芙蓉片表芙蓉、南仕切繪水仙

南之椽側

天井右同斷長押之上張付泥引、西之方仕切杉戸繪枯木唐鳥、中仕切杉戸繪桃片表青鷺、東之方仕切杉戸繪芦ニ雁片表岩ニ根笹

北之椽側

天井右同斷長押之上張付泥引繪芙蓉ニ小鳥 狩野探幽筆

東之椽側

長押之上張付泥引墨繪之鶴、台徳院殿之筆ト傳ヘ云フ 同所中仕切杉戸繪櫻片表揚ケ羽鶴

東松廊下

黒書院ノ東北ヨリ銅殿ノ西 南ニ互ル長五間半幅二間

格天井

天井

塗縁繪金地唐花形錦紋、兩側金張付繪松ニ雪、長押之上張付繪泥引墨繪之山水、西之方仕切杉戸繪麒麟片表松ニ雪 狩野探幽筆

銅殿

東松廊下ノ東 續キニ在リ

上段

南向 銅殿東南ノ隅ニ在リ 東西三間南北三間

床 西向、棚(左脇ニ在リ) 南向

天井

塗縁繪金砂子泥引墨繪之花鳥同山水、床之内張付繪金砂子泥引墨繪之唐人物、棚之内張付繪金砂子泥引墨繪之唐子、小襖繪泥引墨繪之菊芙蓉

茨小鳥

折上格天井

帳臺

上段ノ北ニ在リ東 西三間半南北一間

板天井

大坂城誌第七卷

大坂城建築彙考 徳川氏 殿館圖解

三九三

三九三

元徳

元徳九年七月

長祿

長祿元年七月

寛永

寛永元年七月

享和

享和元年七月

天保

天保元年七月

文政

文政元年七月

嘉永

嘉永元年七月

天保

天保元年七月

文政

文政元年七月

享和

享和元年七月

長祿

長祿元年七月

元徳

元徳元年七月

前段圖解首
記天主矢倉屋
根ノ條及ヒ第
三十九章天主
矢倉ノ條參

墨繪之山水、襖縁蜀紅之錦南之方上段之間へ、仕切襖繪泥引墨繪之唐人
物長押之上墨繪之山水

溜之間 上段ノ東ニ在リ東
西一間半南北一間 格天井

墨繪之山水、杉戸繪鳴鶯

下段 上段ノ西ニ在リ東
西三間南北三間 格天井

天井塗縁繪泥引團扇之内ニ墨繪之花鳥、南北西之仕切襖繪泥引墨繪之山
水、鴨居之上繪泥引墨繪之山水同遠山ニ松

次之間 下段ノ北ニ在リ東
西三間南北二間半 格天井

天井右同斷東西北之方仕切襖繪泥引墨繪之山水花鳥

次之間ヨリ圍爐裏
裏之間へ取付之廊下 長四間幅 格天井

天井塗縁繪金地唐花形丁子之丸錦紋、廻リ張付繪泥引墨繪之根笹松小鳥

圍爐裏之間 廊下ノ西ニ在リ東西三間
南北四間 圍爐裏アリ 張違格天井

天井塗縁繪泥引墨繪之山水

圍爐裏南續之間 圍爐裏之間ノ南ニ在リ
東西四間南北三間 格天井

天井塗縁繪金地唐花形錦紋、南側張付繪金砂子泥引墨繪松ニ白鳥

納戸 次之間ノ東ニ在リ東
西三間半南北三間 廻リ羽目 板天井

椽側 上段下段ノ南西兩面ヲ透ル折廻リ長十間半幅
一間半 附戸袋南之方椽側ノ外東端ニアリ 格天井

天井塗縁繪金地唐花形錦紋、東之方北へ、仕切杉戸朝顔片表芦ニ鷺東之

方仕切杉戸繪桐ニ鳳凰片表太公望、北之方廊下へ之仕切杉戸司馬温公

廊下 納戸ノ東面ニ在リ
長六間幅一間 格天井

天井塗縁繪金地唐花形錦紋北之方仕切杉戸繪笹ニ蝶片表籠ニ小鳥

椽側 納戸及ヒ次之間圍爐裏之間等ノ北西兩面ヲ透ル、北之方東部ニテ長五間幅一間、同西
部ニテ長八間半幅一間半、西之方長四間幅一間 附戸袋北之方椽側ノ外西端ニアリ 格

天井

北之椽側天井塗縁繪金地唐花形錦紋、鴨居之上張付繪泥引墨繪波ニ松、東

之中仕切杉戸繪柴垣ニ飄覃茨雉子、西之中仕切杉戸繪槿菊片表牡丹

西之椽側天井右同斷、長押之上繪泥引墨繪柏ニ小鳥、左之方杉戸水呑之虎

北之方仕切杉戸繪柏ニ小鳥片表鐵せん 以上狩野探幽筆

銅殿ヨリ納戸
藏へ渡リ之 廊下 折廻リ長十四間幅東ニ
テ一間半西ニテ二間 裏板天井

大坂城誌第七卷 大坂城建築彙考 徳川氏 殿館圖解

納戸藏

右廊下ノ北側ニ在リ東西八間南北二間
半中央ニ仕切アリニ夕戸前トナレリ

第二十七章

坊主部屋

祐筆部屋

時計之間

焼火之間

猪之間

繪廊下

櫻欄之間

伺公之間

東松廊下ヨリ坊主部屋ヘ渡リ之廊下

長五間

裏板天井

坊主部屋

右廊下ノ南續キニ在リ

板天井

祐筆部屋

坊主部屋ノ南ニ在リ東

格天井

同東續之間

東西二間南

板天井

同押入

板敷 右同所北之方ニ在リ

板天井

上之間天井塗縁金地繪丁子之丸錦紋廻り金張付繪ませ垣ニ菊桔梗岩ニ
竹、長押之上金張付繪朝顔

東續之間天井廻り長押之上下張付繪泥引くま取茨ニ竹 狩野尙信筆

時計之間

祐筆部屋ノ南ニ在リ

格天井

繪菊ニ石竹 狩野尙信筆

同茶所

右同所東之方ニ在リ

椽側

坊主部屋祐筆部屋時計之間ノ
西面ニ在リ長七間半幅一間半

格天井

繪のうぜんかつらニ唐草

坊主部屋廊下

折廻り長六間半幅西ニ

板天井

東之方之廊下

テ一間半南ニテ一間

裏板天井

右廊下ノ南續之間

幅一間

格天井

焼火之間

時計之間ノ南ニ在リ東西五

間南北三間 圍爐裏アリ

繪芦ニ鶴 狩野尙信筆

同所押入

右同所北手東之方ニ在

同東續之間

東西二間半

格天井

焼火之間南之方廊下

長五間幅

格天井

繪水草ニ水鳥

猪之間

右廊下ノ南ニ在リ東西三間南北六

間 附戸袋同所西之方北端ニアリ

繪猪 狩野尙信筆

溜

猪之間ノ西ニ在リ東

天井未詳

繪廊下

溜ノ西ニ在リ東西九間南北二間

裏板天井

附戸袋同所北之方西端ニ在リ

天井廻り長押之上下金張付繪檜ニ小鳥草花、北側まいら戸金張付繪草花

ニ小鳥、東之方仕切杉戸繪檜ニ草花片表唐木 狩野尙信筆

椽欄之間 椽廊下ノ西ニ在リ折廻リ長十二間半幅西ニテ二間南ニテ三間 附戸袋西之方北ト南ノ兩端ニ各一ヶ所アリ 格天井

天井塗縁繪金地花形錦紋、廻り金張付繪椽欄、西側まいら戸金張付繪同斷

狩野尙信筆

伺公之間 猪之間ノ南ニ在リ北ノ方猪之間ニ接シタル方ヲ上之間トヌ上之間東西三間南北五間半 板天井

次之間 上之間ノ南ニ在リ東ノ方西二間南北五間半 板天井

椽側 伺公之間ノ西東兩面ニ在リ、西之方長十一間幅一間半、東之方長十一間幅一間 附戸袋西之椽側ノ外南端ニアリ 板天井

上之間天井廻り長押之上下共金張付繪芦ニ鴨雁鴛鴦狹間障子腰ヨリ下

金張付繪右同斷

次之間天井廻り長押之上下共金張付繪柳ニ鷺狹間障子腰ヨリ下金張付

繪草花、西側まいら戸金張付繪あらさる

西之椽側南仕切杉戸繪岩ニ金鶏片表なよ竹 狩野尙信筆

第二十八章 老中部屋 茶之間 南溜 下臺所 上臺所

老中部屋 猪之間ノ東ニ在リ東西四間半南北二間半 廻り羽目板 板天井

同東續之間 東西五間半 南北二間半 板天井

同東續之間 東西四間半 南北二間半 板天井

同東續之間 東西二間半 南北二間半 板天井

茶之間 椽側ヲ隔テ、老中部屋ノ南ニ在リ東西二間南北一間半 天井未詳

椽側 老中部屋ノ南面ニ在リ長十六間幅一間半 板天井

右椽側東之方 廊下 長五間半 幅二間半 板天井

南溜 右廊下ノ南ニ在リ東ノ方西三間半南北二間半 板天井

同東續部屋 東西四間南 北一間半 天井未詳

南溜脇ヨリ 下臺所ヘ之廊下 折廻長十六間半幅西ニテ二間東ニテ三間 板天井

下臺所 右廊下ノ東ニ在リ

溜之間 下臺所西北ノ隅ニ在リ東西四間南北五間 板天井

料理之間 溜之間ノ南ニ在リ東西四間南北四間 圍爐裏アリ 板天井

下臺所 料理之間ノ東ニ在リ東西五間南北七間 圍爐裏アリ 天井未詳

同部屋

右同所北手ニ在リ東西二室アリ二室共東西二間半南北二間
二階付ナリ二室共北手ニハ東西二間半南北二間ノ押入アリ

石之間

下臺所ノ東ニ在リ真四角ノ切石ヲ×字形ニ組合セテ敷結ム東西四間
南北九間 北手ニハ竈アリ大釜三ツ掛ケ有之東北ノ隅ニハ水流アリ

下臺所ヨリ上廊下

長三間 裏板天井

上臺所

右廊下ノ北
續キニ在リ

料理之間

板敷 上臺所西南ノ隅ニ在リ東西
二間南北二間 二階付ナリ

上臺所

料理之間ノ東ニ在リ東西四間南
北四間 西之方ニ膳棚押入アリ 板天井

圍爐裏之間

上臺所ノ東ニ在リ東西五
間南北四間 圍爐裏アリ 板天井

板之間

圍爐裏之間ノ東ニ在リ東西二間
南北四間 東北ノ隅ニ水流アリ 板天井

天主矢倉總圖解

首記 天主矢倉ノ風采ノ梗概

此天主ノ石垣ハ元和八年加藤肥後守忠廣擔當シテ修築シ矢倉ハ寛永三年小
堀遠江守政一奉行シテ構造セシ所ナリ 第十二章及ヒ
第十五章參看 是ヨリ先キ徳川氏ハ江戸
慶長十
一年 駿府城 慶長十
五年 名古屋城 慶長十
五年 等ニ天主矢倉ヲ營建セリ故ニ此天主矢倉

ニ至リテハ折衷尤モ宜シキヲ得テ二十六棟ノ隅矢倉并ニ多門等周圍ニ羅列
セル中央ノ殿館ノ後ニ巖然トシテ此天主矢倉屹立シ景象極メテ雄壯ナリシ
ト云フ

第三十九章 天主矢倉構造ノ梗概及ヒ使用ノ間尺

此天主矢倉ハ五重ニテ南北ヲ桁行東西ヲ梁行トシ南ヲ以テ正面ト爲シ總塗籠白
土壁ナリ屋棟南北ニ通ル其四面ノ狹間外側ノ長押及ヒ屋棟ノ鱗ノ位置等ノ如キ
ハ第二十一第二十二兩圖ニ於テ自ラ分明ナレハ敢テ贅セス

江戸城ノ天主矢倉ノ屋根ハ銅葺ナリ又名古屋城ノ天主矢倉ノ屋根ハ初重ハ土
瓦葺ニ重以上五重迄ハ銅葺ナリ又此城ニモ現在銅御殿ノ屋根ノ銅葺ナルアリ
サレハ此天主矢倉ノ屋根ハ銅葺ナリシコトナラン姑ク疑ヲ存ス 圖解上首記天主
矢倉屋根ノ條及
ヒ第三十六章銅
御殿ノ條參看

此天主矢倉ノ間尺ハ七尺間ヲ用井五重ノ内部ノミハ六尺間ヲ用井タルモノナル
カ如シ

天主臺石垣

石垣ハ大小二箇連接シテ成レリ小者ヲ小天主臺ト稱シテ南ニ在リ大者ヲ天主臺ト稱シテ高ク其北ニ聳ユ

小天主臺石垣

高サ 五間餘
平面 南北上ニテ十三間餘 下ニテ十二間二尺
東西上ニテ十二間餘 下ニテ十四間四尺

天主臺石垣

高サ 八間餘
平面 南北上ニテ十八間五尺餘 下ニテ二十二間五尺
東西上ニテ十六間四尺餘 下ニテ二十間四尺

右石垣平面總圖ハ第二十圖ノ如シ

幅凡ソ三間ノがんぎ小天主石垣ノ東面ニ起リ北ニ向ヒテ上リ又西ニ折レ小天主臺入口門ノ前ニ至ル

金城閉見録

天主臺は御本丸中央御殿の後ろに有り五層の天守は先年雷火に依て燒失す今臺のみ残り御影の大石を以て疊み上げ累々として雲を凌ぎその象須彌山の圖の如く又鞍の胸に似たり石坂巾三間北に向ひて五十八段登り又西に向ひて二十一一段登れば中段に至る門を入れは平地有り此中に井有り黄金水の井是なり

門北向

小天主臺石垣ノ北側上リ口ニ在リ乃チ小天主臺入口門ナリ

黄金水ノ井

門内南手ノ正面ニ在リ地上即小天主臺上ヨリ水面井ノ周圍ニハ眞四角ノ切石ヲ

×字狀ニ組合セテ敷詰ム

金城閉見録

傳ヘ云フ太閤此井を掘せられし時水を精靈ならしめんか爲なりとて多くの黄金を水底に沈め給ひしに依り此名ありと此井の水の冷なる事水の如し昔し棍助といへる賊あり此事を聞傳へ水底の黄金を盗み取らんと思ひ立ち番士に従ひ當城に來り深夜密に此井の中に入しに水深くして底を知らず冷氣膚を斬か如し是を堪らへて漸く深く沈みて見れば格子の如く穴を穿り貫きたる大石の中底有り是より下に至る事を得ず其底の深さ亦側られず是に於て大膽の強賊も力及はず大に恐怖し手を空しくして逃れ出しと也此賊後に他の罪を犯し戮せらるゝの時に至り此事を語りしとみや

案スルニ此口碑ト共ニ黄金水ノ井ノ名モ亦傳ヘテ今ニ至ルト雖モ現在ノ

天主臺ノ位置ハ果シテ豊太閤築造當時ノ位置ナルヤ否ヤハ未タ詳カナラス

黄金水ノ井ノ西ニがんぎアリ此がんぎヲ西ニ向ヒテ登リ右折シテ北スレハ天

主臺登リ口ノ門ニ至ル又西面ノ外側ニモ門アリ

門西向

小天主臺西面外側ニ在リ此門外ハ石垣ノ懸崖ナレハ此儘ニテハ通行ノ叶ハサル所ナリ

案スルニ此天主矢倉焼失寛文前ノ圖面第四圖ニハ此門前ヨリ西手ノ多門マテ 建續キタル渡矢倉構ノ多門アリ

門南向

小天主臺西部ノ北手ニ在リ天主臺登リ口ノ門ナリ此門ヲ入レハ又ガングアリ此ガングヲ登リ北ニ進メハ天主入口門ニ至ル

金城閣見録

冠木門を越し又北に向ひて登れば御天守臺上に至る臺上より見渡せば攝河泉之園々は眼下に在るの思ひあり山城大和淡路播磨の山々迄も一望の中に連なり俯して臺下の人の往來する様を見れば蠢々平として恰も螻蟻の匍匐するを見るに似たり而して身は直立の高臺の上に在ることなれば戰々兢々として足自ら戰慄し久しく留まる能はざるなり

是レ天主矢倉焼失後臺上ヨリ眺望セル様ヲ述ヘタルモノナリ余亦往年此天主臺ニ登臨シ當時見ル所殆ト此書ト同一ナル者アリシ

前項ニ掲ケタル側面建圖正面建圖ヨリ次ニ載スル所ノ小天主平面地割圖及ヒ穴藏初重乃至五重平面地割圖ニ至ル九圖第二十一圖乃自第二十九圖ノ原本ハ七尺間ヲ曲尺五

分ノ割合ニ縮圖セルモノナルカ如シ本書ハ復之ヲ縮圖シテ掲ケタルモノナリ右圖面ヲ檢案推歩シ乃チ曲尺五分ヲ以テ七尺ト定メテ以テ天主矢倉全體ノ間尺ヲ算出シ又圖上ノ朱線ニ據リテ坪數ヲ分チ方形ノ黑點ヲ以テ並柱、同朱點ヲ以テ通り柱ト見做シ以テ天主矢倉解説ヲ作り姑ラク左ニ附載セリ余素ト造家ノ術ニ通セス博雅ノ君子指摘シテ教フル所アラハ幸甚

天主矢倉

粵ニ先ツ此天主矢倉ノ高サ及ヒ桁行、梁行ノ間尺、每重ノ坪數并ニ柱數、間數等ヲ綜記スル左ノ如シ但石垣ノ高サハ第二十圖ニ在リテハ六尺三寸間ヲ以テ記載セルモ姑ク七尺間ニ換算ス

高サ

總高サ 本丸地面ヨリ棟瓦上端マテ 七尺間 二十七間四尺二寸十九丈三

石垣高サ 地面ヨリ上面マテ 同 七間一尺五丈零

矢倉高サ 土臺下端ヨリ棟瓦上端マテ 同 二十間二尺八寸十四丈二

錦城明細祕録ニ此天主矢倉ノ高サ及ヒ桁行梁行ノ間尺ヲ記載ス惟フニ此間

尺ハ六尺三寸間ヲ用井タル者ナラン姑ラク掲ケテ讀者ノ參考ニ供ス其高サハ左ノ如シ

石垣高サ^{地面ヨリ} 七間二尺
 矢倉高サ^{上面マテ} 二十二間二尺九寸
 初重 四間一尺六寸
 二重 四間一尺一寸
 三重 三間五尺九寸
 四重 三間四尺
 五重 三間六寸
 五重ノ桁ヨリ屋根ノ箱棟マテ三間一尺七寸

桁行梁行

穴藏	桁行 七尺間	十三間	梁行 七尺間	十一間
初重	桁行 同	十七間	梁行 同	十五間
二重	桁行 同	十四間	梁行 同	十二間
三重	桁行 同	十一間半	梁行 同	九間半
四重	桁行 同	九間	梁行 同	七間
五重	桁行 同	七間	梁行 同	五間

但五重ノ内部ハ凡六尺間ノ割出シナリ

錦城明細祕録ニ記載スル所ノ桁行梁行ハ左ノ如シ

穴藏 桁行 (缺) 梁行 (缺)
 初重 桁行 十八間二尺 梁行 十六間一尺
 二重 桁行 十四間六尺 梁行 十二間五尺
 三重 桁行 十二間一尺八寸 梁行 十間八寸
 四重 桁行 九間四尺五寸 梁行 七間三尺五寸
 五重 桁行 七間三尺五寸 梁行 五間二尺五寸

坪數

穴藏 百四十三坪 初重 二百五十五坪 二重 百六十八坪
 三重 百零九坪二合五勺 四重 六十三坪 五重 六尺坪 凡四十八坪
 凡 七百八十六坪二合五勺

柱數及ヒ間數

總柱數 七百四十九本 總間數^{穴倉共} 五十五室

右ハ此天主矢倉ノ高サ其他ノ大體トス

此天主矢倉ノ側面建圖ハ第二十一圖正面建圖ハ第二十二圖ノ如シ

左ニ此天主矢倉ノ構造ノ概要ヲ解説ス

石垣

石垣上面縁通りノ石ノ上ニ天主矢倉初重外側通りノ土臺据ワル
石垣上面周圍凡ソ二間ハ初重武者走ノ椽ノ下ニ當ル其内側ハ乃チ穴藏ノ外廻リニシテ此處ニハ穴藏
ヨリ初重ニ登ルガんぎアルナリ

門南向

天主臺石垣南面ニ在リ天主矢倉ノ入口門ナリ

穴藏

石垣ノ内部ニ在リ天主入口門内ニ當ル
桁行十三間梁行十一間此内周圍一間ヲ外廻リトシ其内部ヲ藏内トス藏内間數十二室ナリ柱數二百三
十八本ニシテ此内並柱百六十六本小柱二十三本通り柱四十九本

穴藏平面地割ハ第二十四圖ノ如シ

初重

桁行十七間梁行十五間此内周圍一丈四尺ヲ武者走トシ其内部ヲ座敷トス座敷間數十二室ナリ柱數百
六十九本ニシテ此内並柱百二十二本通り柱四十七本

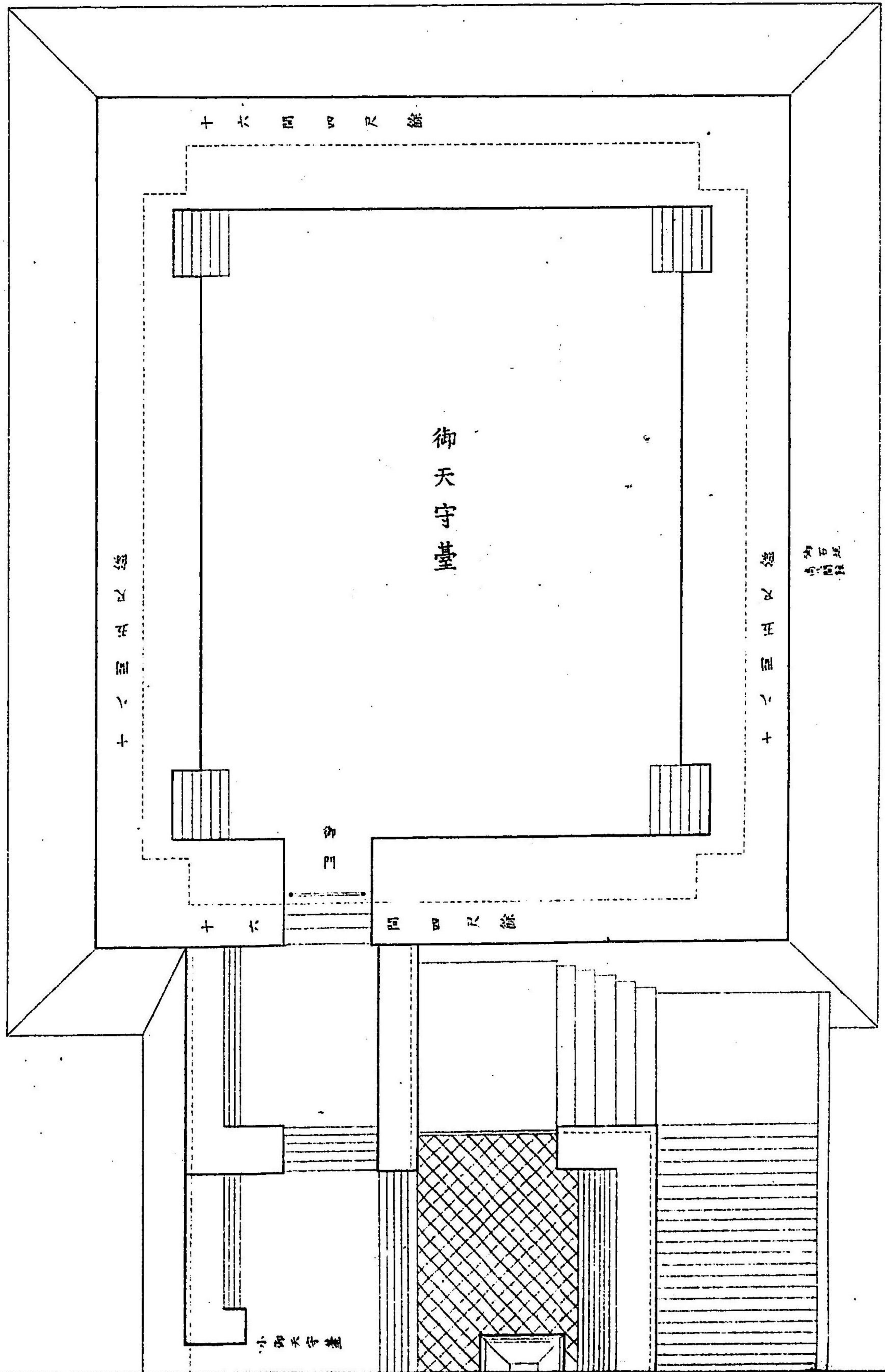
初重平面地割ハ第二十五圖ノ如シ

二重

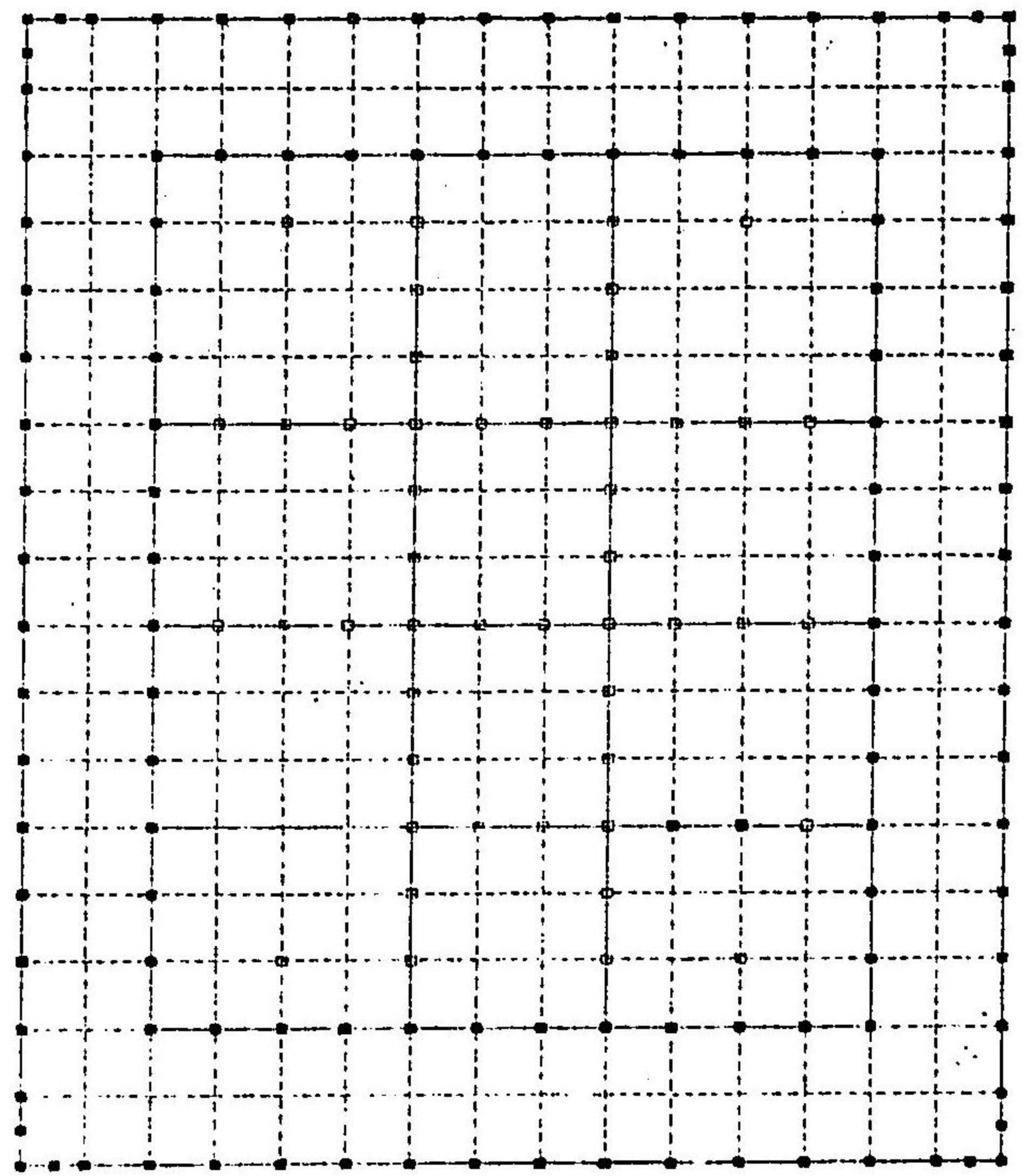
徳川氏ノ大坂城天主平面圖

石垣 (第二十圖)

天主臺上面七尺間ニテ南北十七間東西十五
此石垣ノ原圖ハ六尺三寸間ヲ用ヘタル
但七尺間ニ換算スレハ前記ト同一ノ間

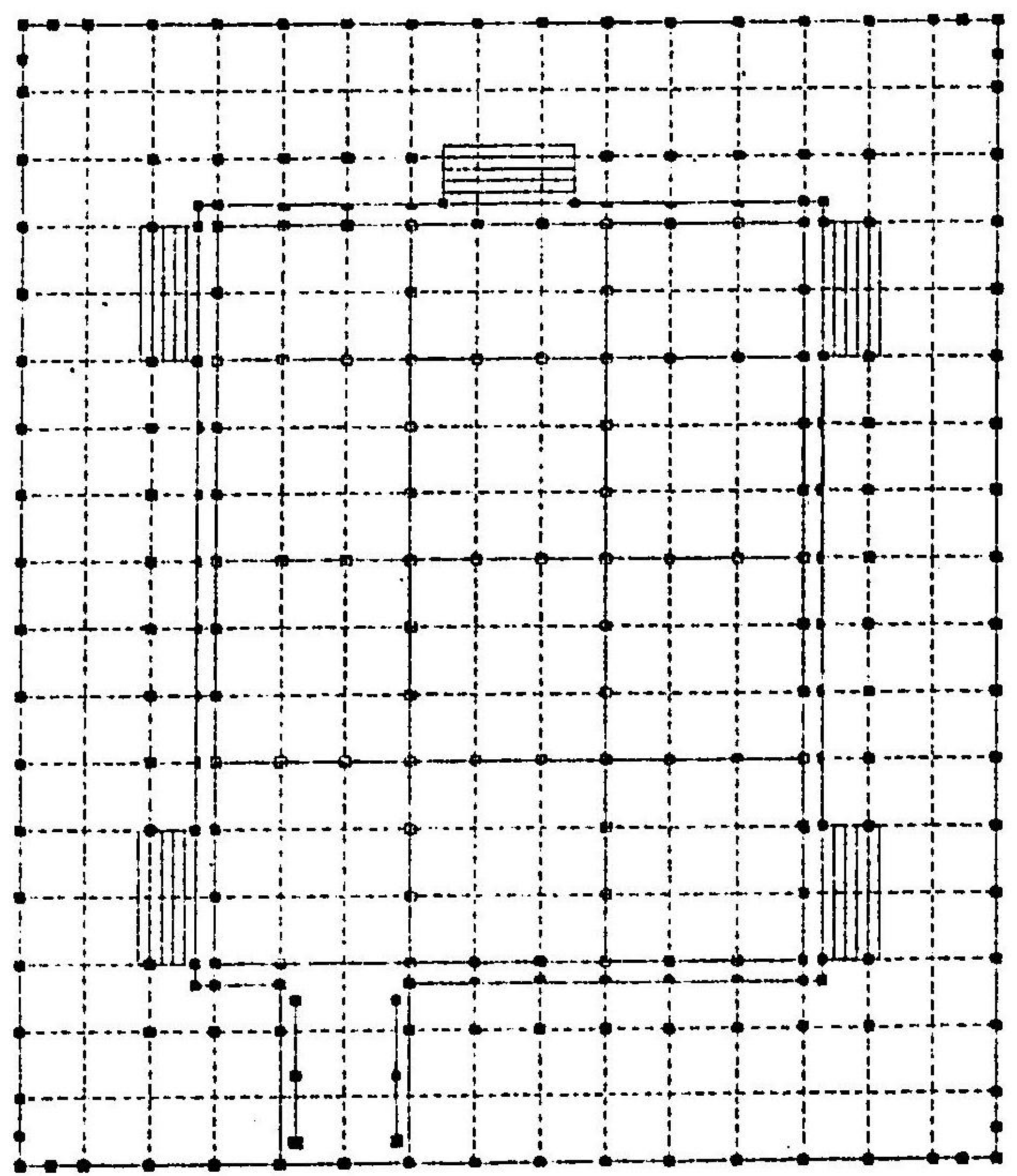


初重 (第二十五圖)



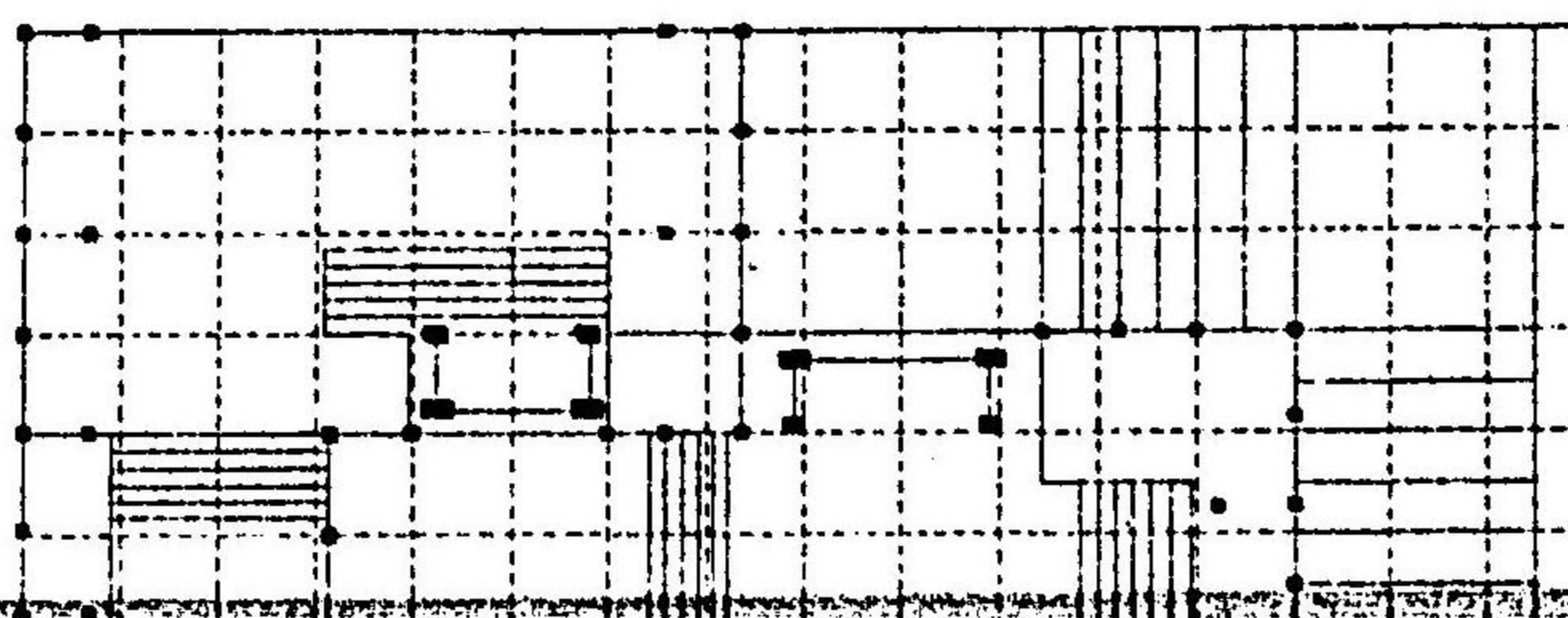
矢倉

穴藏 (第二十四圖)

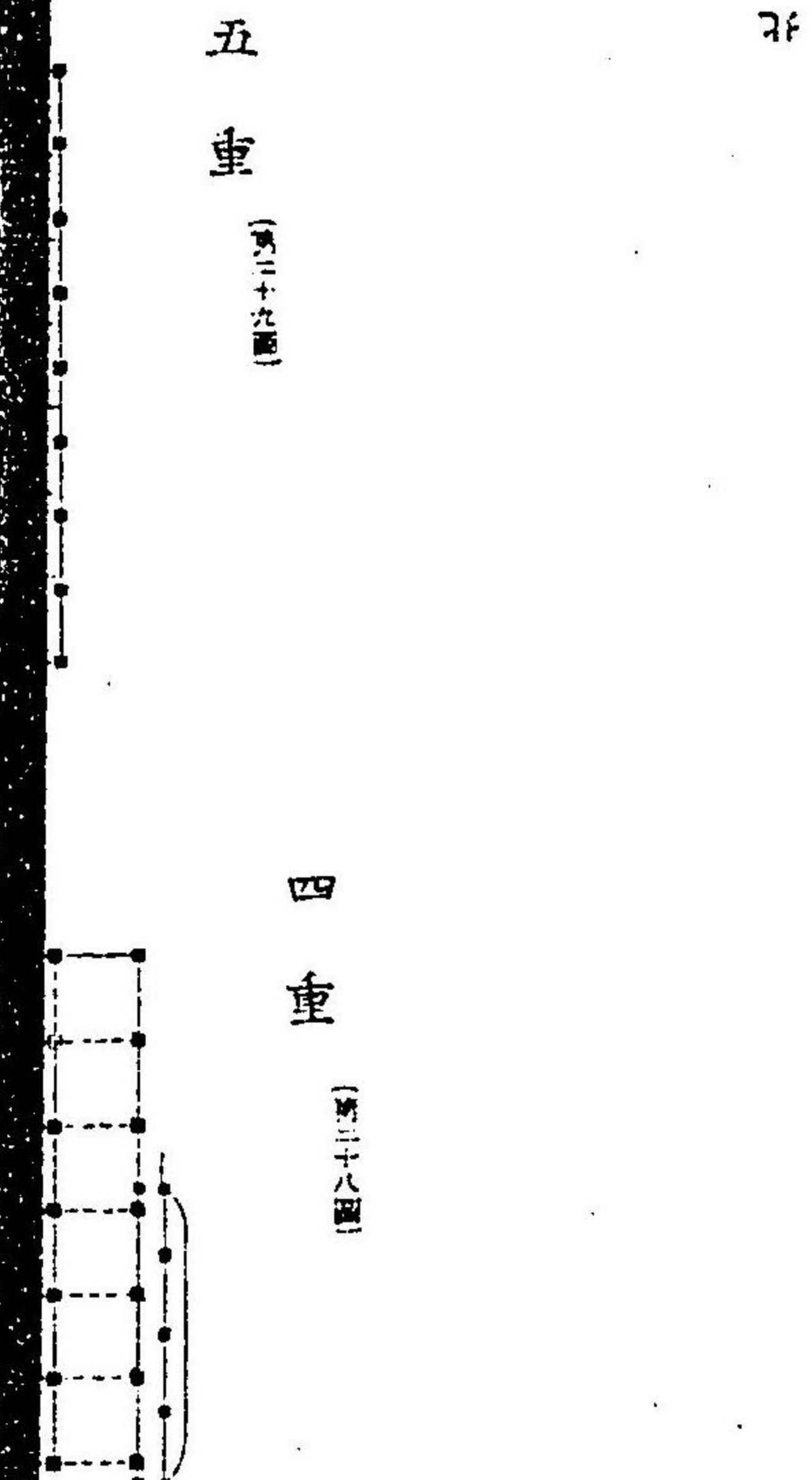


五重ハ九六尺間四重以下ハ七尺間ノ地割
一ハ各室區畫線一ハ坪割線一ハ通り柱
但小天主臺ニ在リテハ一モ亦通り柱ニア

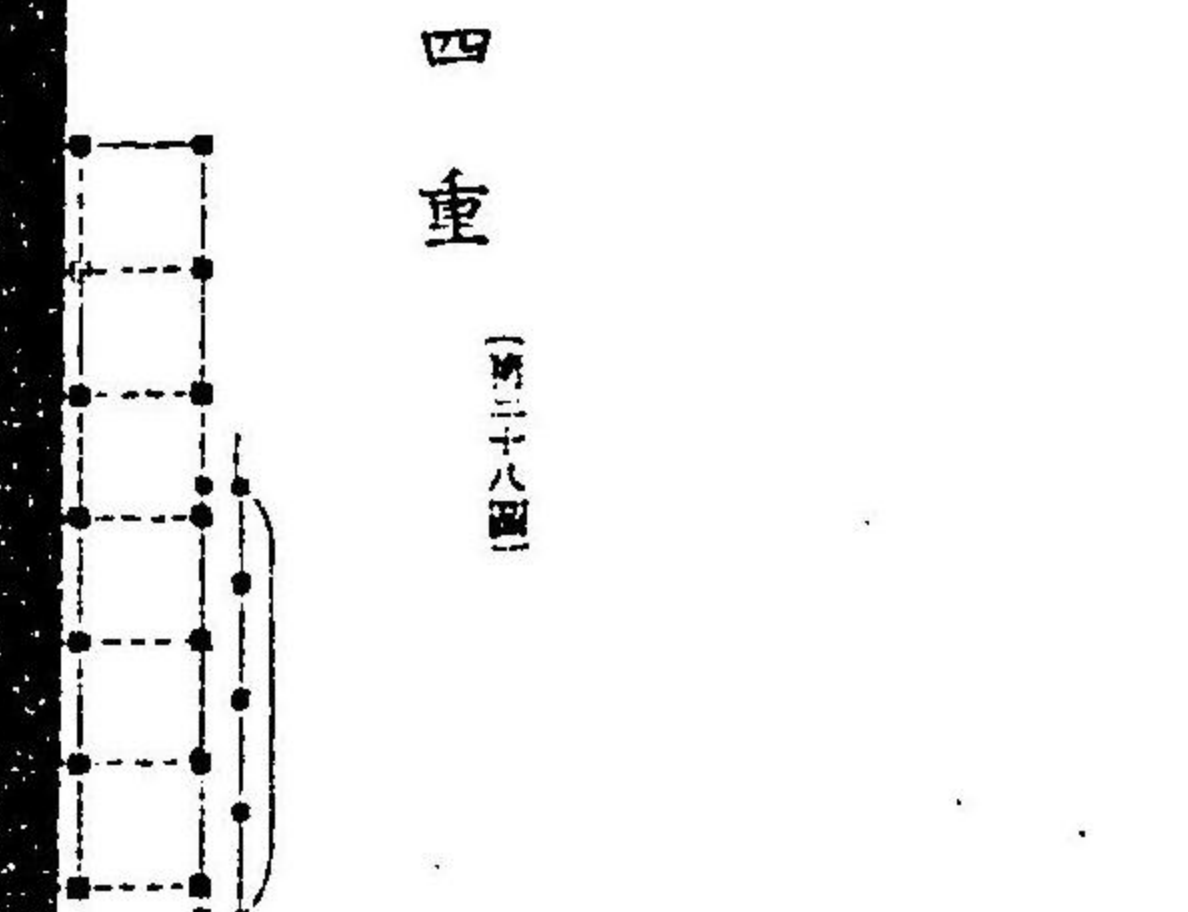
小天主臺 (第二十三圖)



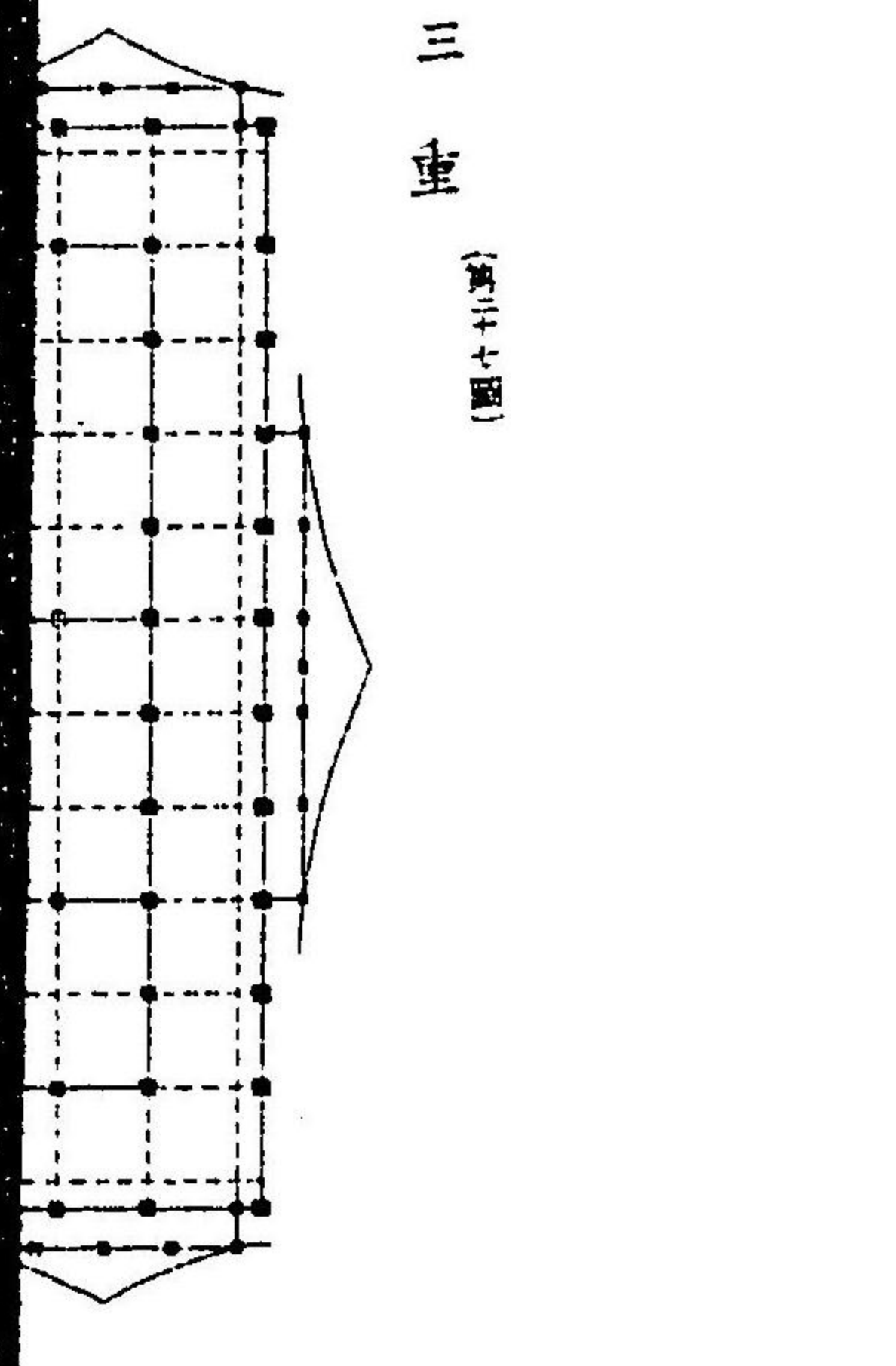
五重 (第二十五圖)



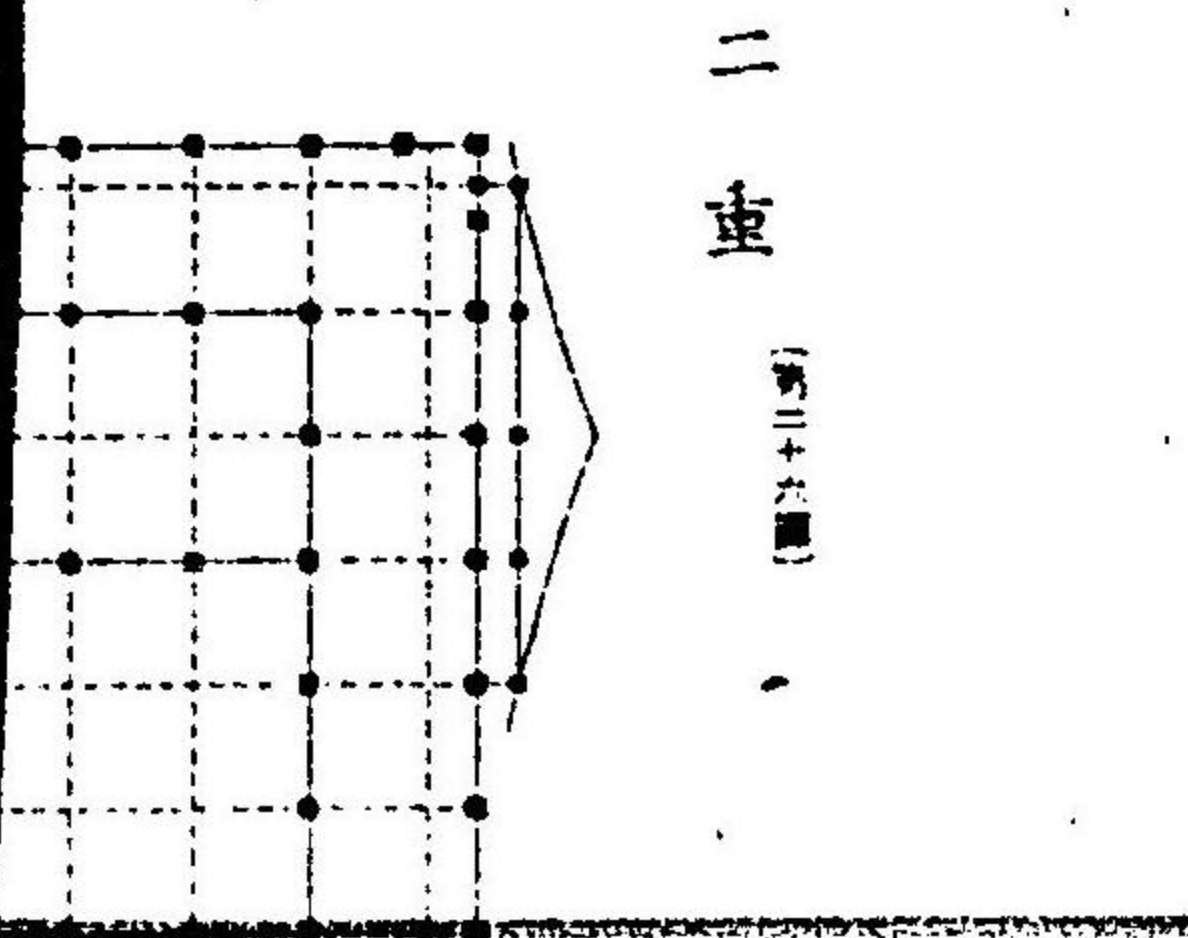
四重 (第二十八圖)

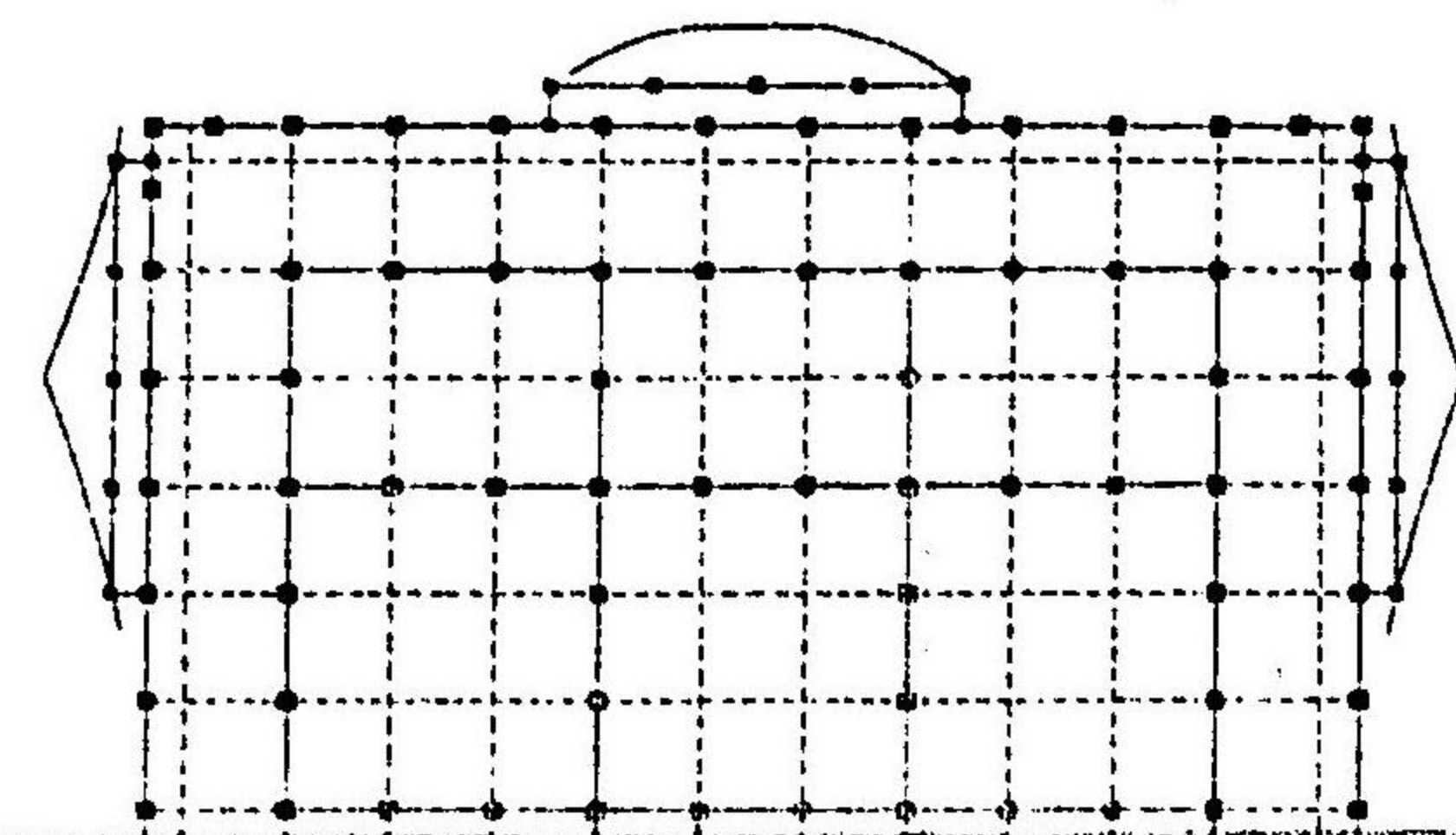


三重 (第三十圖)

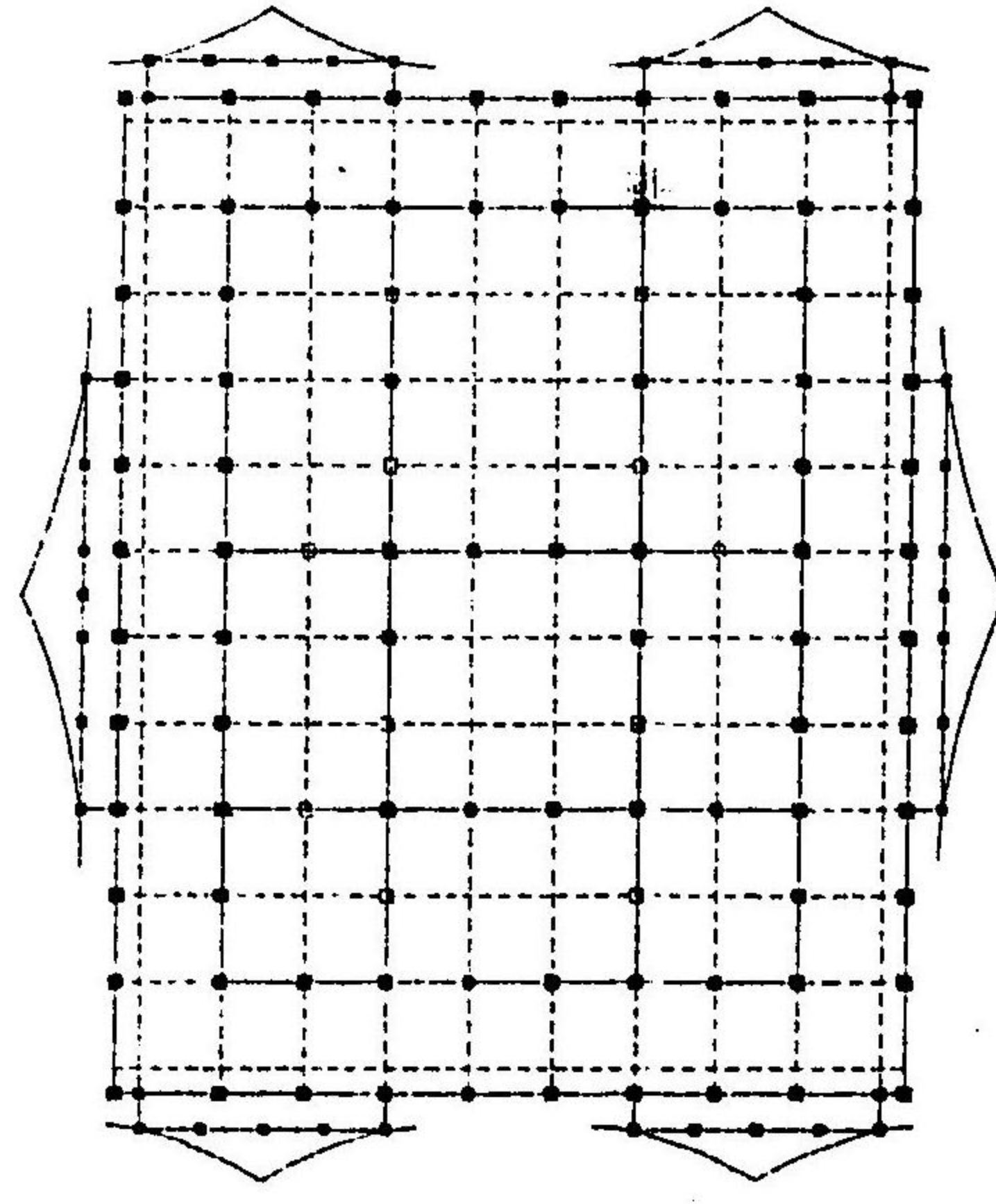


二重 (第三十六圖)

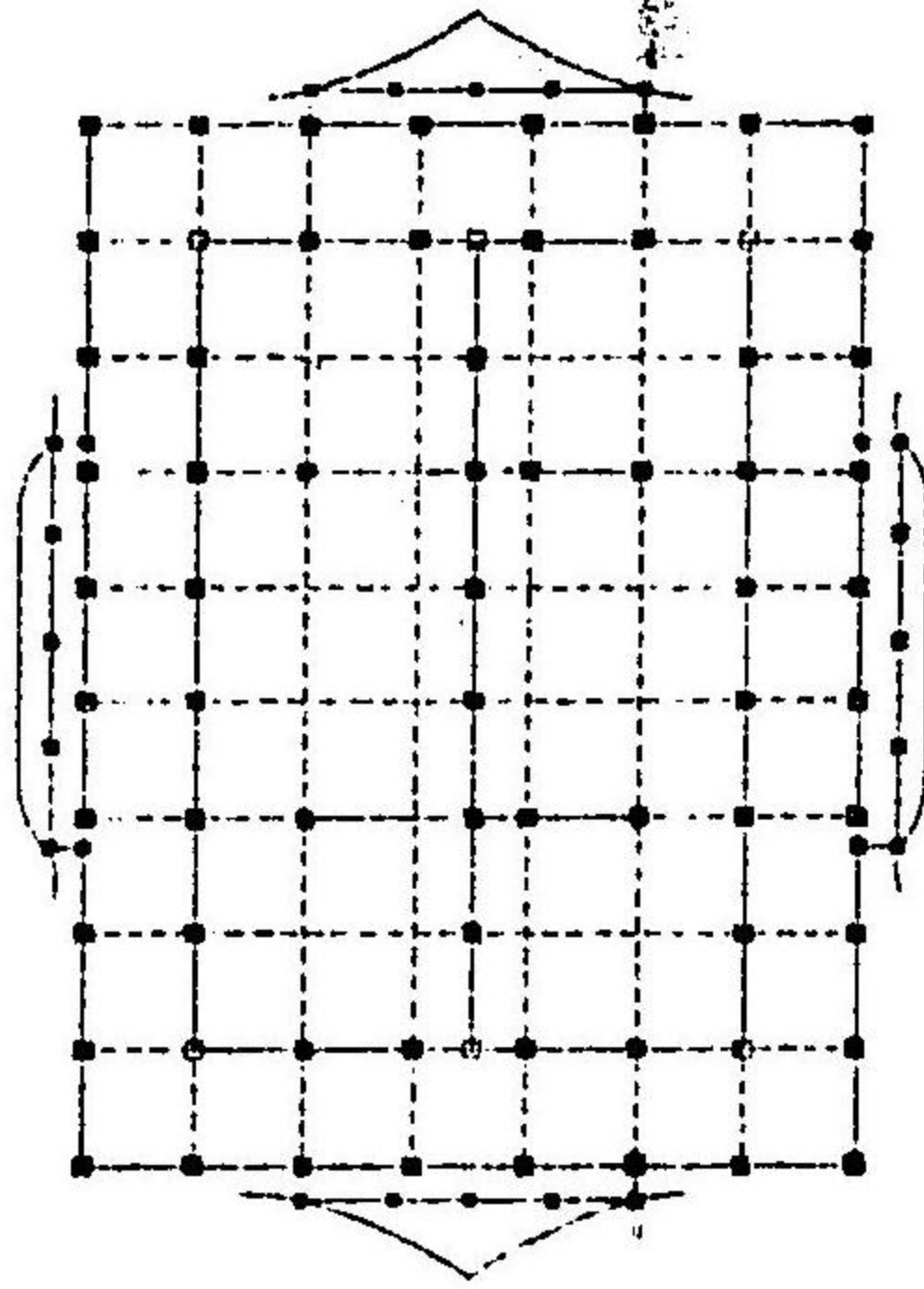




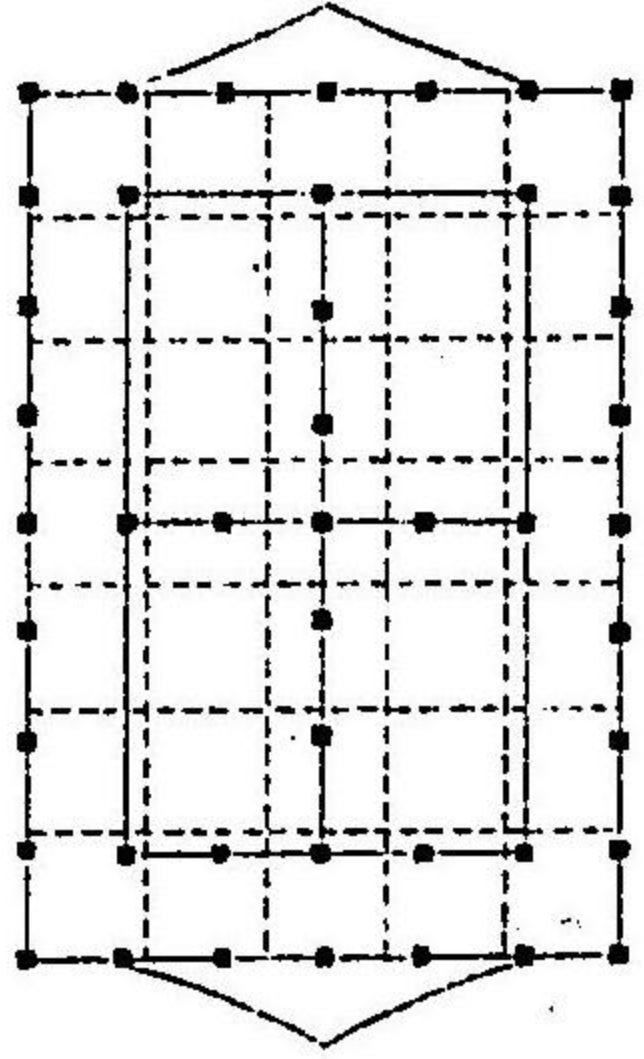
一重 (第三十六圖)



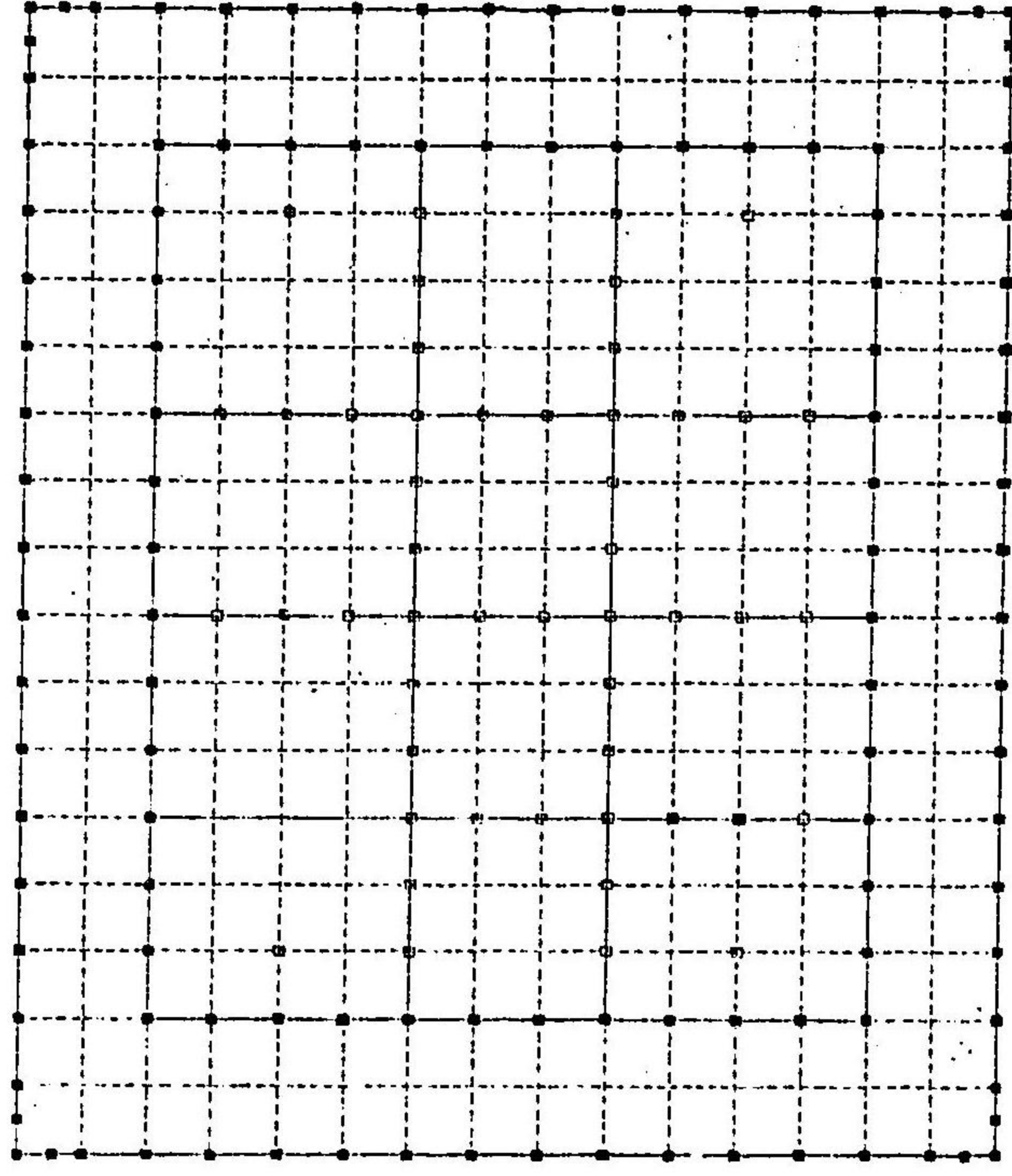
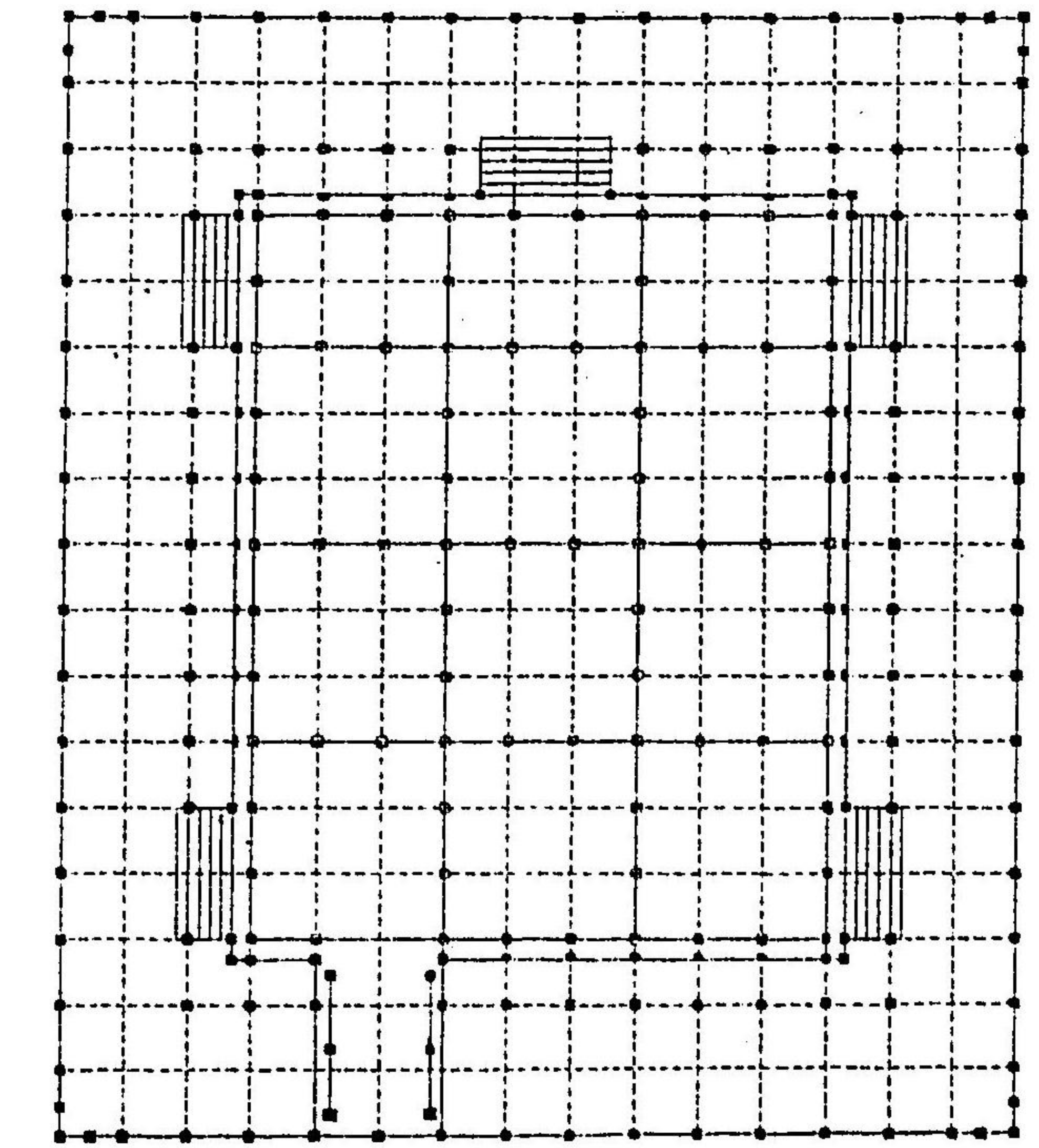
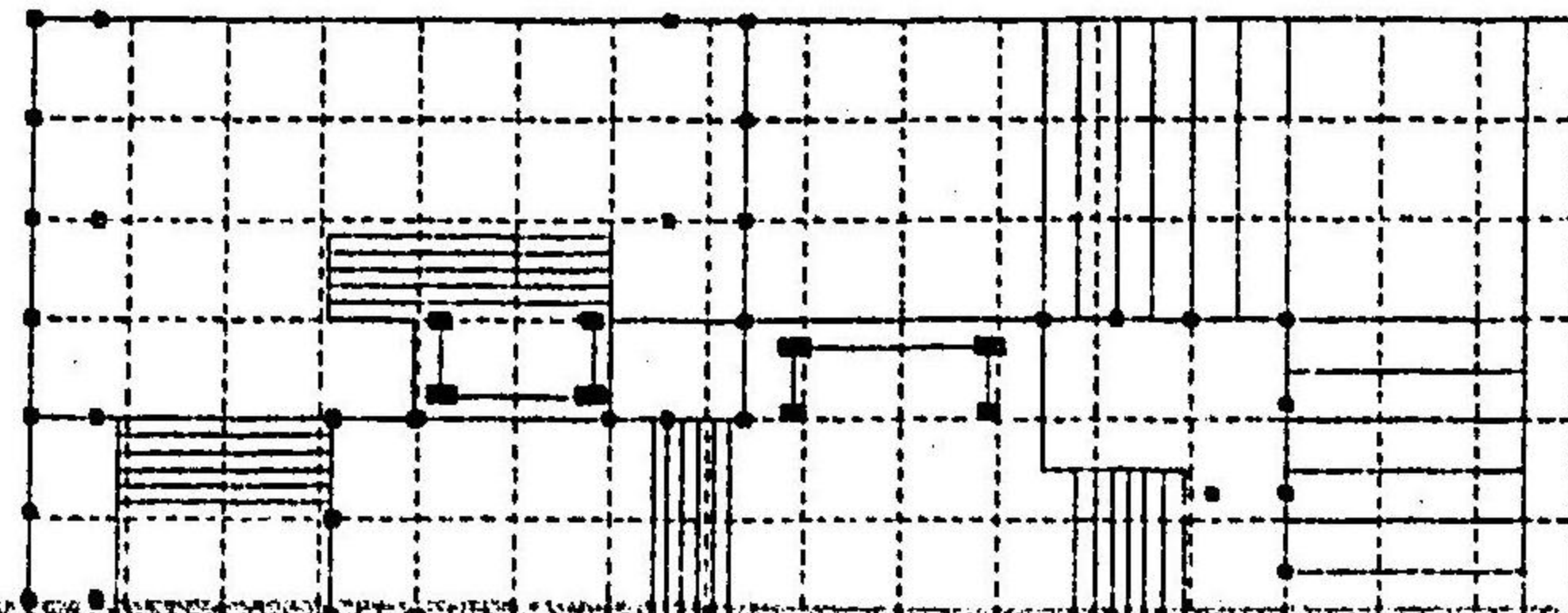
三重 (第三十四圖)



四重 (第三十八圖)



五重 (第三十九圖)



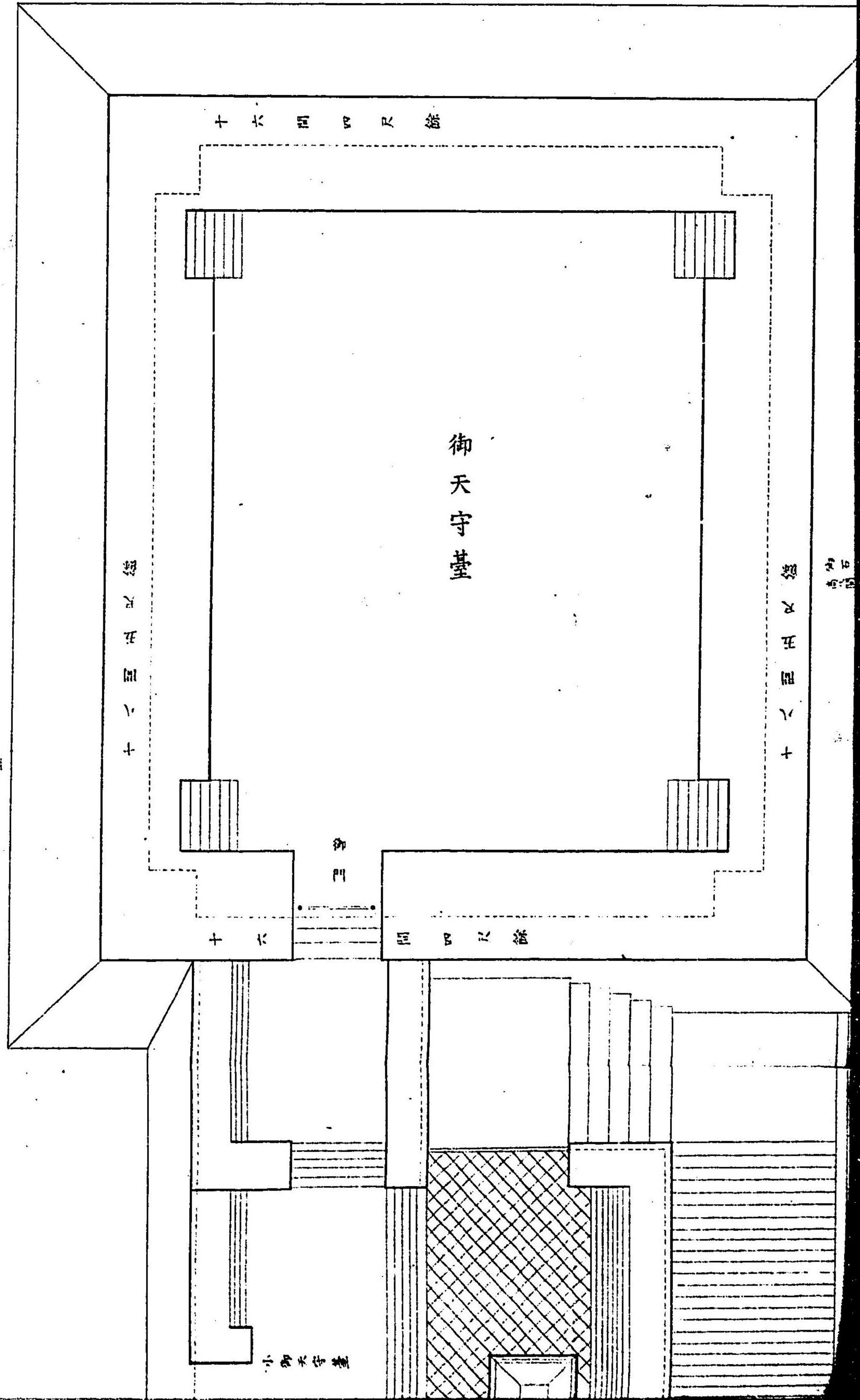
小天主堂 (第三十三圖)

穴藏 (第三十四圖)

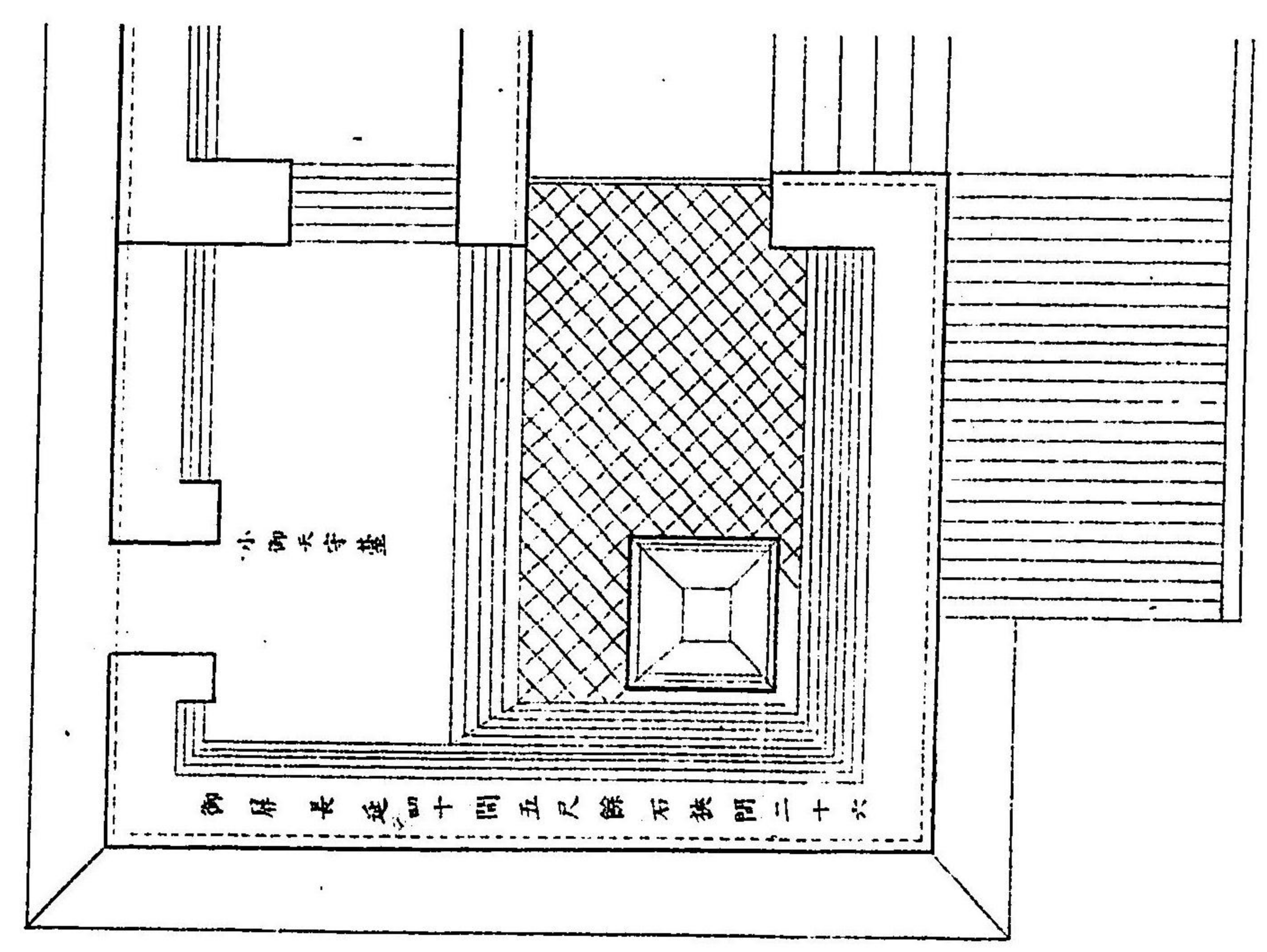
矢倉

初重 (第三十五圖)

五重八九六尺間四重以下八七尺間ノ地測
 一八各室區畫線一八坪割線一八通り柱
 但小天主堂ニ在リテハモ亦通柱ニア

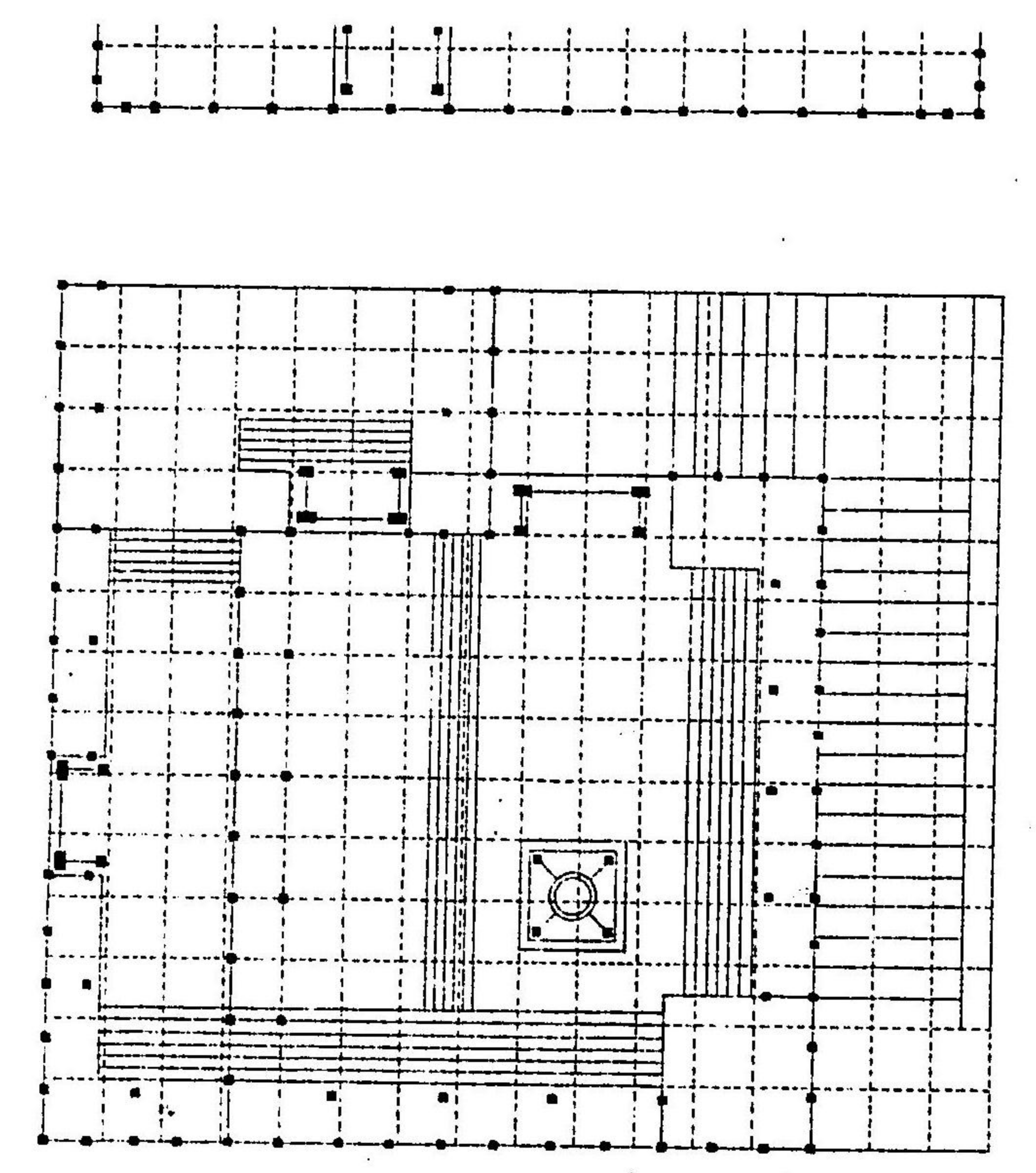


四七尺間ニテ南北十七間東西十五間
 地ノ原圖ハ六尺三寸間ヲ用ヘタリ今改メスシテ刊セリ
 八間ニ換算スレハ前記ト同一ノ間尺トナルナリ



南

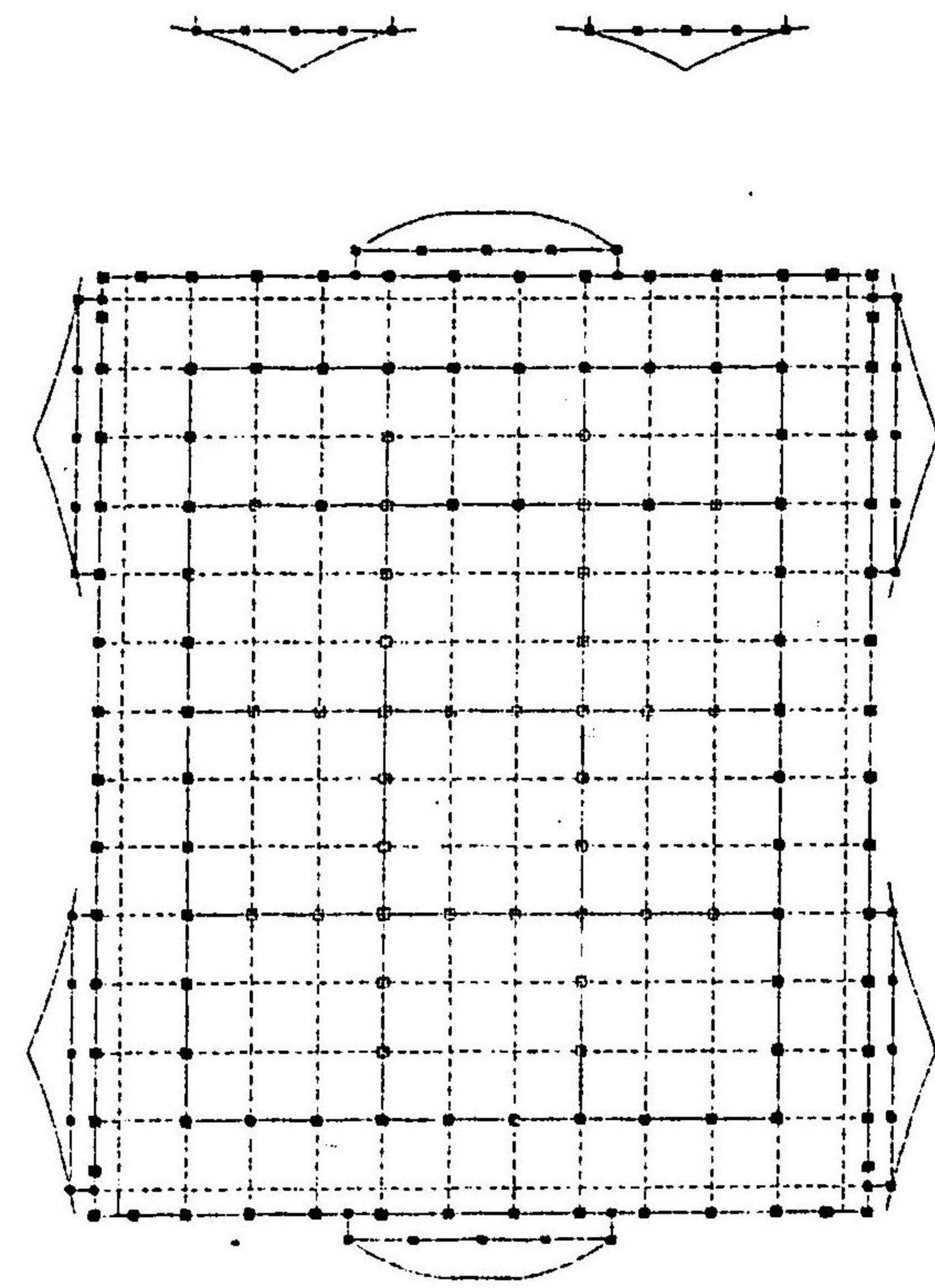
八尺間四重以下ハ七尺間ノ地割ナリ
 四畫線ハ坪割線ハ通り柱ハ並柱ナリ
 土臺ニ在リテハモ亦通柱ニアラス
 小天主堂 (第三三圖)



南

二重

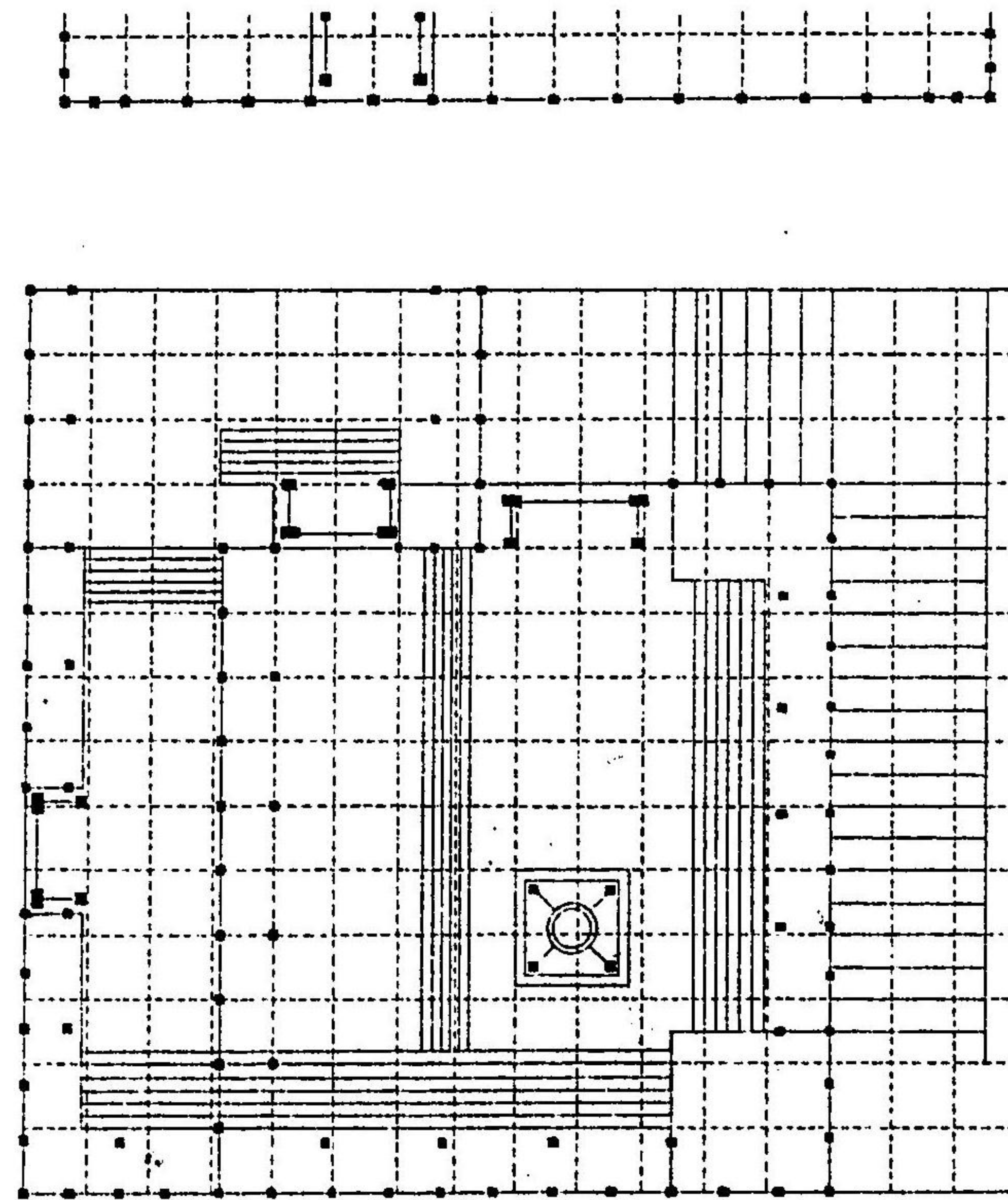




二重

(第五十六圖)

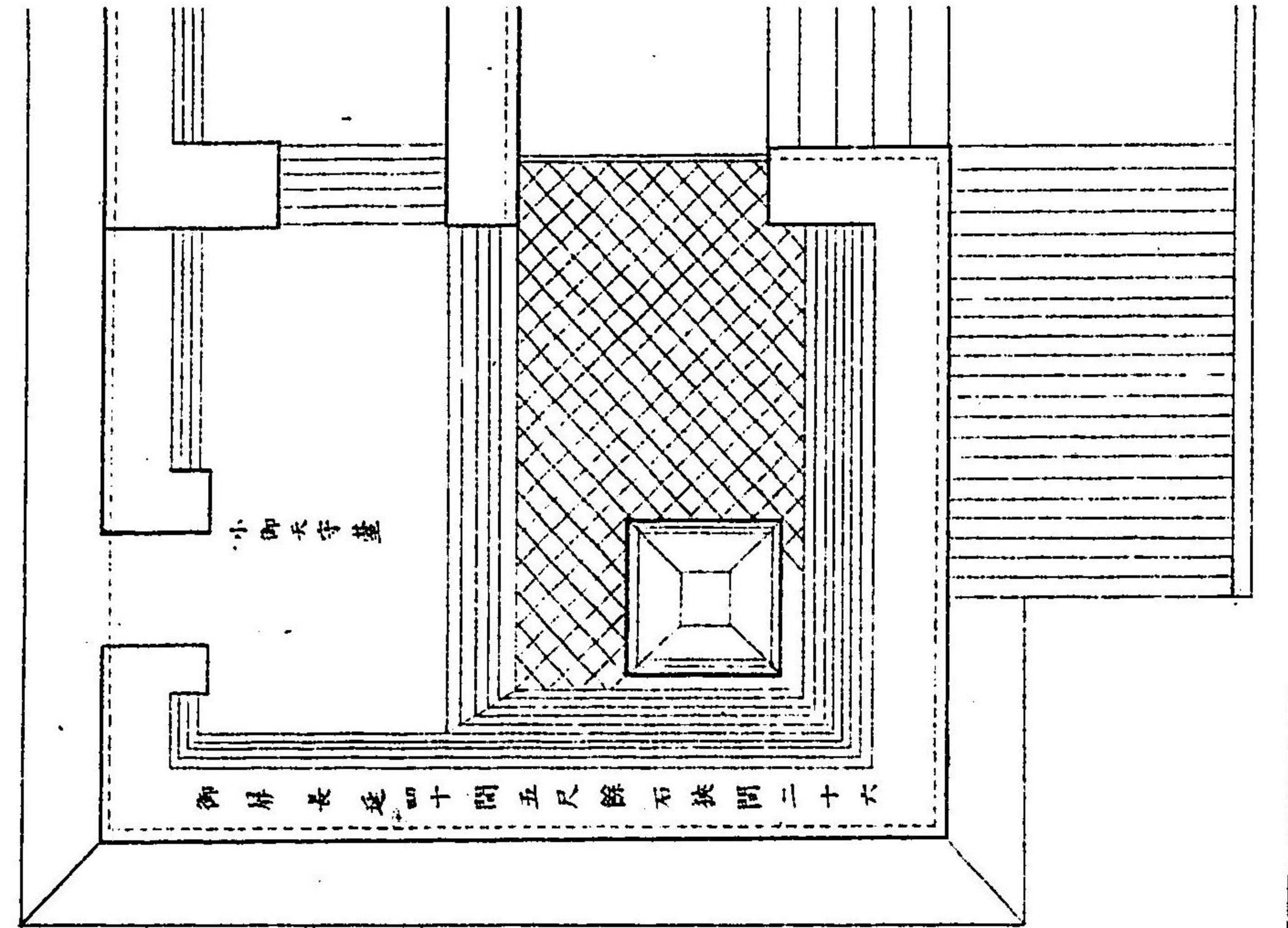
南



八尺間四重以下ハ七尺間ノ地割ナリ
 四畫線ハ坪割線ニハ通り柱ヲハ並柱ナリ
 上登ニ在リテハモ亦通柱ニアラス

小天主堂

(第五十三圖)

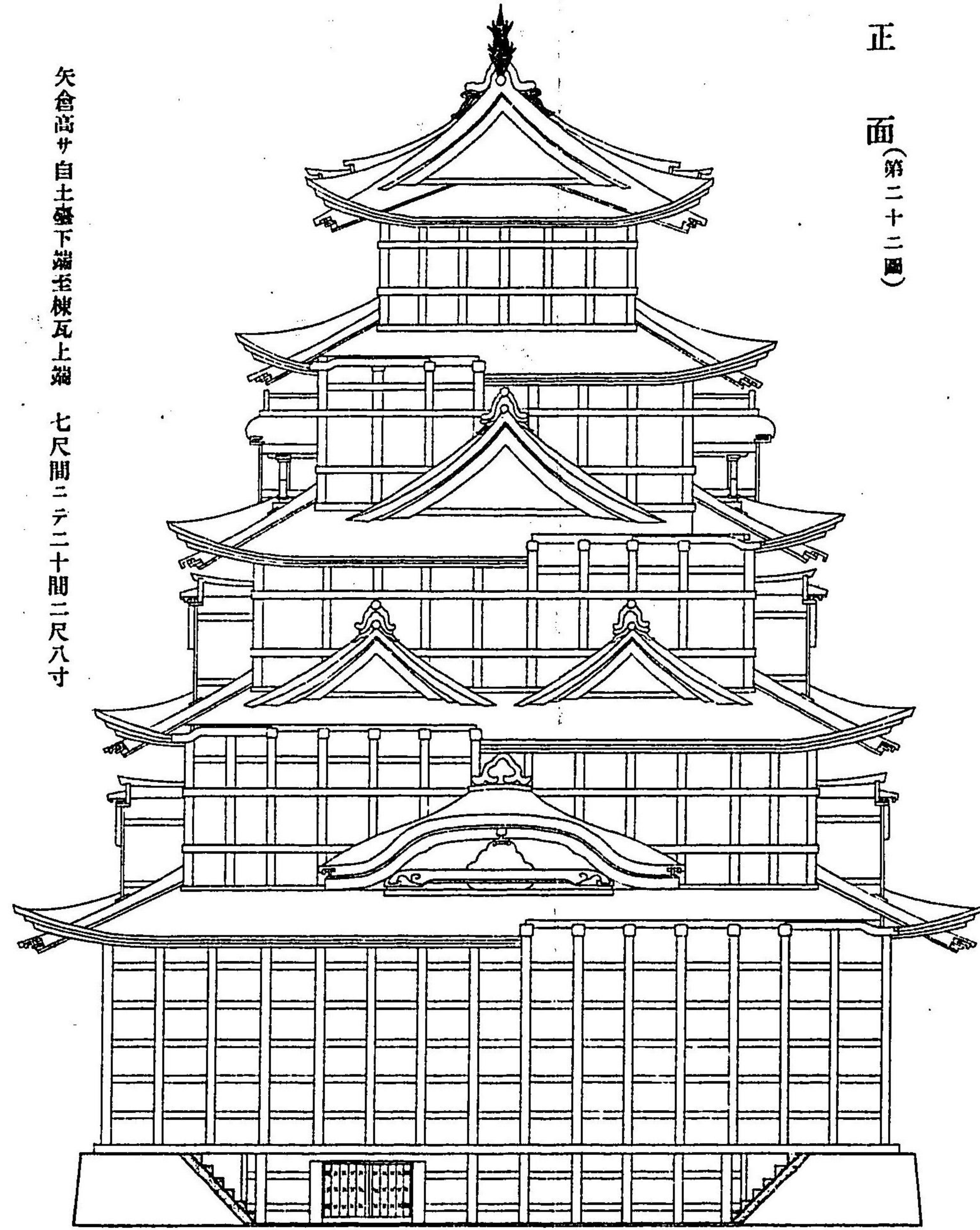


南

御階長延四十間五尺餘石狹間二十六

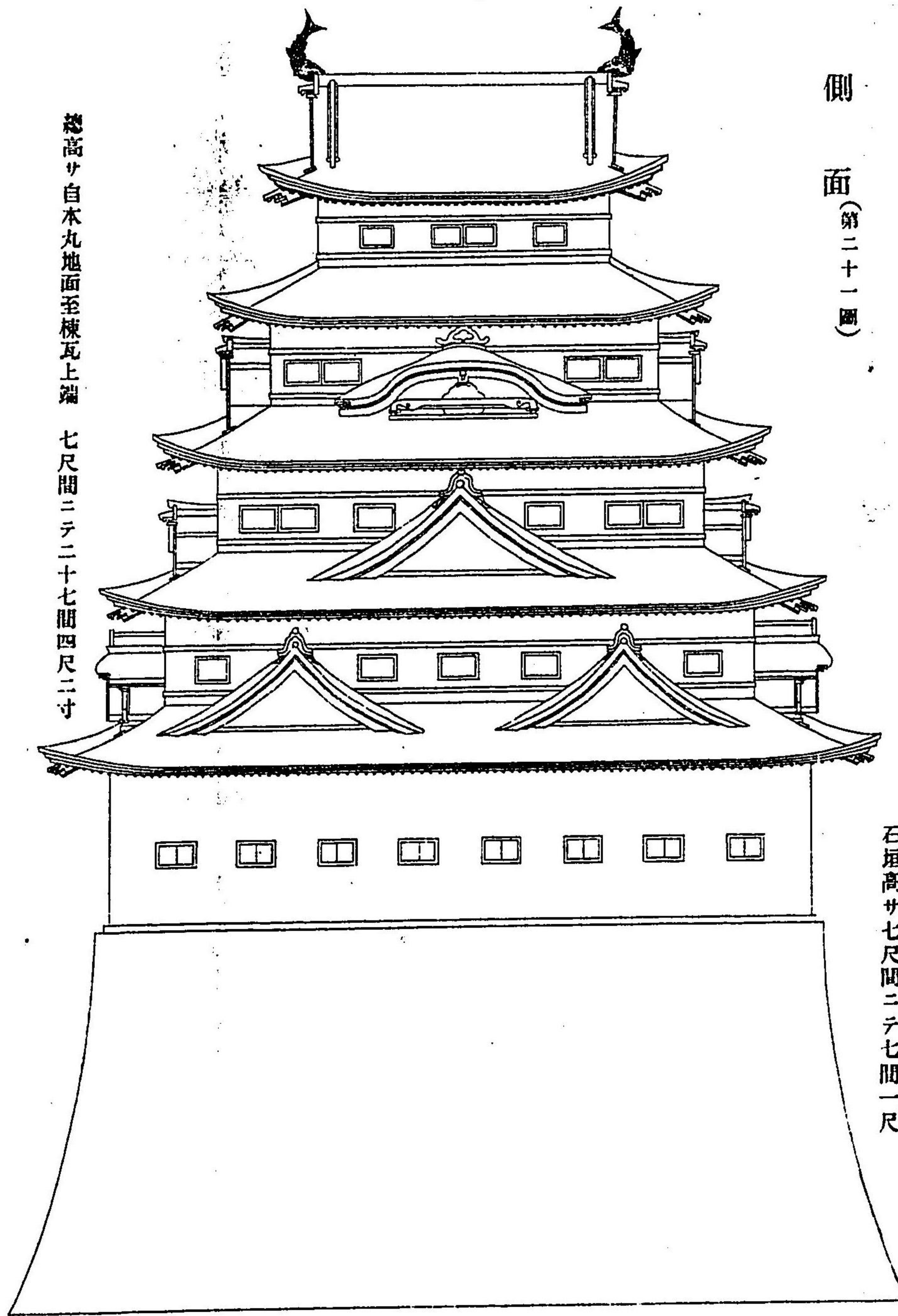
德川氏ノ大坂城天主建圖

正面 (第二十二圖)



矢倉高サ自土盤下端至棟瓦上端 七尺間ニテ二十間二尺八寸

側面 (第二十一圖)



總高サ自木丸地面至棟瓦上端 七尺間ニテ二十七間四尺二寸

石垣高サ七尺間ニテ七間一尺

桁行十四間梁行十二間此内周圍一丈零五寸ヲ武者走トシ其内部ヲ座敷トス座敷間數十二室ナリ柱數百三十五本ニシテ此内並柱百本通リ柱三十二本

二重平面地割ハ第二十六圖ノ如シ

三重

桁行十一間半梁行九間半此内周圍八尺七寸五分ヲ武者走トシ其内部ヲ座敷トス座敷間數九室ナリ柱數九十五本ニシテ此内並柱八十三本通リ柱十二本

三重平面地割ハ第二十七圖ノ如シ

四重

桁行九間梁行七間此内周圍七尺ヲ武者走トシ其内部ヲ座敷トス座敷間數六室ナリ柱數七十本シテ此内並柱六十四本通リ柱六本

四重平面地割ハ第二十八圖ノ如シ

五重

桁行七間梁行五間此内周圍凡ソ六尺ヲ武者走トシ其内部ヲ座敷トス座敷間數四室ナリ但五重ニ限リ内部ハ凡ソ六尺間ノ割出シトス柱數四十五本ナリ

五重平面地割ハ第二十九圖ノ如シ

附記 雷災及ヒ修造

首記 雷災及ヒ修造等ノ概要

本書卷首沿革及ヒ徳川氏修築第十五章ニ叙述セル如ク此城ノ殿館并ニ諸建物ハ寛永中大成シ堅牢壯觀ヲ極メタリシニ萬治三年六月十八日雷青屋口火薬庫ニ震シ寛文五年正月二日雷又天主矢倉ニ震シ天明三年十月十一日雷復タ大手門ニ震セリ此三回ノ雷災ニテ焼失毀壞ノ事アリシニ當リ徳川氏ハ獨リ天主矢倉ヲバ再建セサリシカド其他ハ直チニ修繕ヲ加ヘ特ニ弘化二年ヲ以テ殿館其他ノ大修繕ニ着手シ大手門ヲモ再建シ寛永ノ舊壯觀ヲ維持スルニ至リタリ此編年世ヲ次第シテ右雷震修繕及ヒ再建等ノ事ヲ叙述スト云フ

第四十章 青屋口火薬庫天主矢倉及ヒ大手門ノ雷災
青屋口火薬庫ノ爆裂殿館其他石垣橋梁等ノ破壊及ヒ修造并ニ衛戍者ノ死傷

四代將軍家綱ノ治世萬治三年六月十八日大坂大雷雨是夜西ノ下刻午後七時雷青屋口火薬庫ニ震シ爲メニ庫中貯藏ノ火薬二萬千九百八十五貫六百匁、鉛丸大小四十三萬千七十九箇、火繩三萬六千六百四十筋爆發飛散シ本丸殿館、天主矢倉、并ニ

矢倉、多門、青屋口引橋、破損シ、石垣崩レ、山里丸矢倉、多門、市正曲輪加番小屋、二之九ノ木坂以北青屋口以南ヲ市正曲輪ト云フ豊臣氏圖解第八章參看藏曲輪米藏、藏曲輪一ニ玉造廢場トモ稱ス悉ク破隕ス、寛永三年殿館、天主矢倉等營建ノ後二十四年ニシテ此事アリ

是時在番ノ加番土岐山城守頼行ハ負傷シ家人五人焼死シ數人毀傷シ岩城伊豫守重隆モ少シク負傷シ家士二十人即死シ八十餘人負傷シ小笠原土佐守貞信ハ其身ハ恙無カリシカド家士四人即死シ四十四人負傷セリ城中死傷凡ソ百五十餘人アリキ城外ニ在リテハ役人屋敷、與力同心屋敷、并ニ市街家屋千四百八十一戸毀損シ三人即死セリ其他士民ノ家屋亦多ク破損セリ是時在番ノ大坂城代ハ松平丹波守光重、京橋口定番ハ安部攝津守信盛、玉造口定番ハ保科彈正忠正員ナリキ

嚴有院殿御實記萬治三年庚子六月廿三日

けふ大坂より注進有しはこの十八日大雷雨にて酉下刻青屋口火薬庫へ雷震し火薬二万九千八百八十五貫六百匁鉛玉大小四十三万七千九百八十九火繩三万六千六百四十筋遠近に碎て飛ちりしかは天守御殿櫓多門引橋破損し石墨崩れ玉造口米廩山里丸櫓多門市正曲輪加番小屋悉く墮て土岐山城守頼行其身も毀傷し家人焼死五人毀傷數人岩城伊豫守重隆も少しく毀傷し家士二十人死八十餘人毀傷し小笠原土佐守貞信家士四人死四十四人毀折し城外有司官宅與力同心屋舎市井千四百八十一軒破損し三人死し其他士民の家多くそこなはれしとなり

廿四日目付島田久太郎忠政にはかに暇下され坂城に赴かしめらる雷震のさまをみせしめたまひ土岐山城守頼行岩城伊豫守重隆はしめ毀傷の徒よく治療せしむへき旨懇に命せられかつ御家人の屋舎修理をも仰付らる同事もて普第衆まうのほり國持大名使して御けしき伺ふ

七月特ニ老中松平伊豆守信綱ヲ此城ニ遣シ雷震ニ因リ破壊セル箇所修理其外一切ノ事ヲ處辨セシム

嚴有院殿御實記萬治三年庚子七月五日

目付島田久太郎忠政大坂より歸謁し雷震の様言上すよて諸老臣御前にめされ坂城は天下樞要の地なれば一日もすて置へきにあらす不日に修理せらるへし秋暑はけしき折からといへとも松平伊豆守信綱阿部豊後守忠秋兩人のうちにて一人まかりよろしくはからふへき旨命あり信綱忠秋畏て御次に退き闕をとりしに信綱闕にあたりしかはさらは信綱まかるへきよし仰出さる

十六日松平伊豆守信綱大坂への暇給はり金五十枚時服十馬一疋給ふ勘定大工及び従行の徒みないごま下され醫員久志本式部常好も信綱に付そひまかるへき旨命せられ暇下さる

天主矢倉ノ焼失多門大番所等ノ延焼及ヒ多門等ノ修造

寛文五年正月二日夜戌刻午後八時雷天主矢倉ニ震シ天主矢倉焼失シ其火延テ奥大番所、糶藏等モ亦焼失セリ寛永三年天主矢倉營建ノ後三十九年ニシテ此事アリ此時在番ノ大坂城代ハ青山因幡守宗俊、京橋口定番ハ板倉内膳正重矩、玉造口定番ハ渡邊丹後守吉綱ナリキ爾來此城ニ天主矢倉ヲ建テス

嚴有院殿御實記寛文五年乙巳正月六日

けふ大坂より急脚をさせてこの二日坂城の天守へ雷震し天守ごとく焼亡し番士の直廬及び糶藏類焼せし旨注進ありよて目付稻生七郎右衛門正倫を急にかしこにつかはされおなし事よて家門使出御けしき伺はる

八日目付島田藤十郎重頼いごま給ひ坂城につかはさる

攝營秘録

嚴有院様御代寛文五乙巳年正月二日戌刻雷落即刻御天守出火翌三日午の刻迄焼る餘燒酉之下刻迄あり焼失爲見分御目付稻生七郎右衛門島田藤十郎被相越候

大坂御城御天守圖附記

寛文五乙巳年正月二日亥下刻大坂御天守雷火奥御番所糶藏百間之所五十間焼失

大手門ノ焼失

十代將軍家治ノ治世天明三年十月十一日夜雷大手門ニ震シ大手門焼失セリ寛永五年大手門營建ノ後百五十五年ニシテ此事アリ此時在番ノ大坂城代ハ戸田因幡守忠寛、京橋口定番ハ井上筑後守正國、玉造口定番ハ稻垣長門守定計ナリキ後六十五年嘉永元年ニ至リ再建セリ

俊明院殿御實記天明三年癸卯十月十七日

此月十一日夜大坂城門雷火にて焼しにより溜詰諸第衆高家雁の間詰奏者番菊の間縁類詰をのく父

子諸番諸物頭布衣以上出仕して御けしきを伺ふその他万石以上の病者幼稚の輩は直月の老臣并に烏

居丹波守忠意の邸に使用し在封は書簡をばせて御けしきうか、ふ
泰平年表

天明三年癸卯十一月十一日大坂城大手御門雷火にて焼失

第四十一章 大坂町人ノ獻金殿館其他ノ大修造及ヒ大手門ノ再建

十二代將軍家慶將軍職ニ補セシヨリ七年天保十四年大坂城ノ殿館其他ノ大修造
ヲ爲サンカ爲ニ大坂町人鴻池善右衛門初メ百五十五人ニ命シ金百五十五萬五千
五百兩ヲ獻上セシメタリ其人名及ヒ獻納金額ハ左表ノ如シ此時在番ノ大坂城代
ハ青山下野守忠良、京橋口定番ハ米倉丹後守昌壽、玉造口定番ハ米津越中守政談、
西町奉行ハ久須美佐渡守祐明、東町奉行ハ水野若狹守道一ナリ

按スルニ是レヨリ先キ三十四年十一代將軍家齊ノ治世文化七年七月十一日ヨ
リ本丸用ノ石材運搬ニ付此城ノ諸門ノ片扉ヲ開クコトアリ思フニ此時既ニ寛
永三年殿館營建ノ後百八十四年ヲ經過セルコトナレハ殿館其他ノ總修繕ヲ爲
スヘキ時期來リテ先ツ石材ノ準備ニ著手セシモノナル乎然ルニ家齊治世ノ文
化文政ハ徳川氏ノ奢侈其極ニ達シ諸般ノ支出ノ費途際限アルコト無ク且ツ世
ハ昇平無事ナルヲ以テ他ノ用度ヲ節シテ此番城ノ修繕等ノ武備ニ専用スルコ

トハ當時ノ事情ノ許サ、ル所アリ勢ヒ此總修繕ヲ斷行スルニ至ラザリシ者ニ
非サル乎然ルニ天保八年家齊叙任シテ大御所ト稱シ家慶將軍ニ補シ天下ハ飢
饉ニ苦シミ幕府ハ遽カニ費用ヲ節制スルコトニ勉メ加之是歲二月十九日大鹽
平八ノ亂興ルニ會シ後四年天保十二年大御所ハ薨シヌ是ニ於テ幕府ハ大ニ用
度ヲ節約スルト共ニ此城ヲ修繕スルニ決定セルモノナラン

大御番所年代記

文化七庚午 七月十一日 御本丸御用石運ニ付諸御門片扉開

因ニ記ス大坂城門ハ總テ平常ノ切リニテ門扉中ニ切り明ケタル潜リ戸^{是レ}
ト稱ヨリ通行スルナリ城代通行ノ時ノミ僅ニ片扉ヲ開キ城代通り了レハ復^{ヲ開}
タ故トノ如クニ切ルナリ是故ニ諸門ノ片扉ヲ開放スルコトノ如キハ此城
ノ警戒上ニ於ケル重要ナル事項トス是レ大御番所年代記ガ特ニ此片扉ヲ開
キシコトヲ記載セシ所以ナリ

大坂城本丸殿館其他大修造ニ付天保十四年獻金セル大坂町人々名并ニ金額表 第九表

天保十四年卯七月

大坂城誌第七卷 大坂城建築叢考 徳川氏 圖解附記修造

大坂御城御普請ニ付獻金之面々名前書此獻金ノ當時大坂城代タリシ丹波篠山藩主青山家藏本
七月廿二日改テ本極リ被仰渡候

一拾萬兩ツ、 鴻池善右衛門 加島屋久右衛門 加島屋作兵衛
 一六萬兩ツ、 辰巳屋久右衛門 千草屋宗十郎
 一五萬兩ツ、 炭屋安兵衛 平野屋五兵衛 三井八郎右衛門
 一四萬兩ツ、 米屋平右衛門 米屋喜兵衛 近江屋半左衛門
 一參萬五千兩ツ、 鴻池庄兵衛 炭屋彦五郎
 一貳萬兩ツ、 鴻池善五郎 島屋市兵衛 天王寺屋忠次郎
 米屋長兵衛 住吉吉次郎 泉屋甚次郎
 一七千五百兩ツ、
 拾九軒合八拾五萬五千兩
 但鴻新、近久、格別御差支ニ付御免之事七月廿二日被仰渡候
 一貳萬五千兩 鴻池市兵衛 加島屋作五郎 加島屋作次郎
 一貳萬兩ツ、 炭木屋万太郎 加島屋十兵衛 鹽屋孫左衛門
 雜喉屋三郎右衛門 加島屋十兵衛
 山家屋權兵衛 鴻池伊兵衛 傳法屋五左衛門
 升屋傳兵衛 米屋伊太郎 鴻池徳兵衛
 一壹萬兩ツ、 鴻池伊助 泉屋六郎右衛門
 吉峯屋次郎右衛門
 七月廿五日返答
 一貳拾四萬五千兩
 七月廿八日被仰渡候、高四拾五萬千兩と有之候得共算當致見候處四拾五萬五千五百兩ニ相成

接スルニ原
本免字下恐
ラケル無字
ナ脱ス

一貳萬兩 掃磨屋仁兵衛
 一壹萬五千兩宛 松屋伊兵衛 平野屋四郎五郎
 一壹萬貳千兩宛 日野屋茂兵衛 小橋屋伊右衛門
 一壹萬千兩 天王寺屋伊右衛門
 一壹萬兩宛 天王寺屋彌七 近江屋權兵衛 小勝屋利平
 難波屋太助 平野屋伊平 平野屋新兵衛 平野屋孫兵衛
 天満屋市郎右衛門 蒲島屋次郎吉 河内屋平右衛門
 一八千兩宛 小西佐兵衛 笹屋勘左衛門 錢屋忠兵衛
 伊丹屋四郎兵衛
 一六千兩 吉野五運
 一五千兩宛 高地三郎兵衛 大坂屋新五郎 桑名屋庄助
 萬屋伊太郎 錢屋今右衛門 豊島屋安五郎 松屋清兵衛
 扇屋利兵衛 島屋市五郎
 一參千兩宛 辰巳屋市兵衛 鴻池千代 小西伊兵衛
 油屋善兵衛 備前屋徳兵衛 日野屋七郎兵衛 日野屋總七
 日野屋作五郎 平野屋甚九郎 米屋文兵衛 米屋喜八
 錢屋作兵衛 河内屋又兵衛 白木屋新之助
 吉野九郎右衛門 平野屋市兵衛 昆布屋伊兵衛 小山屋忠兵衛
 信濃屋勘四郎 大根屋小兵衛 布屋甚九郎 小西勘兵衛
 大和屋又四郎 長崎屋萬次郎 河内屋總三郎 小西宇兵衛
 加賀屋四郎兵衛 米屋宗兵衛 太和平 大坂屋卯之助
 大坂城誌第七卷 大坂城建築考 徳川氏 圖解附記修造 四一七

伊丹屋七郎兵衛	丹波屋平兵衛	松屋加右衛門	筋屋正右衛門
油屋吉藏	萬屋小兵衛	辰巳屋清兵衛	鍵屋利兵衛
一貳千五百兩	圓升屋庄右衛門		
一貳千兩宛	肥前屋又兵衛	肥前屋徳兵衛	平野屋作兵衛
平野屋平九郎	升屋源左衛門	繪具屋吉兵衛	蛇香屋八右衛門
米屋三右衛門	田中屋清兵衛		
此分世話斗	天王寺屋治兵衛	加島屋次郎三郎	山本三四郎
鍵屋新之助	播磨屋九兵衛	天王寺屋清右衛門	加島屋七兵衛
鹿島屋清右衛門	堺屋善之助	大鶴屋九藏	豊島屋與七
熊野屋三兵衛	袴屋善兵衛	平野屋庄助	加賀屋林兵衛
八荷屋彌助	天満屋甚之助	油屋治兵衛	加島屋三郎兵衛
献上			
一貳千兩	兩替店	三井元之助	
一四拾五萬五千五百兩			
總一五拾五萬五千五百兩			

越エテ一年弘化二年十一月二十六日ヲ以テ本丸殿館其他ノ總修繕ニ著手セリ寛
 永三年家光ノ殿館等ヲ營建セル後實ニ二百十九年ナリ此時在番ノ大坂城代ハ松
 平伊賀守忠優ニシテ定番ハ京橋玉造共ニ前年天保十ト同一ナリ
 大御番所年代記

弘化乙巳十一月廿六日總御修復初ル
 同三丙午正月廿四日總御修復ニ付火消御城入御達

此修繕ノ勘定其他ヲ整理シタル者ハ勘定吟味方改役笹本幾二郎勘定方石川長次
 郎ナリ其他工作等ニ關係セル諸般ノ掛員等ノ姓名ハ今傳ハラス
 弘化三年十月七日玉造口冠木門ノ修繕ニ著手シ翌四年二月十七日玉造口大門ノ
 修繕成レリ乃チ是日二月十ナリ以テ京橋口大門ノ修繕ニ著手セリ

大御番所年代記
 弘化三丙午十月七日玉造冠木御門御修復、假張御番所出來、十二月廿八日成
 同四丁未二月十七日玉造御門臺御修復成ル、同日京橋御門臺御修復初ル

弘化四年六月十一日幕府ハ此城ノ本丸殿館其他ノ修繕ノ事ニ與カレル笹本幾三
 郎石川長次郎等ニ賞ヲ行ヘリ思フニ其他ノ諸掛員ニモ賞ヲ行ヘルコトナラン亦
 攷フル所ナシ

泰平年表後記
 弘化四年丁未六月十一日御勘定吟味方改役笹本幾三郎御勘定石川長次郎儀大坂御城御本丸御殿向其
 外御修復御用相勤候ニ付爲御褒美金貳枚別段銀十枚ツ、被下之

是歲六月二十二日追手冠木門ノ修繕ニ著手シ十一月十六日追手大門石垣ノ修繕

ニ著手ス

大御番所年代記

弘化四丁未六月廿二日追手冠木御門御修復初ル、十一月十六日追手御門臺御修復初ル

清云フ大御番所年代記ニハ單ニ門臺トノミアレトモ門臺石垣ノ修繕ナルヘシ

次ニ追手門普請即チ建築ノコトアリ之ヲ證スヘシ元大坂同心安達重固天保五年八月生

トイフ者アリ嘗テ余ニ語リテ云フ私十二三才ノ頃ト覺ユ私ノ父ハ此御普請方

ヲ勤メタリ御本丸ノ御普請ハ全ク新規建テ直シ同様ナリシコトナラン私ハ

「カグラサン」ニテ梁ヲ引揚ケ居ルコトヲ記憶セリ其梁ハ頗ル巨大ナル者ニテ

下ニ在ル時ハ其梁ノ向フ側ニ居ル人ノ顔ハ見得サリシト

又云フ其梁ガ「カグラサン」ニテ漸々ニ上ヘク引揚ラレテ恰モ彌次郎兵衛

小兒ノ玩具ニ竹製ノ小横杆ノ兩端ニ紙製ノ人形ヲ付著シ其中央ニ短ノ如ク兩端互ニ一上一下

支柱アリ之ヲ指頭ニ樹テ、小兒ノ戯ル、者之ヲ彌次郎兵衛ト云フ

スルヲ見テ時ノ御城代ハ微笑ヲ漏ラシ居ラレタリシト

嘉永元年正月十七日追手大門再建ニ著手シ十一月廿日成レリ天明三年燒失ノ後六十五年ニシテ此再建アリ

本丸其他ノ總修繕ハ是歲五月十八日ヲ以テ大成セリ此時在番ノ大坂城代ハ内藤

紀伊守信親ニシテ定番ハ亦前年天保十一年ト同一ナリキ

大御番所年代記

嘉永元戊申正月十七日追手御門臺御普請初ル、十一月廿日成ル、五月十八日總御修復皆出來

十三代將軍家定ノ治世安政二年紀元二千五百十五年三月廿九日追手内城代屋敷總修繕ニ著

手シ同三年正月二十七日城代屋敷内ニ土藏一棟ヲ建設シ同五年五月十九日日本丸

元金藏修繕成レリ此時在番ノ大坂城代ハ土屋采女正實直、京橋口定番ハ本多肥

後守忠鄰、玉造口定番ハ田沼玄蕃頭意尊ナリキ

大御番所年代記

安政二乙卯三月廿九日追手口御城代御上屋敷總御修復、

同三丙辰正月廿七日追手口城代屋敷内土藏壹ヶ所御取建、十一月御本丸御修繕所割瓦芥御取捨之御

達 同五戊午五月十九日御本丸御金藏御修復出來

弘化二年本丸ノ總修繕ニ著手セルヨリ此ニ至リテ前後十一年ノ大工作ヲ經テ此

城復タ寛永ノ舊壯觀ヲ呈スルニ至レリ獨リ天主矢倉ノ再建アラサルノミ

附言

此城ノ殿館天主矢倉并ニ諸大門矢倉多門倉庫高堀其他共堅牢壯嚴ヲ極メタル者ナルコトハ前段圖解上下編ニ詳記セル所ノ如シ萬治以來再三雷火ニ罹リテ多少ノ焼失アリタレトモ亦前段ニ記セルカ如ク天主矢倉ヲ除ク外之ヲ修繕再造シ加フルニ弘化嘉永安政ノ十餘年間ニ涉リテ本丸殿館ト共ニ城中全部ノ諸建物ニ大修繕ヲ施シタルモ亦前記ノ如ク星霜二百四十餘年依然トシテ此城ノ壯觀ヲ維持シ來リシニ明治元年正月九日本丸大臺所ヨリ發シタル火災ニ罹リテ本丸ノ諸建物ハ殿館ト共ニ悉皆灰燼ト成リテニ之丸三之丸及ヒ城北ノ鳴野藏場ノ諸建物モ亦多クハ烏有ト成レリ而シテニ之丸南手ノ一三三六ノ四矢倉西手ノ千貫、坤_未乾_亥ノ三矢倉北手ノ伏見矢倉及ヒ大手京橋ノ兩門并ニ多門ノ如キハ幸ニ此火災ヲ免カレ現在シテ聊カ此城ノ餘影ヲ今日ニ存スト云フ徳川氏交戦紀要 第三十二章參看

附記 朝廷ノ鎮臺建置

第四十二章 朝廷ノ大坂鎮臺建置

本編卷首以來叙述セル如ク此城ハ本願寺以來兵馬控衛ノ時ニ當リ畿甸ニ於テ尤モ重要ナル位地ヲ占メ殊ニ豊臣氏ニ在リテハ秀吉ノ居城トシテ天下ノ大權ヲ此城中ニ掌握シ徳川氏ニ至リテハ此城ヲ以テ關西ノ鎮府ト爲シ亦治ニ亂ニ尤モ重キヲ此城ニ置キシガ明治五年二月ヲ以テ此城ニ大坂鎮臺ヲ建置セラル其管轄并軍隊ノ配置等ノ如キハ今省略ニ從フ

大坂城建築彙考地勢篇^{第一章} 追加

石山ノ名稱ノ由來

今ノ大坂城ノ地ヲ石山ト云ヒシコトハ蓮如^{兼壽}ノ本願寺別院ヲ斯ニ創建セシ頃ヨリ始マレリ余其由來ヲ尋討スルコト多年ニシテ未ダ要領ヲ得サリシニ頃日適マ憶ヒ得シコトアリソハ明治十年ノ初冬ヲ以テ余ノ近江國石山寺ニ詣リテ蓮如ノ六歳ノ肖像ヲ見シコト是レナリ仍テ石山寺縁起并ニ蓮如六歳肖像縁起ヲ石山寺ニ乞ヒ諸レテ余ノ曾テ目撃セシ所ト參照シテ今左ノ考證ヲ得タリ

其一 近江ノ石山ハ全山處々磐石露ハレ殊ニ山腹ニハ蓮華ニ髣髴タル八朶ノ靈石有リ是レ石山ノ名ノ由テ生セシ所以ニシテ丈六ノ觀音此蓮華石上ニ安置セラレ前ニ琵琶ノ湖アリテ人ヲシテ弘誓ノ法ノ深キヲ思ハシメ後ニ秀麗ナル山アリテ人ヲシテ大悲ノ惠ノ高キヲ仰カシム誠ニ奇ラシキ勝地ニシテ昔ハ紫雲常ニ此山ニ懸レリト云ヒリ

石山寺縁起

石山寺創立より以前 天智天皇の大津宮に在るとき此山に常に紫雲の懸るを覽たまひ勅使を遣はされ之を實見せしめられしに山腹に入葉蓮華の岩石ありて奇雲降て帯の形を爲し賊に大聖垂跡の

大坂城誌 大坂城建築彙考地勢篇追加 石山名稱由來